

第16号

特集「JIBSN五島セミナー2018」

**JIBSNレポート第16号の発刊によせて**

境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) が設立されてから7回目のセミナーである五島セミナーを今回は取り上げます。本セミナーは 2018 年度の JIBSN 主催のセミナー並びに 2018 年 10 月 27 日から 31 日まで催行された『ボーダーツーリズム 五島・濟州島』のイベントとして 2018 年 10 月 28 日に長崎県五島市にて実施されたものです。本セミナーでは、JIBSN 代表幹事である野口市太郎・五島市長、小野徹・礼文町長、伊豆芳人・ボーダーツーリズム推進協議会会長によるご挨拶の後、日本の境界地域における行政交流と地域連携の現状及び今後の課題に関する共通理解を深めることができました。セミナーの会場手配をはじめさまざまなご協力をいただいた五島市の皆様にはこの場を借りて改めてお礼申し上げます。また、今回のセミナー後に初めて実現した長崎県五島市と韓国・濟州島を結ぶチャーター機を使ったツアー旅行に関する今後の進展に期待しています。

(副代表幹事代行 古川浩司)



JIBSN 五島セミナー・プログラム

境界地域研究ネットワークJAPAN JIBSN

JIBSN 五島セミナー

国境を越えて 地域をむすぶ

～交流・観光・教育

開会 13:00
 ご挨拶 13:30～13:50 司会 古川浩司 (JIBSN 副代表代行/中京大学)
 野口市太郎 (JIBSN 代表/五島市長)
 小野徹 (礼文町長)
 大浜知司 (竹富町政策調整監)
 伊豆芳人 (ボーダーツーリズム推進協議会会長)

セッション1 境界自治体の行政交流 14:00～15:30
 司会&コメント 古川浩司
 三谷将 (稚内市サハリン課)
 吉田隆 (隠岐の島町教育委員会社会教育課長)
 阿比留裕史 (対馬市しまつくり推進部次長兼政策企画課長)
 通事太郎 (竹富町政策推進課長)

セッション2 境界自治体の地域連携教育 15:40～16:50
 司会&コメント 石田聖 (長崎県立大学)
 久保実 (五島市総務企画部長)
 小嶺長典 (与那国町企画財政課長)
 織田敏史 (根室市北方領土対策参事)

全体討論 17:00～17:30
 司会&コメント 岩下明裕 (北海道大学/九州大学)

※登壇者は予定で変更の可能性があります

日時 2018年10月28日(日) 受付13:00～
 会場 はたなかイベントホール (〒853-0002 五島市中央町7-20)

共催
 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(境界研究ユニットUBRJ)
 九州大学ボーダースタディーズ(KUBS)
 NPO法人国境地域研究センター(JCBS)
 人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」
 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点
 五島市

協力
 ボーダーツーリズム推進協議会 (JBTA)
 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター内
 境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN)事務局
 E-mail: iwasi@slav.hokudai.ac.jp TEL:011-706-2388 (担当:岩下) FAX:011-706-4952

10月29日より
 ボーダーツーリズム
 五島からチャーター便で行く
 済州島の旅催行!!





境界地域研究ネットワーク JAPAN 五島セミナー

国境を越えて地域をむすぶ 交流・観光・教育

日時：2018年10月28日 場所：はたなかイベントホール

開式の挨拶

(古川浩司) 皆さん、こんにちは。私は大会の司会を担当いたします、境界地域研究ネットワーク JAPAN 副代表代行の古川と申します。よろしくお願いいたします。ただ今から境界地域ネットワーク JAPAN 五島セミナー「国境を越えて地域をむすぶ～交流・観光・教育」を開始いたします。

我々は境界地域研究ネットワーク JAPAN を JIBSN という略称で呼んでいます。少し説明させていただきますと、境界地域の自治体、シンクタンクを含む境界地域を研究する研究機関などから 2011 年 11 月に札幌で設立したネットワーク組織です。

これまでセミナーを、稚内市、五島市、竹富町、根室市、小笠原村（東京連絡事務所）、昨年は対馬市で行いまして、今回の五島市でのセミナーが 7 回目になります。2 回目のセミナーをこちらで開催していただいたときにもお世話になりましたけれども、今回も五島市役所の皆様にはいろいろとご準備等ご協力いただきまして、まずはここにあらためて感謝申し上げます。

では、早速ですが、JIBSN の代表幹事であり、五島市長でいらっしゃる、野口市太郎様よりご挨拶いただきます。よろしくお願いいたします。(拍手)

(野口市太郎) 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、五島市長の野口市太郎でございます。昨年 4 月からこの JIBSN の 4 代目の代表幹事を仰せつかっております。合わせまして、5 年ぶりにこのセミナーが五島市で開催されるということでございまして、開催地を代表してということと合わせて一言ごあいさつを申し上げたいと思います。

今日は北海道礼文町の小野町長様をはじめ、北海道から沖縄まで全国各地からご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。先ほど話がありましたように、JIBSN も 7 年目に突入をいたしまして、これまでの現状把握とか、あるいは課題の発掘をやってまいりましたが、やはりこれからはそれぞれの境界地域を活性化するアイデアやプランの実施に移ってきているのではないかと考えております。今後境界地域をどのように発展させていったらいいのか、どのような活動を展開していったらいいのか、全国の仲間の皆さんと一緒に考えていきたいと考えております。

ここで少し五島市についてご紹介をさせていただきますが、五島市は長崎市から西の方に約 100 キロのところにございまして、11 の有人島、そして 52 の無人島で構成をされております。古くは『古事記』でありますとか、あるいは『肥前風土記』にも登場しておりまして、奈良時代から平安時代にかけて、遣唐使船の日本最後の寄港地、風待ちの場所として大



変重要な場所でありました。

現在、五島市におきましては、1955（昭和30）年、これが一番五島市の人口が多かったときでありますけれども、昭和30年が9万2,000人。これが2015（平成27）年の国勢調査では、3万7,327人ということで、この60年で約60%の人口が減少したということになっております。

こうしたこともございまして、人口減に挑むということを市の大きな目標として掲げまして、再生可能エネルギーの島づくり、あるいは潜伏キリシタン関連の世界遺産登録、クロマグロの養殖基地化、あるいは日本一の椿の島づくり、またUIターン促進プロジェクトなどを中心にいろいろな活性化策に取り組んでいるところであります。

こうした状況の中、昨年（2017年）4月から有人国境離島法が施行されました。これによりまして、船賃あるいは飛行機の運賃が大幅に軽減化をされる。あるいは島内での創業、あるいは規模拡大といったことに助成措置が講じられまして、雇用の場の確保を進めているところでございます。

こうした事業の取り組みの効果もございまして、社会減についてはこれまで200人を超えており、一昨年（2016年）が220人の減少でございましたけれども、この有人国境離島法が施行された昨年は135人の減少ということで、我々が記録で持っている中では社会減が一番少なかった年になりました。これからもいろいろな事業を展開しながら、この人口減少対策に取り組んでいきたいと思っております。

また、明日からはボーダーツアーとして、五島市に一番近い外国であります、濟州島へチャーター便によるツアーが実施されます。私も同行いたしまして、濟州の特別自治道知事、あるいは濟州（チェジュ）市長、西帰浦（ソギホ）市長を表敬訪問いたしまして、今後、濟州島との交流についてお願いをしまいたいと考えております。

本日は、「国境を越えて地域をむすぶ～交流、観光、教育」と題しまして、境界地域の行政間交流や教育問題について各地からご報告をいただき、議論することになっております。私どもも各地の取り組みをぜひ参考にしまいたいと考えております。各地域の状況や実施いただいている対策などをご報告していただく皆様方、そしてコメントをいただく研究者の方々、本セミナーに多大なるご協力をいただきまして誠にありがとうございます。今日は長時間のセミナーになりますが、よろしくお願ひいたします。最後に、五島セミナーの開催にご尽力いただきました、北海道大学の岩下明裕先生をはじめ、事務局の皆様へ深く感謝申し上げますとともに、本日お集まりいただきました皆様方のご健勝、ご多幸を祈念申し上げます。あいさつに代えさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。（拍手）

（古川） ありがとうございます。では、引き続きまして、北海道礼文町から今回のセミナーにご参加いただきました、礼文町長の小野徹様よりごあいさついただきます。よろしくお願ひいたします。皆さん、拍手をお願ひいたします。（拍手）



(小野徹) はい、皆さん、こんにちは。北海道の一番北の端、礼文町から今年もやってきました、礼文町長の小野でございます。昨年もこうして皆さんにごあいさつをさせていただく機会をいただきました。また今年も2年目ということでございますが、実は来年、礼文島でこのセミナーを開催させていただくというお話をいただいております。大変ありがたいことだなと感じているところであります。

昨年11月に初めてこのセミナーに参加をさせていただいて、今(2018)年の6月に東京でJIBSNの総会がございましたときもお招きをいただいて、どういったお話をされるのかなと思ひながら、いろいろと勉強をさせていただいたところであります。今日もこうしたご縁をいただいて、この五島セミナーにお招きをいただいたということでありまして、関係する皆様方に心から敬意と感謝を表すところであります。

昨年もお話し申し上げましたように、礼文島というのは、一番北の端の稚内から船で約2時間のところにある、日本海上に浮かぶ小さな島であります。向かいには利尻島という1,721メートルの高い山がありますけれども、私どもの島は平べったい島で、利尻礼文は夫婦島とも言われています。

現在、北方領土を除きますと、日本の離島の中で自由に行き来ができる島としては礼文島が最北端であります。礼文島が最北端の島という言い方をしますと、いや、北方領土の方の島が一番北ではないかという言い方もされるのですが、自由に私どもが行き来できる離島で一番北は礼文島ですという言い方をさせていただいております。

来(2019)年9月にはJIBSNセミナーを予定しております。今年は10月、昨年は11月でしたけれども、北国ですから、10月、11月になるともう雪が降ったりして、皆様方は大変な目に遭うと思いますので、9月に予定をさせていただきます。ぜひとも多くの皆さんにおいでをいただければありがたいと思ひているところであります。

今年、北海道は北海道と命名されてから150年という節目の年を迎えております。明治維新ができてからちょうど150年になるわけでありましてけれども、北海道もいろいろな意味で150年。先ほど野口市長からも昨年4月に有人国境離島法ができたお話をさせていただいております。礼文島においても、今、船賃が稚内から礼文に通常であれば2,100円ぐらいするのがある国境離島の法律のおかげで1,340円という金額で渡ることができます。そういったいろいろな行政政策が講じられております。

最終的には、日本国民あるいは全世界から離島に渡る場合にはそういった低価格で渡れるようにしようというのが、今回のこの法律の趣旨でありますけれども、そうするためには相当なお金が掛かるということで、現在は島に住む方、あるいは準住民といひますか、島に関係する人という言い方をしておりますけれども、それでも全国で50億円ぐらいのお金が掛かるということでございますので、これからも何とか島に住み続けて、ボーダーツーリズムの考え方を町の発展のために活用していきたいと考えているところであります。



町にもまだまだたくさんの課題がございますけれども、こういったセミナーを通して、私も我が町をどうしていったらいいだろう、離島をどうしていったらいいだろうといったことを、こういったことを通じながら勉強していきたいと思っております。皆さんと一緒にこれからも勉強させていただきます。今日もよろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございました。(拍手)

(古川) ありがとうございました。小野町長は自由に行き来できる最北端の島からお越しいただきましたが、続きましては自由に行き来できる最南端の沖縄県竹富町からご参加いただきました政策調整監の大浜知司様よりごあいさついただきます。よろしくお願ひいたします。(拍手)

(大浜知司) 紹介いただきました、竹富町政策調整監の大浜と申します。本来であれば、竹富町長の西大舩高旬がこの場にて皆様にごあいさつを申し上げるところではございまして、本人も行きたいという希望を申し上げておりましたが、本日、別公務にて願ひがかなわず、私、大浜が町長からのあいさつを預かってまいりましたので、代読をさせていただきます。

「本日は境界地域研究ネットワーク JAPAN 五島セミナーへ参加させていただき、誠にありがとうございます。竹富町は 2014 年に西表島で JIBSN の竹富セミナーを開催させていただいておりますが、その後は各セミナーを中心に参加をさせていただきながら、皆様と共に境界地域の自治体として活動を続けてきているところでございます。

竹富町は、ここ五島市から直線距離で 1,000 キロほど離れた八重山諸島に属する 16 の島々で構成され、町民の暮らしやさまざまな営みと海洋とのかかわりが密接な島嶼型海洋自治体でございます。2007 年に施行された海洋基本法に基づき、2011 年には自治体で初となる竹富町海洋基本計画を策定。現在は第 2 次竹富町海洋基本計画に基づき、各施策や事業を展開しているところでございます。

この策定の過程で、本町に属する 9 つの有人島のうち 4 つの島が国境有人離島であるという定義が明確になり、あらためて竹富町も国境の自治体、境界地域の自治体であるという認識を深くしているところでございます。

近年、新石垣空港の開港などに伴う観光客の増加や、西表島の世界自然遺産登録への動向、日本最大のサンゴ礁である石西礁湖の環境変化、周辺海域で高まる緊張などに代表されるように、本町をとりまく環境はダイナミックに変動しております。

そのような中で、本セミナーを通し、皆様と共に協会自治体の行政交流、地域連携協議について一緒になって考えていきたいと思っております。本日のセミナーが実り多いセミナーになりますことをご祈念申し上げ、あいさついたします。竹富町長 西大舩高旬」

代読大浜でございました。本日はよろしくお願ひいたします。(拍手)



(古川) ありがとうございます。今回の JIBSN 五島セミナーには、五島・済州ボーダーツーリズムの 1 つのイベントとしてご参加されている方もいらっしゃると思いますけれども、ただ今より、ボーダーツーリズム推進協議会会長の伊豆芳人様よりごあいさついただきます。よろしくお願いたします。(拍手)

(伊豆芳人) ただ今、ご紹介いただきました、ボーダーツーリズム推進協議会の伊豆と申します。どうぞよろしくお願いたします。本日は境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) の五島セミナーの開催、誠にありがとうございます。

まず、私どものボーダーツーリズム推進協議会と申しますのも、実は JIBSN の皆様が設立の準備をしていただきまして、五島市それから対馬市等々の自治体の皆様のご支援、あるいは境界地域にごきます観光関係者の皆様のご参加によりまして、昨年 7 月に設立をさせていただきまして、現在 2 年目の活動をさせていただいております。

境界地域の数多くのテーマの中からツーリズムを抜き出しまして、スポットを当てた活動をさせていただいておりますので、私どもの協議会としてのウェブサイト、あるいはさまざまな場所でのセミナーの開催などによりまして、ボーダーツーリズムあるいはその地域の特に観光としての地域の PR というを行うこと、またその中で旅行商品をたくさんマーケットに出していただいて、ボーダーツーリズムが広く浸透して、旅行会社の皆様あるいは最終的には旅行者の皆様がボーダー地域の観光に関心を持ってぜひご参加していただくということで活動を続けさせていただいております。

PR 活動につきましては、先日も観光のエキスポ、万博と呼ばれる、「ツーリズム EXPO ジャパン 2018」において私どもでセミナーを開催させていただきましたところ、ほぼ満席に近い 40 名以上の皆様にご参加をしていただきまして、交通新聞という観光交通系の新聞の 1 面に私どものセミナーのことも紹介させていただきました。

それから、もう 2 カ月前になりますけれども、8 月の初めには、TBS 系の「世界ふしぎ発見！」という番組で、「八重山・台湾ボーダーツーリズム」をご紹介いただきまして、非常にたくさんの反応があったと聞いております。さらには、今も続いているのですけれども、毎日新聞でボーダーツーリズムの連載コラムということで「旅するカモメ」……我々のマークもカモメですけれども……ということで、ボーダーツーリズム関係者の皆様のリレー連載を、対馬、五島、それから竹富、台湾、サハリン。今日は小笠原ということで、これから隠岐の島とかいろいろなところを来年 3 月までボーダーツーリズムのコラムが連載されるということでございますので、ぜひ機会があればご覧いただきたいと思っております。

このように PR 活動はだいぶ順調に進んできているのですけれども、我々の課題はこの PR 活動の受け皿のような形での旅行商品をもと数多くマーケットに出して行くということでございます。我々は旅行会社ではございませんので、我々が旅行会社様に一生懸命ボーダーツーリズムの説明をして旅行商品を作っていただくということで、実は単発の商品でいます

と、明日からの濟州チャーターのツアー、あるいはマラッカ海峡のツアーといった単発での素晴らしいツアーはどんどん出ているのですが、もっと数多くのお客様が行っていたような商品をこれからも旅行会社の皆さんを巻き込んで、商品の品ぞろえを増やしていきたいと思っております。

ぜひ、私ども、正会員あるいは準会員という制度でご支援もいただくようになっておりますので、ぜひ今日ご参加の皆様もボーダーツーリズム推進協議会に一層のご支援とそれらのご指導をいただきますようお願い申し上げます、私からのあいさつにさせていただきますと思います。今日は本当におめでとうございます。ありがとうございます。(拍手)

(古川) ありがとうございます。それでは開会セレモニーを終了いたします。



セッション1 境界自治体の行政交流

(古川) それでは、第1部「境界自治体の行政交流」というセッションを始めます。引き続きまして、このセッションの司会とコメントを担当いたします、古川と申します。あらためてよろしくお願いいたします。

今回、行政交流ということで、このテーマを設定させていただいたのは、もともとは今後このJIBSNに加盟している自治体の中にもまだ姉妹提携等を結ばれていないところもあると思うのですが、そういったところがこれから結ぶ上でいろいろな事例を見て考えたかどうかというところから始まりまして、実は私自身ももともとは自治体の国際交流も研究しておりまして、せっかくなので、私が研究していたことの延長線上でもありますし、いろいろな境界地域の自治体の事例を情報共有することによって、さらに境界地域の地域振興に発展すればいいのではないかということから、このテーマを設定させていただきました。

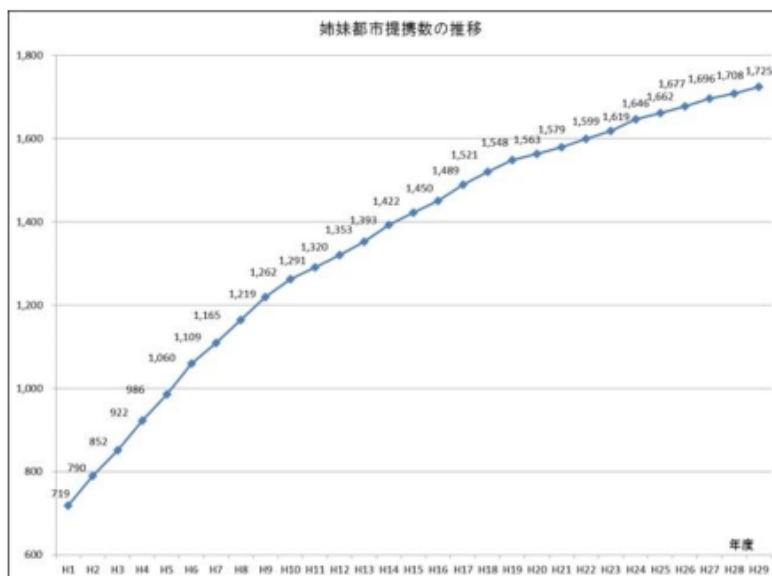
ただ、いきなり行政交流と言われましてもなかなかぴんと来ない方もいらっしゃるかもしれませんが、少しだけ説明させていただきますと、姉妹都市、あるいは姉妹都市提携とも呼ばれます。これは自治体国際化協会の定義に則ったものですが、ご覧いただきましたような3つの条件を満たしているのが姉妹都市と定義されております。

姉妹都市とは

- (1) 両首長による提携書があること
- (2) 交流分野が特定のものに限られていないこと
- (3) 交流するに当たって、何らかの予算措置が必要になるものと考えられることから、議会の承認を得ていること

(自治体国際化協会)

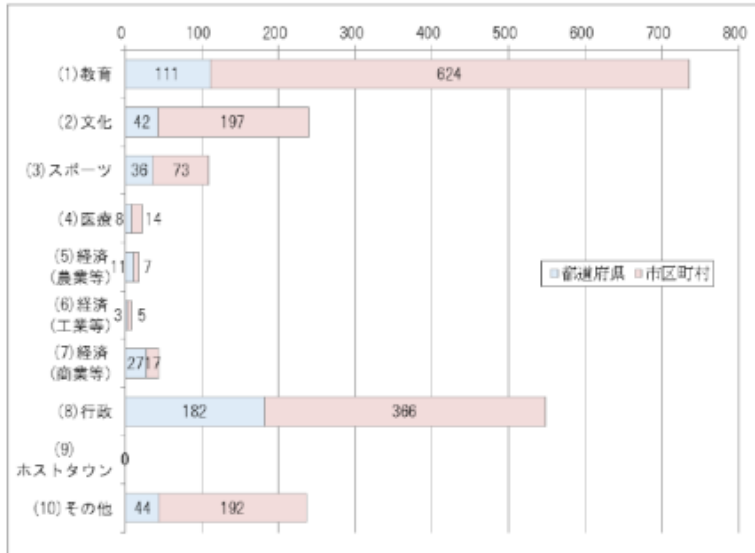
では、実際どのくらいあるかといいますと、ちょっとご覧いただきにくいと思いますが、自治体国際化協会によれば、2017(平成29)年度までに1,725の姉妹都市提携が結ばれておりまして、新しい数字だと、2018(平成30)年10月1日現在で1,734の姉妹都市提携が結ばれていると言われております。



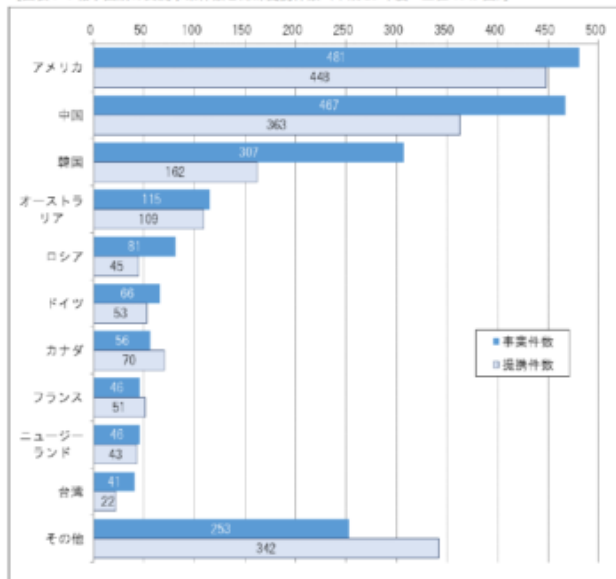
①教育交流	小学生・中学生・高校生・大学生の交流、生徒等の作品の交換・展示、教員の交流、その他
②文化交流	音楽・芸能・芸術家等の派遣・受入、文化団体の派遣・受入、芸術作品・民芸品等の交換・展示、文化的施設・物品等の寄贈・受入、文化関係イベント等の開催(又は参加)、語学講座の開催(スピーチコンテストを含む)、ジャーナリスト・マスコミ関係者の派遣・受入、刊行物(図書)・ビデオ・フィルム等の交換・発行、動物・植物等の交換、その他
③スポーツ交流	スポーツ選手又はチームの派遣・受入、協議会の開催、その他
④医療交流	医師、看護師・その他の技術者・研修生の派遣・受入、視察団の派遣・受入、医療情報交流、医療設備・器具の寄贈、その他
⑤経済交流(農業等)	専門家・研修生の派遣・受入、視察団の派遣・受入、農林水産業等(第1次産業)関係団体の派遣・受入、その他
⑥経済交流(工業等)	専門家・研修生の派遣・受入、視察団の派遣・受入、鉱工業(第2次産業)関係団体の派遣・受入、その他
⑦経済交流(商業等)	物産展・見本市等の開催、専門家・研修生の派遣・受入、視察団の派遣・受入、商業・サービス業(第3次産業)関係団体の派遣・受入、その他
⑧行政交流	記念式典、専門家・研修生の派遣・受入、職員の派遣・受入、視察団の派遣・受入、その他
⑨ホストタウン交流	東京オリンピック・パラリンピック競技大会のホストタウン・キャンプ地取組
⑩その他交流	親善訪問団派遣・受入、各種クラブ(ロータリー、ライオンズ等)交流

こちらもすべて自治体国際化協会のウェブサイト(自治体間交流資料として公開されています)に「平成 28 年度姉妹(友好)都市提携自治体の活動概況について(結果概要)」:
<http://www.clair.or.jp/j/exchange/docs/H28.shimai.pdf> が、大きく分けると、教育交流から文化交流、それからスポーツ交流、医療交流、経済交流の中でもいくつかに分かれておまして、それから行政交流、ホストタウン交流、その他の交流と分類しまして、教育と行政交流が非常に多くなっています。

【図表4：分野別、都道府県・市区町村別の姉妹交流事業件数】



【図表7：相手国別の交流事業件数と姉妹提携件数（平成28年度・上位10か国）】



また国別で見ますと、アメリカ、中国等が多いですけれども、ただ、これに関しても特徴としては、アメリカ、カナダ、オーストラリアといったようなところは教育交流が中心で、中国、韓国、フランスといったようなところは行政交流が中心だという統計データが取られています。

ただ、このデータ自身は、自治体関係者の方は自治体国際化協会からそういう回答依頼が来ていることをご存じの方もいらっしゃると思いますけれども、すべての自治体が必ずしも

回答したわけではありませので、1つの目安になるということです。

最後に、では現在の JIBSN の加盟自治体の姉妹都市提携というのはどうなっているかということで表を作らせていただきました。これからご報告いただきます、稚内市は海外の 4 自治体と国内の 2 自治体、それから根室市は海外 2 自治体と国内 1 自治体。それから標津町は国内の 1 自治体、小笠原村は国内の 2 つの自治体です。そして、隠岐の島町は、今回ご報告いただきますが、海外の自治体と提携を結ばれておまして、対馬市は海外 3 自治体、国内が 1 つの自治体。竹富町とも結ばれておりますが、それから竹富町は国内の 2 自治体で、与那国町は海外の 1 自治体というような形で、先ほどのデータに関してはあくまで海外だけですけれども、ただ、国内に関しても交流の分類というのを先ほどご紹介させていただきましたのは、海外でも国内でも交流の内容というのはそれほど大きく変わるものではないということで、紹介させていただきました。

JIBSN加盟自治体の姉妹都市提携

	海外	国内
稚内市	ネベリスク市 (ロシア) バギオ市 (フィリピン) コルサコフ市 (ロシア) ユジノサハリンスク市 (ロシア)	石塚市 枕崎市
礼文町		
根室市	シトカ市 (米・アラスカ州) セベロクリリスク市 (ロシア)	黒部市
標津町		大畑町
小笠原村		南アルプス市 八丈町
隠岐の島町	クロトシン市 (ポーランド)	
対馬市	影島区 (韓国・釜山広域市) 蔚州郡 (韓国・蔚山広域市) 崇明県 (中国・上海市)	竹富町
五島市		
竹富町		斜里町 対馬市
与那国町	花蓮市 (台湾)	

ということで、ただ今から、この中で言いますと、稚内市と隠岐の島町と対馬市とそれから竹富町の事例に関してご報告いただきます。なお、今回参加できませんでした小笠原村の方からは資料をいただいておりますので、私が代わりに報告させていただくということになっております。

なお、今回標津町の方も参加がかなわなかったですけれども、入り口の受付のところには標津町の概要をはじめ関係資料は置いてありますので、ご関心のある方はお持ち帰りください。それでは、早速ですけれども、まず稚内市の事例をご報告いただくということで、稚内市サハリン課の三谷将様にご報告いただきます。よろしくお願いいたします。

(三谷将) 皆様、こんにちは。私は北海道稚内市役所の三谷と申します。本日はこのよう

な盛大な場にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。主催者であります、五島市の野口市長をはじめとするお集まりの皆様に対して、心からお礼を申し上げます。私は、九州に来ること自体が初めてなものですから、見るもの、聞くこと興味深いものばかりで、せっかくここまで来ましたので、いろいろと経験して帰ろうかと思っております。

本当は、しゃべりたいことは今から説明することの10倍ぐらひはあるのですが、何分時間がないということと、トップバッターですから、ほかの方に迷惑を掛けてはいけないということで、泣く泣くカットしているということでご理解いただきたいと思ひます。それでは、持ち時間が限られていますので、早速本題に入りたいと思ひます。



冒頭、ご覧いただいているのは、日本最北端の地、宗谷岬平和公園にある標識でございます。まずは基本的な情報としまして、稚内市がどのような位置にあるのかを地図で表しておきます。五島市の方もおりますよね。これは標準的な日本地図ですけれども、主要都市までの距離を数字で表すと、このようになります。

これは特に本州本土の方にはなかなか分からない感覚で、とにかく何をすることもどこに行くにも遠いと、その一言です。例えば私は自治体の職員ですから、北海道庁が所在する札幌市に行かねばならない用事が数多くあります。五島市の職員に当てはめると、長崎県庁に行くのと同じだと思いますけれども、その札幌市までの距離がだいたい330キロ。これは調べてみますと、ここから広島県までの距離ということです。たいていはJRかバスに揺られながら、そこまで片道5~6時間かかりますから、これだけで一日仕事になってしまうという位置でございます。

稚内市の位置関係

- 稚内～東京間は約1,000km、飛行機で約2時間
- 稚内～札幌間はJRで約5時間、バスで約6時間



■ 主要都市までの距離

- 旭川まで - 245km
- 札幌まで - 330km
- 福岡まで - 2,370km
- 五島まで - 2,610km

※最も近い市 = 名寄市までの距離は、167km。

※利尻島、礼文島との間でフェリー航路が通年運航。

普段考えたことはあまりないですけれども、稚内から福岡までの距離を調べてみますと、約 2,370 キロ。ここ五島までだと 2,600 キロを超えておまして、ここまですると何だかよく分からないような距離でありますけれども、稚内市から日本国内で最も近い市は名寄市となっておりますけれども、その距離は約 167 キロです。これは、私も計算しました。五島から福岡市までの距離よりも遠いですが、その間に市が 1 つもないというのと同じ状況であると思ってください。これらを踏まえた上で次をご覧ください。

実は、今まで説明していたような標準的な日本地図というのは、普段私の意識に上ることはまずございません。今、お示ししているのは、私の職務上最も見慣れた地図で、稚内市役所の応接室の壁にも同じような地図が掲げられております。どうでしょう。このあたりにお住まいの方は少し違和感といたしますか、どこという感じがするのではないのでしょうか。

けれども、私が普段仕事をする際は、頭の中でイメージされているのはだいたいこのような北方海域の情景で、このような地域であることをご理解いただきたいと思います。私自身もサハリン課という名前の部署におりますけれども、仕事柄、何度もサハリンには行っております。

一見してお分りの通り、何しろ近いです。稚内北端の宗谷岬からサハリン南端のクリリオン岬までわずか 43 キロ。どれだけ近いかというと、稚内から 1 泊 2 日で国外出張が可能です。実際、何度かそのような事例もございます。先ほど稚内市から日本国内で最も近い市とわざわざ言ったのはそのためで、日本国内を含めまして、世界中で稚内市から最も

近い市は、実はロシア連邦サハリン州コルサコフ市になります。おおむね6月から9月までの期間では、稚内市・コルサコフ間で旅客船が就航しておりますから、行けと言われればいつでも行くことができます。

業務上、最も見慣れた地図

■稚内～サハリン間は直線距離で約43km

■稚内～サハリン定期航路が運航（夏季のみ：約4時間）



ほかにも先月の9月上旬には、地図の右の方に表示されています、カムチャツカ地方のペトロパブロフスクカムチャツキー、そちらまで出張で渡航しておりますし、現実的にこのような距離感の中で稚内市は存在しているということをご理解いただいた上で、このような町における友好都市交流とはどのようなものかについて以下、順を追って説明してまいりたいと思います。

最初に国内外の事例を一通り述べた後で、最後にそれらを一般化した図式を考えましたので、それをお示ししたいと思っております。まず、国内の友好都市についてですけれども、最も早く友好都市提携を行ったのは、沖縄県の石垣市です。私は行ったことはございません。

稚内市は日本最北端の市、石垣市は日本最南端の市という点と、人口4万人で同じような人口規模、農業・漁業など産業形態が類似しているということで昭和62年に石垣市で調印式を行っております。石垣市との交流につきましては、基本的には市民訪問団ですとか、スポーツ少年団、そういった相互交流を中心としておりまして、物産展などそういった催事に合わせて、お互いの特産品を販売するなどしております。

印象的なものといえば、やはり日本の北と南という特長を生かした相互交流となっております。今年も確か発表されておりましたけれども、特に稚内市と石垣市に両市の職員の相互派遣研修では、稚内市の職員が真夏の石垣、そして石垣市職員は真冬の稚内と、お互いに

不慣れな大変厳しい環境にあえて派遣されるというのがこれは面白いところなのでしょう。

友好都市提携 (石垣市)

月日	あゆみ
昭和58年 2月	「わっかない氷雪の広場」開会式で、稚内市長と石垣市長が記念通話。
昭和62年 9月27日	石垣市民会館で「稚内市・石垣市友好都市提携」調印式。
平成6年 10月	稚内市・石垣市職員の相互交流研修開始。
平成29年 8月	友好都市提携30周年。石垣市長を団長とする市民訪問団が稚内市を訪問。



友好都市提携 (枕崎市)

月日	あゆみ
平成23年 1月	枕崎市長が稚内市を訪れ、友好都市提携の申し入れを行う。
平成24年 4月28日	稚内総合文化センターで「稚内市・枕崎市友好都市提携」調印式。
平成26年 2月	出雲大社において両市長立ち合いのもと「昆布」と「鯉」の縁を結ぶ「コンカツ結婚調印式」。
平成27年	両市の商業や観光の発展を目的として「コンカツプロジェクト」がスタート。



次ですけれども、鹿児島県の枕崎市です。枕崎市とは比較的最近になりますけれども、平成24年に友好都市提携を行ってございます。どのような縁があったのかといいますと、日本

最北端の稚内駅と本土最南端の始発終着駅である枕崎駅がそれぞれ所在しているということに端を発しているということでございます。

アプローチとしては、枕崎の方から積極的なアプローチがあったと記憶してございます。交流が始まってから、稚内市の特産品の利尻昆布、あと枕崎市の特産品のカツオをPRするべく、両市の間でわざわざ出雲に行きまして出雲市長を仲介役として「コンカツプロジェクト」と称する半ば冗談のような企画を実際にスタートさせておりまして、以後、特産品を用いた新商品の開発ですとか両市の高校生同士による相互訪問などに取り組んでおります。

以上が石垣、枕崎両市との交流の概要ですけれども、どちらも私のような北方の人間から見れば、一見同じような地域に感じてしまいますけれども、交流に至る経緯ですとかその内容を分析すると、この両者は実は別のタイプに属しております。その理由についてはこの後お示しする図式の中で説明していきたいと思っております。

それではいよいよ私の専門領域ですけれども、サハリン、友好都市との交流についてです。スクリーンをご覧くださいと思います。ご覧のように、稚内市はネベリスク、コルサコフ、ユジノサハリンスクという3つの町と友好都市提携をしております。

友好都市提携 (サハリン)



都市のプロフィール	友好都市提携の契機
ネベリスク市 ・昭和47年(1972年)9月8日 友好都市提携	 <ul style="list-style-type: none"> ・樺太時代は本斗(稚斗航路の歴史) ・ソ連邦政府樹立50周年(1922年~) ・両市の基幹産業が水産業
コルサコフ市 ・平成3年(1991年)7月2日 友好都市提携	 <ul style="list-style-type: none"> ・樺太時代は大泊(稚泊航路の歴史) ・極東の軍港として長く立入制限 ・1990年頃、ソ連の開放政策
ユジノサハリンスク市 ・平成13年(2001年)9月9日 友好都市提携	 <ul style="list-style-type: none"> ・樺太時代は豊原(サハリン州都) ・両市の大学が姉妹校提携(1991年) ・両市職員相互派遣研修(1993年~)

第二次世界大戦が終了するまでのサハリンが樺太と呼ばれていた時代には、その南半分は日本の領土でした。そして、この3つの町はそれぞれ本斗、大泊、豊原という名称を持つ、日本の自治体でした。そして、稚内と本斗、そして稚内と大泊それぞれの間には戦前から定期航路が存在しておりまして、普段から人や物資の往来が盛んでした。豊原は、当時日本領時代から樺太における政治経済や文化の中心都市として機能しておりました。ですから、こ

れら3つの町とは何かあるきっかけがあつて仲良くなったとかことさら特別な理由を設けて友好都市になったとかそういうことではなくて、もともと稚内市と歴史的につながりの深い存在であったということでございます。

各市との交流について少しだけ触れます。ネベリスクとは最も古く、まだソ連時代の1972年、ネベリスクにて友好都市提携を行っております。コルサコフとは1991年、友好都市提携をしておりますけれども、稚内港とは戦前・戦中まで航路で結ばれていた間柄でもありますし、ソ連時代におきましても、お互い密かに意識し合う関係であったというふうに聞いております。ただ、コルサコフ港は当時軍港としまして一般に閉ざされておりましたので、交流を再開するにはソ連邦が崩壊する1990年まで待たなければならなかったというような事情があります。

こうした経緯の中で、2001年樺太時代からの中心都市であつて、現在もサハリン州の州都でありますユジノサハリンスクとの友好都市提携に至つたというのは自然の流れであつたと思います。以上、サハリンの友好都市各市との交流の経緯です。本当は各市の交流内容についてもたくさん触れたいですけれども、時間の制限がありますので、残念ながら割愛させていただきます。

これが稚内市における友好都市交流の主だったところですが、実はほかにもまだ提携している都市が国外にあります。1つはフィリピンのバギオ市。その契機となつたのが、現地で戦没者の慰霊碑を建立する際、稚内の関係者から寄付と協力があつたということだそうです。

友好都市提携 (その他)



都市のプロフィール	友好都市提携の契機
バギオ市 (フィリピン共和国ルソン島) ・昭和48年(1973年)3月20日 友好都市提携	日本戦没者慰霊碑「平和の塔」建立に稚内ライオンズクラブが寄付、稚内市が協力⇒バギオ市での除幕式で友好都市提携。
アンカレッジ港 (アメリカ合衆国アラスカ州) ・昭和57年(1982年)7月27日 友好港湾提携	港湾機能強化に向けて北方圏の都市との交流を模索⇒稚内ロータリークラブの活動を契機としてアンカレッジとの交流が実現。

アメリカのアンカレッジ港……これは港とあります通り、友好都市ではなく友好港湾というくくりになっております。これは稚内港がアラスカやカナダなどの北方圏の港との連携を模索する中で提携が実現したと聞いております。

これはおそらくほかの自治体でもある事例かと思えますけれども、現在、このバギオとアンカレッジとの交流はほとんどというかまったくありません。当初は関係があったものが、さまざまな理由があって徐々に疎遠になっていったということかと思えますけれども、これには個別な事情というよりも、いろいろと考えたのですが、ある種の構造的な問題があるのではないかと考えております。

友好都市提携の類型

類型	長所	短所
遠距離=類似型 双方の類似性に注目 例：稚内 - 石垣	産業構造の類似性を活かし職員や団体同士の研修、提携などが可能。	遠距離となるため頻繁な交流が困難。
遠距離=きっかけ型 人・物の記念などを契機 例：稚内 - バギオ	契機となった催事の記念事業や人物の顕彰などPR効果。	遠距離となるため頻繁な交流が困難。段々疎遠になる傾向。
近距離=歴史型 歴史的な繋がりを重視 例：稚内 - サハリン	人や物の日常的な交流、市民レベルの自発的な交流が可能。	距離が近いと仲が悪くなることもある。
戦略型 交易・経済効果を期待 例：稚内 - アンカレッジ	企業間提携や自治体協定により相互利益を目指すことが可能。	人材の確保に難点。問を取り持つ人材の有無に左右される傾向。
こじつけ型 話題性を重視・PR 例：稚内 - 枕崎	意外と21世紀型の友好都市交流となる可能性も。SNSやウェブ展開。	そもそもの関係性が希薄。

スクリーンをご覧ください。今まで説明した事例を参考に、類型を考えました。交流を5つのタイプに分類しまして、それぞれ左上から、遠距離=類似型、そして遠距離=きっかけ型、近距離=歴史型、戦略型、そしてこじつけ型と名付けております。友好都市交流におけるメリット・デメリットを個別の事例に固有のものではなくて、ある種構造的なものとして捉えるべく類型化したのがこの図式でございます。

友好都市自体は、そもそも遠方の町等間に成立しやすいものだと思うのですが、その中で双方の類似性に着目したのが遠距離=類似型ということです。稚内市は石垣市との関係がこれに該当すると思ひまして、一方が北端や南端であることと、海に囲まれた環境で水産業を基盤とする町……こういったことから交流に至ったので、類似性に基づくオーソドックスな交流が進められる傾向にあるのではないかと思います。

次は2番目ですけれども、あるモニュメントの建立ですとか、互いに親しい著名人が居住

していたとか、そういう人や物の交流を記念すべく始まる関係を遠距離きっかけ型と名付けております。稚内ではフィリピンのバギオ市との関係がこれに該当します。

この関係は、そもそもきっかけとなった出来事……催事の記念事業や双方のきずなを築いた人物の顕彰などを通じまして互いに町の PR を行うことができますけれども、年月の経過とともに両市の関係がだんだん疎遠になる傾向があるのではないかと考えております。もともとそれほど類似性のない町同士の関係ですから、交流の維持によほど気を配るか、双方を結び付ける力のある人材がいないと徐々にフェードアウトしていってしまうのは構造上仕方のないことなのかもしれないと考えております。

次に近距離＝歴史型……これは互いの町の成り立ちや歴史的経緯など、そもそも深いかわりがあった間柄の場合で、稚内市ではサハリンとの関係がこれに当たります。このタイプでは提携を行う以前から人や物の交流が盛んであった場合が多いですから、自治体主導ではなくて民間レベルでの活動が活発なことが多くて、ほかの類型よりも親密かつ具体的な取り組みが進展しやすいです。

ただし、距離、すなわち関係性が近いということは、皆さんも思い当たることがあるかもしれませんが、利害関係の当事者が多いということですから、逆に不仲になり得る関係ということがデメリットとしてあると考えております。

次は戦略型としていますが、これは友好都市提携に関しまして実利的な面を重視するタイプです。稚内市の事例では、うまくいっていませんけれども、アンカレッジ港との関係がこれに当たります。この場合、何かの団体とか機関が仲介に入って友好提携に至る事例が多いと予想しますし、提携した直後からさまざまな協定や覚書を志向するなど相互利益の向上に努める傾向があります。

けれども、自治体主導の関係において難がありまして、双方の民間を巻き込んでビジネス上のメリットを創出させていくには相当なスキルのある人材が必要になると考えております。

最後に、私はこじつけ型と名付けていますから、どなたか関係者がいたら怒られてしまうかもしれませんが、稚内では枕崎市との関係がこれに該当すると思います。枕崎市との交流の中でも申し上げましたけれども、この類型による交流では、しゃれやジョークを利かせたりする機会が多いですから、それほど重要な関係性があつたというよりは対外的な PR に結び付くことに主眼を置いております。

一見、いい加減に見えるこの関係ですが、意外と評価しておりまして、インターネットを活用してウェブ展開を図ったり、SNSなどでロコミの一般受けを狙ったりですとか、ほかの類型とはずいぶん様相を異にした取り組みを行っていることが多いです。21世紀型の新たな友好都市交流の在り方の1つとまで言うと大げさですが、そういうメリットもあるのではないかと考えております。ただ、やはり相互の自治体同士で強い結び付きや関係性がある訳ではもともとないですから、その時々意思決定者の判断で一時的な交流にとどまる可能性は十分にあるかと考えております。

以上です。持ち時間が限られている中、非常に細々としたお話を申し上げまして、あとはこのような類型については一般的に当てはまるものかどうか、私が勝手に考えたものですから自信もないですけれども、これからご説明いただくほかの自治体の皆様方のお話を聞く中で、私自身、もう一度考えを整理していきたいという気持ちもございます。その面でも以降の皆様方のお話を楽しみにしております。大変雑駁な説明となりまして恐縮とは思いますが、以上で私からの発表といたします。どうもありがとうございました。(拍手)

(古川) ありがとうございました。先ほどの類型は非常にこの後のご報告あるいは議論にも有用ではないかと思いました。では、引き続きまして、隠岐の島町教育委員会社会教育課長の吉田隆様に隠岐の島町の事例についてご報告いただきます。よろしくお願いたします。

(吉田隆) 皆さん、こんにちは。隠岐の島町教育委員会社会教育課の吉田と申します。よろしくお願いたします。今日はこういう素晴らしい機会を与えていただきまして、本当に感謝しております。ありがとうございます。私は、昨日、隠岐から出雲経由福岡で行くはずで、飛行機に乗るつもりだったのですが、福岡から来る飛行機が機材故障ということで、急遽大阪に飛びまして、大阪から長崎へ飛んでやってきました。初めて上陸しました。ありがとうございます。



今日は、「相撲文化が結んだ国際交流」ということで、我が町がポーランド共和国クロトシン市という町と友好都市を結んでおりますので、その経過等についてご説明をしたいと思います。

まず、隠岐といいますが、皆さん、隠岐がどこにあるか分かっておられるでしょうか。隠岐は日本海に浮かぶ島でございまして、島根県でございまして、実は、隠岐は1つの島かなと

いうことをよく言われますが、実は4つの有人島、4つの自治体がありまして、こっちが島の前と書いて島前、こっちが島の後ろと書いて島後と大きく分けます。島前には3つの町村、海士町というのは結構有名な島でございますね。我が町は、この丸い大きな島で、人口が約1万4,300人おります。ここは隠岐空港とって、2,000メートルの滑走路がありますので、ジェット機も就航可能ということになっています。



隠岐は、皆さんご承知かもしれませんが、大変雄大な自然豊富な島でございます、こういう国賀海岸は映画のロケ地になったりする、これは西ノ島町でございますが、素晴らしい風景があります。我が町には、ローソク島とってこれは20メートルの岩ですが、ここに夕日がともると、ぼっちろソクに火がともるといって、みんなが行ってみたいパワースポットということになっています。



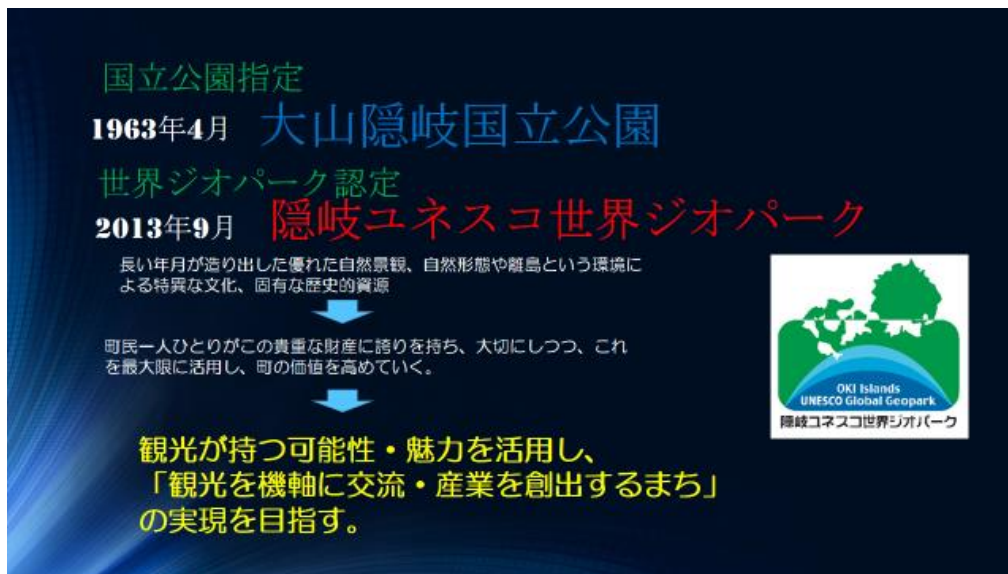
もう1つは、実は隠岐に流された2人の天皇というのが、実は皆さんも教科書で、小学校

のころ、中学校のころに習われたと思いますが、後鳥羽上皇が 1221 年、後醍醐天皇が 1332 年ということで、天皇が流された島ということでも知っておられると思います。

次に、実は国立公園に指定を受けています。1963 年 4 月大山隠岐国立公園。1963 年というと、昭和 38 年でございますが、実は私も同い年で、大山隠岐国立公園と同い年ということで覚えてください。

次に世界ジオパークです。これが 2013 年 9 月に認定を受けました。このユネスコ世界ジオパークでございますが、全国で 6 番目に認定になったということで、世界が認めた島ということで我々は大変強くありがたいなと思っております。昔々、隠岐がどういうふうにできたのかという大地のお話から動植物の話もありますが、その上で繰り広げられた人々の営みという歴史ですね。これが世界に認められたということになっております。

ただ、難しい話もありますが、我々は今住んでいるこの町、島を誇りに思おうということで、みんなでこの島をいつまでもきれいにしようよということで、子供たちから今ふるさと教育の中でこのことを一生懸命学んでいます。そして、我々はこの観光が持つ可能性、魅力を活用して、「観光を機軸にした交流・産業を創出するまち」ということをキーワードにこの実現を目指すということで、我が町はいろいろな取り組みを行っております。




国立公園指定
1963年4月 大山隠岐国立公園

世界ジオパーク認定
2013年9月 隠岐ユネスコ世界ジオパーク

長い年月が作り出した優れた自然景観、自然形態や離島という環境による特異な文化、固有な歴史的資源

町民一人ひとりがこの貴重な財産に誇りを持ち、大切にしつつ、これを最大限に活用し、町の価値を高めていく。

観光が持つ可能性・魅力を活用し、
「観光を機軸に交流・産業を創出するまち」
の実現を目指す。



次に、なぜポーランド共和国クロトシン市と交流したのかということですが、ポーランドの旗は白と赤、我が国も白と赤でございますが、実はこの赤と白が反対になるとインドネシアになってしまいますので気を付けていただきたいと思いますが、ポーランドというのはちょっと分かりにくいかもしれませんが、ドイツの隣にありまして、こっちはウクライナやベラルーシなどで、ポーランドというのは広い平原という意味があるらしいのですが、ものすごく広い、だだっ広い地平線が続く国でございます。

首都はワルシャワ。このワルシャワへ成田空港から直行便が就航しておりますので大変行きやすくなりましたが、それでも 11 時間ぐらいかかりますので、さらにここからクロトシン

まで4時間ぐらい車をぶっ飛ばして行く、大変広い国でございます。ご存じのように、共産主義を引いていた国であります、今は資本主義になりまして、どんどん経済活動が盛んになっておりまして、発展をどんどんしております。日本企業もどんどん進出しているということで注目の町です。この国の言葉はポーランド語が母国語でございます、残念ながら英語圏ではないので、私も行きましたけど、私の流暢な英語は通じませんでしたのであきらめました。クロトシン市、ここはだいたい人口が4万人ぐらいの小さな町ですが、大変中世の香りがするすごくきれいな町でございました。



ポーランドは大変昔から親日国で、今も親日国です。これはなぜかという、ポーランドは日露戦争やロシア革命、第二次世界大戦などで戦争の悲しい歴史を持っている国です。ところが、命のビザと聞いたことがおありだと思いますが、杉原千畝さんという伝説の方が命のビザを発行してたくさんの人を助けたと。ポーランドの方々は、日本人たちに大変よくしてもらったということで親日国であるということです。

そして、クロトシン市は実は相撲がすごく盛んな町です。日本文化が大好きだけど、特に相撲、武士道とか相撲道にすごく興味があるということで、このポーランド全体の国の中でも相撲連盟の事務局をクロトシン市に置くということで、盛んに相撲が行われています。こういう巨体の相撲レスラーが相撲を取るわけですが、実は女子相撲もすごく盛んで、日本よりたぶんもっと人口が多いのではないかと思います。

クロトシン市から交流したいということで日本大使館にお話があって、そこを島根県から隠岐の島町にお話があったわけですが、中国地区の経済同友会の方たちがポーランドを訪れたときにその話がありまして、どこか日本の国で相撲を盛んにやっているところはないかなということで、隠岐の島町に白羽の矢が立ったということでございます。

なお、ポーランドと友好都市を結んでいるのは、日本全国の中で我が町だけだということでございまして、しかも国際交流員が2名ほどうちの町におります。全国の国際交流員が集

まる中で分かったのですが、2名のポーランド人が隠岐の島にいて、他の町はいないということで、大変貴重な2人が隠岐にいるということになっています。

ポーランドは伝統的な親日国

ポーランドは日露戦争やロシア革命、第二次世界大戦など、戦争により悲しい歴史を抱える国ですが、『命のビザ』など昔の日本の善意ある行動をポーランドの人たちは忘れることがなかった。

クロトシン市民は 相撲が大好き！

ポーランドの中西部にある人口約4万人の地方都市。相撲への関心が高い東・中欧の中でも、特に競技が普及し、国の相撲協会本部も同市に置かれ、アマチュア相撲大会も盛んに開催されている。



クロトシン市 → 島根県 → 隠岐の島町

日本国大使館

2014年 中国地区経済同友会の視察団がポーランドを視察した際、日本国大使より、クロトシン市が日本国内の自治体と交流を求めている声があることがキッカケで、古くから伝統的な相撲行事が伝承される「隠岐の島町」に白羽の矢が当たった。

次ですが、第1弾ということで、先ほどの話があった後に、早速向こう人は積極的ですから、じゃあ、隠岐に行くぞということで2015年3月にクロトシン市の市長自らがやってこられまして、10名ほどですがとにかく来て隠岐の島を見ようということで来られました。

第1弾 訪問団来島！

2015年3月 クロトシン市長／ヴィエルコポルスキ県副知事／ポーランド相撲連盟会長・10名の訪日団来島。町内視察と地元の子どもの相撲稽古を見学。町内の相撲関係者を中心に懇談会開催。今回は、ワルシャワ在住の日本国大使、東京在住のポーランド大使も参加し、国内でも滅多に実現しない両国の大使が隠岐の島町で友好を図る場面もあった。



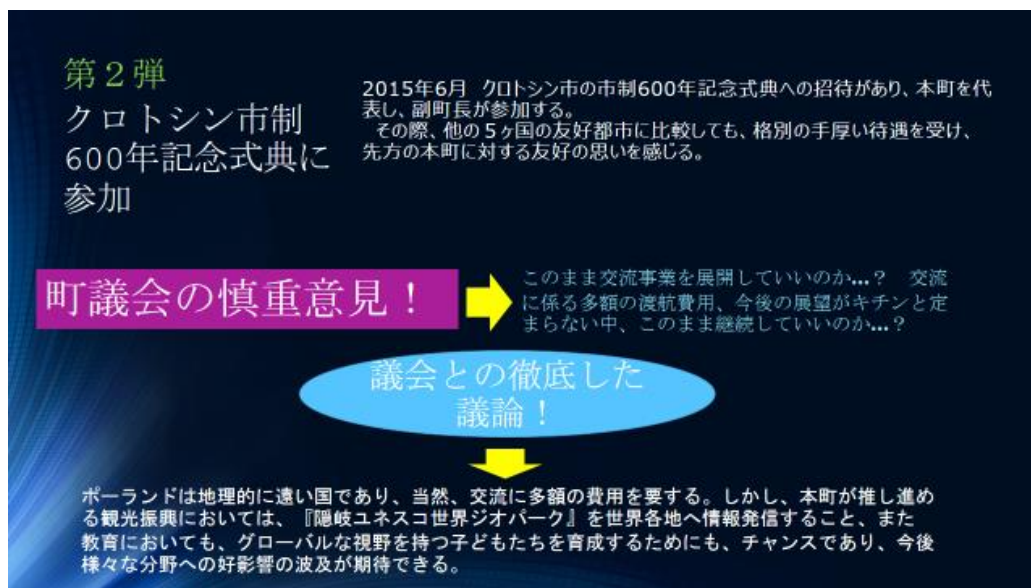


『隠岐には忘れかけた日本の貴重な文化が息づいている！』
(ロズム会長)

その中で子供たちが相撲をやっている風景とかいろいろな相撲文化を中心に隠岐の文化を見ていただきました。そして、ここに写真もありますが、地元のおっちゃんたちと懇親会をやったわけですが、ものすごく盛り上がりました。この中でポーランド語を使える通訳が2人ぐらいいたのですが、結局これだけの人数がいると、なかなか通訳がいても大変なことで

すが、みんな仲良しになったという不思議な光景がありました。クロトシン市の市長と我が町の市長が握手をしているところでございます。そこで相撲連盟の会長がこの中に入るのですが、隠岐には忘れかけた日本の貴重な文化が息づいているということをおっしゃいました。

次に第2弾ですが、クロトシン市の市制600年記念というのがありました。この記念式典にぜひ隠岐の島町も来てくれということで、急遽副町長が参加したわけですが、その際、ドイツとかウクライナとか近くの国々のたくさんの友好都市も集まっていたのですが、なぜか隠岐の島町が超VIPの一番いい席を設けられて、すごい優遇を受けました。うちの副町長もびっくりして、えらいことになったぞということでおったわけです。



第2弾
クロトシン市制
600年記念式典に
参加

2015年6月 クロトシン市の市制600年記念式典への招待があり、本町を代表し、副町長が参加する。
その際、他の5ヶ国の友好都市と比較しても、格別の手厚い待遇を受け、先方の本町に対する友好の思いを感じる。

町議会の慎重意見！ → このまま交流事業を展開していいのか...？ 交流に係る多額の渡航費用、今後の展望がキチンと定まらない中、このまま継続していいのか...？

議会との徹底した議論！

ポーランドは地理的に遠い国であり、当然、交流に多額の費用を要する。しかし、本町が推し進める観光振興においては、『隠岐ユネスコ世界ジオパーク』を世界各地へ情報発信すること、また教育においても、グローバルな視野を持つ子どもたちを育成するためにも、チャンスであり、今後様々な分野への好影響の波及が期待できる。

しかし、町の議会から島でやるのは大丈夫か、交流を本当にやるのかという反対意見もありました。というのも、なかなか交流といっても遠い国ですし、文化も違う。それにたくさんのお金も掛かるからです。このままちゃんとした今後の展望がない中で進めていいのかということで、だいぶ厳しい意見も議会でもいただきました。

そこで、徹底した議論ということで、いろいろ私も説明をしました。ポーランドは確かに遠い国ではございますが、しかし先ほど言った隠岐ユネスコ世界ジオパーク、これはヨーロッパ発信のジオパークでございますので、世界各地にこの情報発信をするにはいいチャンスではないかと。それと子供たちが広い視野を持つためにもこれは本当にいいチャンスだということで、我々は議会の方にも理解をいただいたところです。

そして、次の第3弾になりますが、これはあちらの方々は積極的なので、では、次に来てくださいということで、今度はその年の8月にポーランドでポーランドオープンという相撲の選手権大会……これは近隣諸国のたくさんの方々が参加する相撲大会ですが、そこに隠岐からも3名の力士を派遣してくれということで、我が町の優秀な若者3人を派遣しました。

第3弾
ポーランド相撲選手権大会（ポーランドオープン）への隠岐力士派遣

2015年8月 クロトシ市からの熱烈なお誘いにより、相撲大会へ隠岐力士（3名）を派遣した。想像以上にヨーロッパでは相撲人気が高まり、しかも女子相撲は盛ん。大歓迎を受けた隠岐力士は、“本物の相撲”を伝授すべく、相撲の指導を実施する。これにより、更に、隠岐の人気は高まった。




現地での相撲の指導、また、お土産に贈った「日本の相撲のまわし」が大変喜ばれた。

ポーランドの人たちは相撲が大好きですが、本場ものの相撲を見たことがないということもあって、これが我が隠岐水産高校という高校の教員なのですが、近畿大学出身の相撲チャンピオンです。彼が行って、相撲というのはこういうことだよということできちんと礼儀からしっかり教えました。そのことがすごく評判にもなりました。

それでこういうふうには仲良しで写真を撮っていますが、プレゼントとして日本のまわしを持っていきました。空輸にするととんでもないお金を取られますので、お前ら、1人ずつ持って行けよ、抱えて行けよということのでだいぶ安く済みました。

次は第4弾ですが、今度はまたポーランドの力士が逆に隠岐へ相撲を取りに来るぞということになって、その年の11月に我が町の五箇地区というところで古い相撲大会があるのですが、そこに参加することになりました。ところが、この向こうの選手はナショナルチームの代表選手で、めちゃくちゃ強いやつらが、下手をしたら165キロのやつもいたのですが、すごい彼らがきまして、我々地元の力士は小さい素人ですけれども、それでも相撲の技のすごさにびっくりして帰りました。

相手の力をうまく使って投げるとか力任せにやるのではないということをちゃんと教えた。そのことが大変喜んでおられました。そしてまた相撲のけいこも一緒にやりましたし、打ち上げも一緒にやりました。それで、こういう状態でみんな言葉も通じないけれども、なぜかすごく仲良しになりました。そこで、友達になるには言葉はいらない、酒があればいいという。とにかく隠岐の人間はよく酒を飲みますので、酒さえあれば、みんなこうやっておっちゃんたちも仲良しになるという素晴らしい交流会ができました。

第4弾
 隠岐・五箇地区相撲大会
 へのポーランド力士参加
 交流

2015年11月、「ぜひ隠岐の相撲大会に参加したい!」というロズム会長からの熱望を地域の皆さんの理解をいただき、五箇地区相撲大会参加が実現した。ポーランドのナショナルチームに入れる実力を持つ彼らと地元力士の熱戦に会場は盛り上がった。
 大会前の地元での合同稽古及び大会後の直会での交流は大変盛り上がった。

友達になるのに、言葉はいらない。
 酒があればいい。




次に第5弾ですが、ついに隠岐の島町と友好都市を結ぼうということで、クロトシン市は早速議会で議決をしまして、よし、もう結びましょうということで、翌年2016年の6月にはぜひ結びましょうということでクロトシン市の市長さんが我が町に来られて、友好都市を結びました。

第5弾
 クロトシン市・隠岐の島町
 友好都市協定調印

2016年6月 クロトシン市からの熱烈なラブコールを受け、遂に友好都市協定を締結することとなった。調印式にはクロトシン市より訪問団12名が来島され、町民が見守る中、盛大に挙行された。
 同年7月には、クロトシン市でも同様のセレモニーが開催され、副町長が出席し、大歓迎を受ける。




そして、さらにその次の月ですが、ポーランドでも同じようなことをやろうということで、またうちの副町長が出掛けて行って、調印式を行いました。こういう形で向こうに行ったわけですが、私も実は同行したわけですけど、クロトシン市の市役所に行くと、こういうきれいな、めちゃくちゃきれいな1メートル80センチぐらいあるような、モデルさんのような職員がめちゃくちゃおりました。我々をびっくりさせるために呼んだのですかと思っていまし

たら、7対3で女性が多いと。市役所は女性だらけだったです。それだけ女性が活躍している市でございました。

第6弾でございますが、その後続く交流ということで、国際交流員さんを配置しております。これは、ポーランド出身の彼女ですが、ポーランド語、日本語、英語が堪能で、通訳はもちろんですけど、インターネットを使ってどんどん情報を発信している。それと町民の皆さんとの交流で、文化交流を行っております。

文化交流ということで、今度は2017年7月ですが、クロトシン市で開催される文化交流にぜひ来てくれということで、また今度は地元のおばちゃんに参加しました。そのとき何を使用かなと言ったときに、ちぎり絵をやろうということで、このおばちゃんがちぎり絵を指導して大変喜ばれたところでございます。

第6弾
その後 続く交流

文化交流

2017年7月 クロトシン市で開催された文化祭に招待を受け、本町より副町長を先頭に、町民の『ちぎり絵』愛好家が渡航し、現地で文化交流を図る。



**国際交流員
(C I R)
の配置**

ポーランド出身の国際交流員を隠岐の島町役場に配置。
ポーランド語、日本語、英語が堪能であり、通訳、翻訳、インターネットを活用した情報発信を担当。
また、町民との様々な交流企画を実施。子どもたちの教育活動～公民館での社会教育活動を展開中。

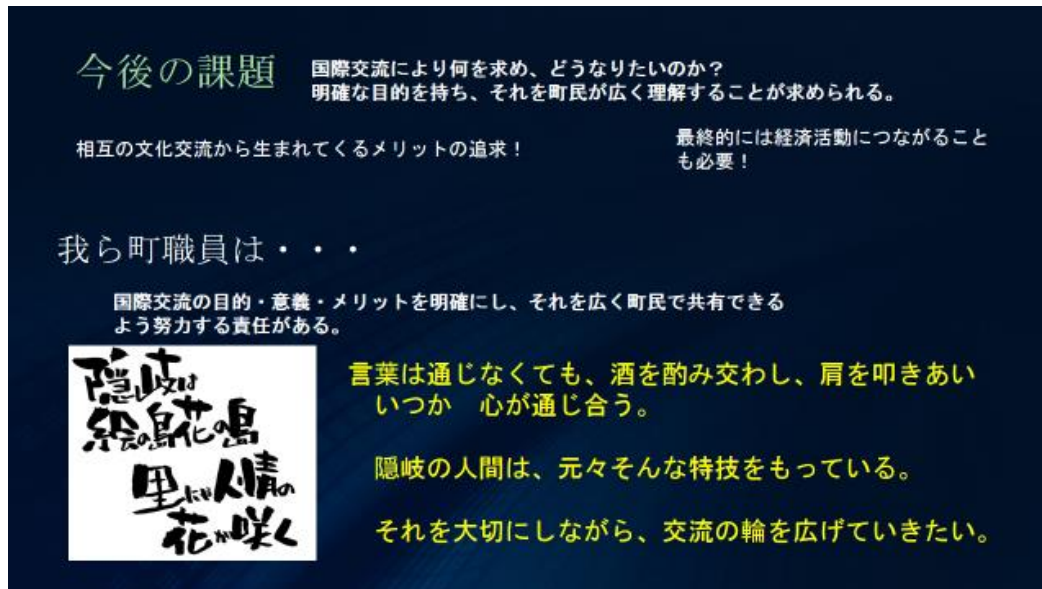


ちなみに、この間ワールドカップのサッカー大会がありましたが、あのときにポーランド対日本という組み合わせがあって、実は我々はもちろん日本を応援するのですが、そうはいつでもポーランドを応援しようぜということでやりましたところ、地元では大変新聞にもテレビにも載りまして、「君が代」国歌斉唱の後、ポーランド国歌斉唱がありましたけど、もちろん口パクで行いました。

今後の課題ということでたくさん書いていますが、国際交流を進めていくのにどういうふうな目的を持って、そのことを町民の皆さんにどう理解していただくかということがすごく大事だと思います。それで、最終的には経済活動につなげようということも大きな目標でございます。

我々町の職員は、このことをしっかり明確にしまして、広く町民の皆さんに共有を図るための努力をしないとイケないということでございます。「隠岐は絵の島花の島、里にや人情の花が咲く」というのは隠岐しげさ節という民謡の歌詞でございますが、隠岐はもともと人情

の島だったということもあります。言葉が通じなくても酒を酌み交わして肩を叩き合えばいつか心が通じるということで、隠岐の人間はもともとそんな特技を持っている。それを大切にしながら、交流の場を広げていきたいということでございます。



今後の課題 国際交流により何を求め、どうなりたいのか？
明確な目的を持ち、それを町民が広く理解することが求められる。

相互の文化交流から生まれてくるメリットの追求！

最終的には経済活動につながることも必要！

我ら町職員は・・・

国際交流の目的・意義・メリットを明確にし、それを広く町民で共有できるよう努力する責任がある。

言葉は通じなくても、酒を酌み交わし、肩を叩きあいつか心が通じ合う。

隠岐の人間は、元々そんな特技をもっている。

それを大切にしながら、交流の輪を広げていきたい。

以上ですが、私はなかなかポーランド語が難しくよく覚えませんでした。唯一「乾杯」というのを「Na zdrowie.」といいます。それをやっと覚えました。逆に先ほど登場した相撲連盟のロズム会長ですが、1つだけ覚えたのが「二日酔い」でございました。どうもありがとうございました。（拍手）

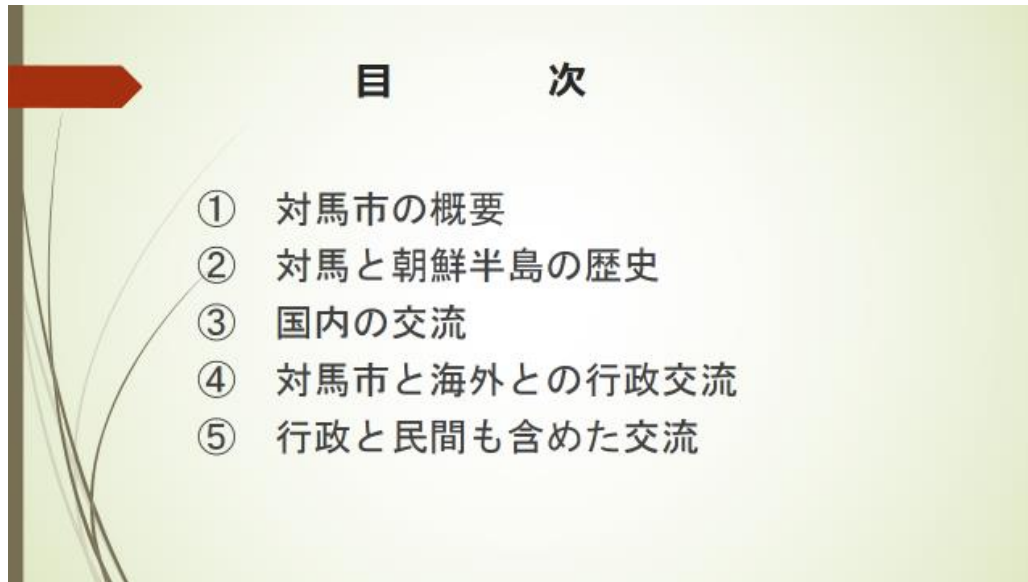
（古川） ありがとうございます。吉田さんは現在、隠岐の島町教育委員会社会教育課長をされていますが、まさに文化交流の最前線におられたということでありがとうございます。では、引き続きまして、今度は対馬市の事例に関して、対馬市しまづくり推進部次長兼政策企画課長の阿比留裕史様にご報告いただきます。よろしくお願いいたします。

（阿比留裕史） よろしくお願いたします。対馬市の行政交流についてご紹介をさせていただきます。私もいろいろ冗談を言ったりしたいなと思っていただけですけれども、そういう余裕もございませんので、こういう中身で紹介をさせていただきます。

ただし、対馬市の概要は飛ばさせていただきます。1つだけ、この7月23日からJRの九州高速船のビートルが福岡・比田勝という国際線は福岡・釜山を走っているのですが、その船に寄っていただくということができましたので、これは画期的に国際線と国内線が同じ船の中で仕分けをしてという形になっております。月曜日が上り、火曜日・水曜日が往復、木曜日が下りという路線でございます。

ここにいらっしゃる古川先生が初便で乗っていただいております。皆様もぜひ対馬に来ら

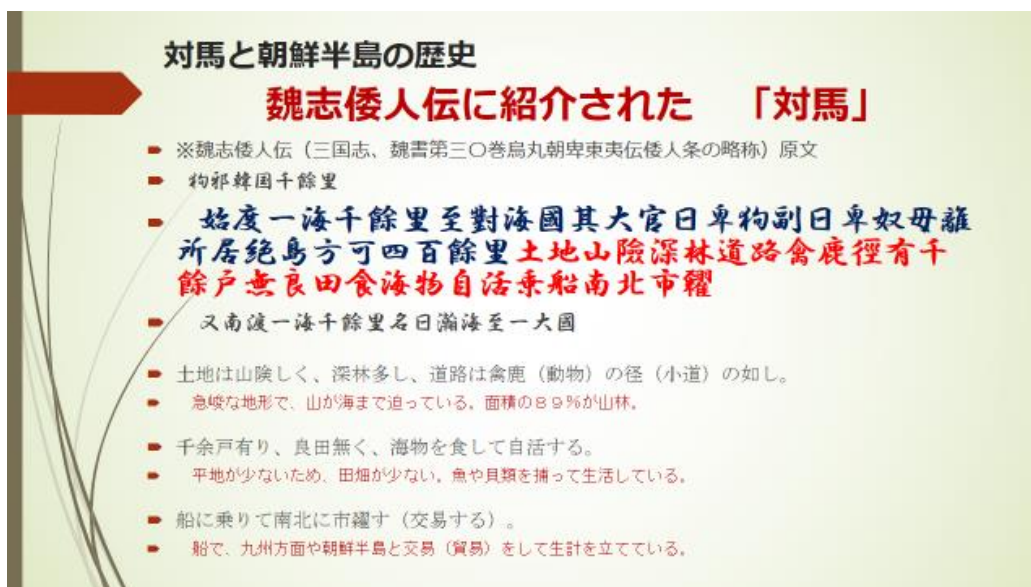
れることがありましたら、福岡から比田勝に入ってください、それから南下していただいて厳原から出られるというパターンもあろうかと思しますので、ぜひ乗っていただきたいと思ひます。



目 次

- ① 対馬市の概要
- ② 対馬と朝鮮半島の歴史
- ③ 国内の交流
- ④ 対馬市と海外との行政交流
- ⑤ 行政と民間も含めた交流

『魏志倭人伝』の紹介もしたかったのですが、とにかく対馬は五島と違って平野がございません。そういう中で、大昔から「南北に市糴す」ということで、市糴というのは今で言う貿易です。「糴」と書いて穀物を買うことという意味だそうですが、昔から福岡やら朝鮮やらに買い物に行き、やっと自活できていたという島でございます。



対馬と朝鮮半島の歴史

魏志倭人伝に紹介された 「対馬」

- ※魏志倭人伝（三国志、魏書第三〇巻烏丸朝鮮東夷倭人条の略称）原文
- 狗邪韓国千餘里
- **始度一海千餘里至對海國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絶島方可四百餘里土地山險深林道路禽鹿徑有千餘戸无良田食海物自活乘船南北市糴**
- 又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國
- 土地は山険しく、深林多し、道路は禽鹿（動物）の徑（小道）の如し。
- 急峻な地形で、山が海まで迫っている。面積の89%が山林。
- 千余戸有り、良田無く、海物を食して自活する。
- 平地が少ないため、田畑が少ない。魚や貝類を捕って生活している。
- 船に乗りて南北に市糴す（交易する）。
- 船で、九州方面や朝鮮半島と交易（貿易）をして生計を立てている。

さまざまに朝鮮半島からは物が入ってきております。石器文化、青銅器文化、古墳文化、文字、漢字ですね、稲作であるとかそば、神社、仏教というものが朝鮮半島から対馬に入っ

てきて、対馬から壱岐、福岡というふうに九州の方に行っております。韓国の人からはよく冗談でサツマイモと花札とトウガラシ、「コグマ、ハットウ、コチュ」という3つしか伝わっていないというようなことを言われます。



一例を出しますと、対馬藩の年間の貿易額が6万5,000両だったと言われております。徳川幕府の1年間の直轄領から入る年貢米を金額に換算すると70万両だった。現在の価格に直すと、国の税収が70兆円で、貿易額が対馬だけで6兆5,000億円というとんでもない数字です。しかし、現実是对馬の総生産額でさえ、今は1,000億円程度でございまして、当時の65分の1程度しかないというレベルでございまして、韓国と言うか朝鮮と密接に関係して、やっと成り立っていた島でございまして。

今申しましたように、朝鮮半島とは友好の関係もございましてけれども、一方では戦争の争いの歴史もあります。遣唐使、遣隋使みたいな形、こちらも遣唐使がかなり往来されたということですが、遣新羅使まで含めて、いろいろな歴史の交流がございまして、刀伊の入寇であったり、蒙古の襲来であったりさまざまな被害があります。最近では日韓併合、「日帝36年」という言葉が韓国ではございまして、1910年から1945年まで暗い歴史もございました。

この後、韓国との国交は途絶え、一時中断しますけれども、一衣帯水の関係は、距離的な関係は変わるわけではなく、今では対馬と釜山市の間に定期航路が4事業者、平日には4往復、週末には7往復してございまして、新たに5社目の会社が船の準備が終わり、6社目の参入も検討されております。

対馬と朝鮮半島の歴史

● 侵攻と親交の要衝

- 遣隋使・遣唐使・遣新羅使（600年～700年頃）
- （白村江の戦い：663年）
- 刀伊の入寇（1019年）
- 蒙古の襲来（文永の役：1274年 弘安の役：1281年）
- 応永の外寇（1419年）
- 秀吉の朝鮮出兵
- （文禄の役：1592～3年、慶長の役：1597～8年）
- 朝鮮通信使（1607年～1811年）
- 日露戦争－対馬沖海戦（1905年）
- 日韓併合（第2次世界大戦まで）1910年～1945年

お示ししたのは、対馬が行政交流を提携している国内外の自治体です。岡山県の瀬戸内市とは朝鮮通信使がご縁で、次の中津川市とは天然記念物のヒトツバダコというのがありますが、それが両市町にあったという形で締結しております。それから、滋賀県の長浜市ですね。これは朝鮮通信使の交流の中で、雨森芳洲という儒学者がおられるのですけれども、その儒学者の方が、今は長浜市ですけど旧高月町の出身であったということで、縁組を結んでおります。

対馬市の行政交流一覧

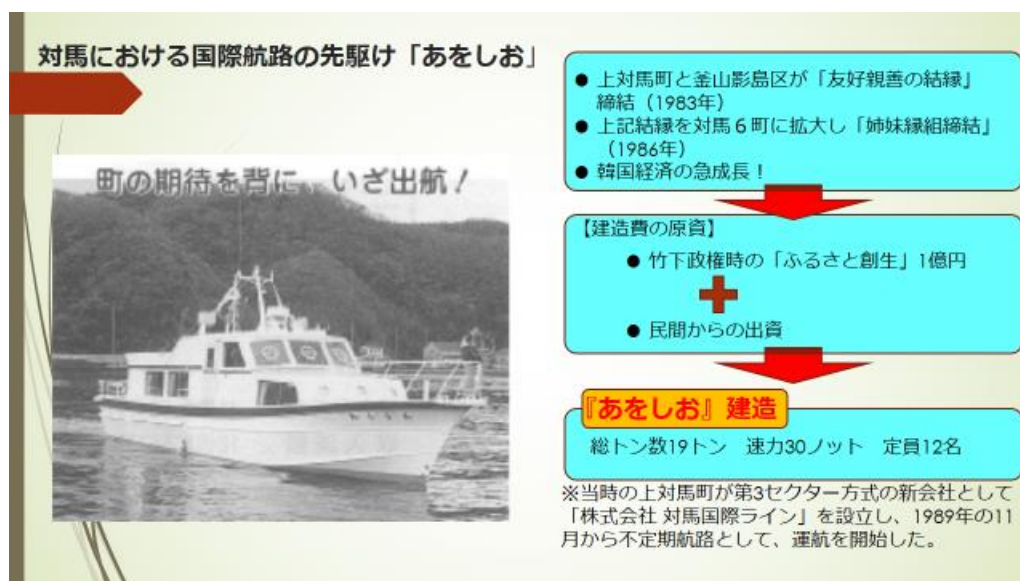
	都市名	協定名称	目的	経緯
国内	岡山県瀬戸内市	姉妹市縁組	朝鮮通信使を援縁として互いに交流を図り、友好親善を深める	1996年(H8)11.2 旧厳原町と旧牛窓町で縁組。 2006年(H18)11.11 町村合併により再締結。
	岐阜県中津川市	姉妹都市提携	国指定天然記念物ヒトツバダコを通じ、両市の環境歴史文化を学び、更なる友好親善関係を築く	1996年(H8)5.26 旧上対馬町と姪川村で縁組。 2007年(H19)11.3 町村合併により再締結。
	滋賀県長浜市	友好のまち縁組	雨森芳洲先生ゆかりの町として、相互の協力により広く交流し、友好と繁栄に寄与する	1998年(H10)11.22 旧厳原町と旧高月町で縁組。 2009年(H21)10.17 町村合併により再締結。
	沖縄県竹富町	友好都市協定	天然記念物の保護活動の活性化及び文化・教育等の連携協力	2015年(H27)10.8 対馬市と竹富町で「ヤマネコ愛！ランド共同宣言」 2016年(H28)7.7 友好都市協定締結(環境省に於いて)
国外	アメリカ合衆国 グアム準州(グアム島)	姉妹島協定		1977年(S52)2.21 対馬町村会とグアム島が姉妹島協定締結。
	大韓民国 釜山広域市影島区	姉妹縁組	両地域の発展と繁栄の促進	1983年(S58)11.8 旧上対馬町と影島区が縁組。 1986年(S61)11.16 対馬町村会と影島区が縁組。 1994年(H6)9.2 対馬町村会と影島区が行政交流協定締結。 2005年(H17)11.16 町村合併により再締結。
	大韓民国 蔚山広域市蔚州郡	友好協力了解書	朴提上殉国碑と李藝先生追慕碑の保存及び追慕祭の開催協力	2005年(H17)2.1 文化交流協力に関する意向書を締結。 2005年(H17)11.15 友好協力了解書を締結。
	中華人民共和国 上海市崇明区	友好関係覚書	両国民の相互理解と友情を推進し両地の友好関係と協力共栄を発展させる	2012年(H24)7.13 対馬市と崇明区が友好関係覚書締結

国内の最下段には竹富町と書かせてもらっておりますが、もちろん国境のというかボーダーの地域であったということもありますけれども、お互いヤマネコが、イリオモテヤマネコとツシマヤマネコという関係の中で竹富町さんとも結ばせてもらっております。

お示した資料には書いておりませんが、この表以外で旧対馬藩の飛び地だったという、自給自足ができなかつたので米を作っていたので、そこで生産された米をという形の中で、佐賀県基山町と鳥栖市とはさまざまな交流も行っております。また、岡山県総社市、それと鹿児島県の南種子町とは毎年赤米サミットを開催し、交流をしております。

次に外国とのことになりますが、このグアム島というのは先ほどの三谷さんの言葉を借りると遠距離きっかけ型という形で、最初の交流こそ活発にやっていたのですが、20年ほど前を境に、今は疎遠になっております。それから1つ飛ばして、この大韓民国蔚山市蔚州郡というところについては、対馬に蔚州出身の偉人の記念碑があったというご縁で作っております。それから、上海市崇明県とも締結はしておりますけれども、交流は続いておりません。休止しています。

最後にメインとなる交流をご説明いたします。まずきっかけから言いますと、1983年に当時の上対馬町と釜山直轄市影島区という釜山の一番南端にある区があるのですが、そこと姉妹締結を結びます。その後、韓国の急成長もあり、上対馬町では1989年、当時竹下首相がふるさと創生資金ということで全国の自治体に1億円を配分されて、それを財源に民間から出資を募り、19トン、30ノットの12名乗りの交通船という旅客船ではない船を建造いたします。その船を1989年から不定期航路として参入するわけです。



皆さんご存じの JR のビートルが 1991 年ですから、その 2 年前からこの「あをしお」でいち早く航路をつくったということが今日の対馬の繁栄の一点ではないかと私は思っております。この航路が呼び水になり、先ほども申しましたが、多い日には 3,000 人、年間 35 万人がこられるようになっておりまして、比田勝港は国内では 8 番目の出入国者数、クルーズ船を除く正規外国人入国者数では博多港を抜いて全国第 1 位の港になっております。

これもちょっと見にくくはございますが、影島区との 1995 年からの行政交流という形で、

以来、ずっと毎年続けております。2008年が1回飛んでおりますけれども、毎年行政交流という形で15名の職員を訪問し、訪問してもらい、こちらから25名程、受け入れ側も25名程参加して、お互いの決めたテーマに基づいてお話をしながらやっていくという形で交流を続けております。

行政交流セミナーの実績

年度	対馬市	影島区	開催地
1995	地方行政組織について		対馬市
1996		地方自治団体の国際化対応方案	影島区
1997	対馬市・影島区の産業及び経済交流	影島区・対馬島の産業及び経済交流	対馬市
1998	自治体の発展に関する事業展開	自治体における経営収益事業	影島区
1999	低所得層の社会福祉現況	低所得住民のための公的扶助の研究	対馬市
2000	新しい日韓交流方案	影島の海洋観光資源開発方向	影島区
2001	行政サービス向上方案	顧客満足のための奉仕行政向上方案	対馬市
2002	農業町保健行政の住民健康診療	21世紀影島区の保健行政推進方案	影島区
2003	対馬島のごみの現状と対策	影島区の生活ごみの効率的な管理	対馬市
2004	対馬市と韓国間の物的交流	地域住民と共に呼吸する図書館	影島区
2005	対馬市の社会福祉行政	高齢者介護(看護)保障制度導入の考察	影島区
2007	対馬市防災計画	効率的な避難安全管理法案	対馬市
2009	地域住民の生涯学習に関する事例	自治村実現のための未来の有望教育方案	影島区
2010	環境実践モデル都市の実現を目指して	EM産を活用した環境にやさしい影島造成	対馬市
2011	資源管理型漁業の確立と海洋保存区域設定ための目標	海洋環境改善の漁業人の所得増大方案	影島区
2012	対馬市の地域行事	影島区地域祭りの活性化法案	影島区
2013	新病院及び観光交流センター建立計画	東三革新都市のビジョンと未来	対馬市
2014	地域文化芸術会館の役割	地域文化芸術会館の役割	影島区
2015	対馬市の市勢現況	地方財政の拡充方案	対馬市
2016	都市再生整備計画事業について	海を抱く村への再創造、影島は都市再生中	影島区
2017	雇用対策における移住・定住施策の推進について	区民が幸せな都市「影島」造成のための公共分野雇用事業推進事例	対馬市
2018		環境問題について	影島区

これが一昨年の影島区で行われたときの行政交流セミナーの様で、お互いの出したテーマでそれぞれやっております。昨年は雇用対策という形で、対馬市側が「雇用対策における移住・定住施策の推進について」、影島区側が「区民が幸せな都市影島造成のための公共分野雇用事例」というような形でやっております。今年度は環境問題をテーマに、影島区で11月14日から2泊3日の日程で開催され、対馬市からは15名が参加予定です。



現在では実施されておきませんが、1995年から対馬が6町であったということから6年間、影島区の職員と対馬の町の職員が3ヶ月程度、お互いの庁舎で勤務し合う交換勤務を実施しました。どういう巡り合わせか分かりませんが、第1回対馬の第1号の職員は私でした。

最後に行政と民間も含めた交流についてまとめております。釜山外国語大学が核となって、船会社の大亜高速、それと旧上県町という町が3者協定を結びました。

⑤ 行政と民間も含めた交流
産・学・官の国際交流協定

2003年(H15)7月 榊大垂高速海運、釜山外国語大学、旧上県町、
による三者協定を締結
2007年(H19)11月 対馬市として再締結

目的 国際交流の活性化を図り、国際化・地方化時代に添い
地域社会の相互発展に寄与する

毎年、釜山外国語大学校学生による海岸漂着ゴミ清掃を実施

年度当初に、釜山外国語大学の新生のオリエンテーションを対馬市で開催し、その後2日間はごみ拾いをさせていただくことで、対馬の海岸はきれいになり、航路事業者は人を運び、外大は事業をPRすることで学生が集まるという仕組みで、協定からは15年が経過しておりますが、現在も継続しております。

⑤ 行政と民間も含めた交流
国際交流協定（教育交流）

○姉妹校縁組

1993.11.1	難知中学校	新仙中学校（釜山広域市影島区）
2000.7.27	今里中学校	只沙中学校（任實郡只沙面）
2003.3.27	浅海中学校	熊村中学校（蔚山広域市）
2007.11.3	対馬高校	釜山情報観光高等学校

次にまとめたスライドは、市内の学校と各国の学校の協定になります。ここで特徴的なものを紹介させていただきます。対馬には県立高校が3つあります。五島も確か特別なコースを設定してあるようですが、対馬高校では国際文化交流コースという、今、全学年で54名いるということですが、韓国語を勉強したり、韓国文化を勉強したりして、将来は韓国語を生かしたり、国際交流経験を生かした職業に就きたい生徒が、県外からもこのコースに入学をされ、勉強される方が増えております。

参考までに、韓国の大学に進学された2010年からの生徒数を昨年の生徒数まで掲載しておりますが、高校の先生の話では、最近では増加傾向にありますというような形で聞いております。

⑤ 行政と民間も含めた交流
対馬高校の国際文化交流コース

- 学級数・生徒数 各学年 6学級(480名) ※2018年4月現在
 - ・普通課：4クラス 327人(全学年)
 - ・国際文化交流コース：1クラス(54名(全学年))
 - ・商業科：1クラス 99名(全学年)
- 2003年(H15)に韓国語や韓国の歴史・文化を学ぶ「国際文化交流コース」を開設。

韓国の大学への進学者数
 '10:1 '11:1 '12:4 '13:2 '14:10 '15:3 '16:4 '17:6

- 韓国情報観光高等学校と姉妹縁組(2007.11.3)
- ユネスコスクール加盟(2015.02)

そのような交流を通じて、民間のあるいは芸術・文化の交流というような形で続いております。バドミントンであったり、野球であったり、ホームステイも交流であったり、民間団体同士では国際ロータリークラブであったりという形でやっております。

⑤ 行政と民間も含めた交流
民間の国際交流協定

○スポーツ交流

1998(H10)年～ 上県町バドミントンクラブ	影島区バドミントンクラブ
2002(H14)年～ ツシヤママネコクラブ	釜山OBラグビークラブ
2003(H15)年～ 対馬ソフトテニス連盟	慶州ソフトテニス連合会
2017(H29)年～ 対馬野球連盟	慶南高校OBチーム

○その他の交流

- ・ホームステイ事業
- ・日韓交流写真美術展
- ・青少年等国際交流体験事業
- ・日韓歌謡大会

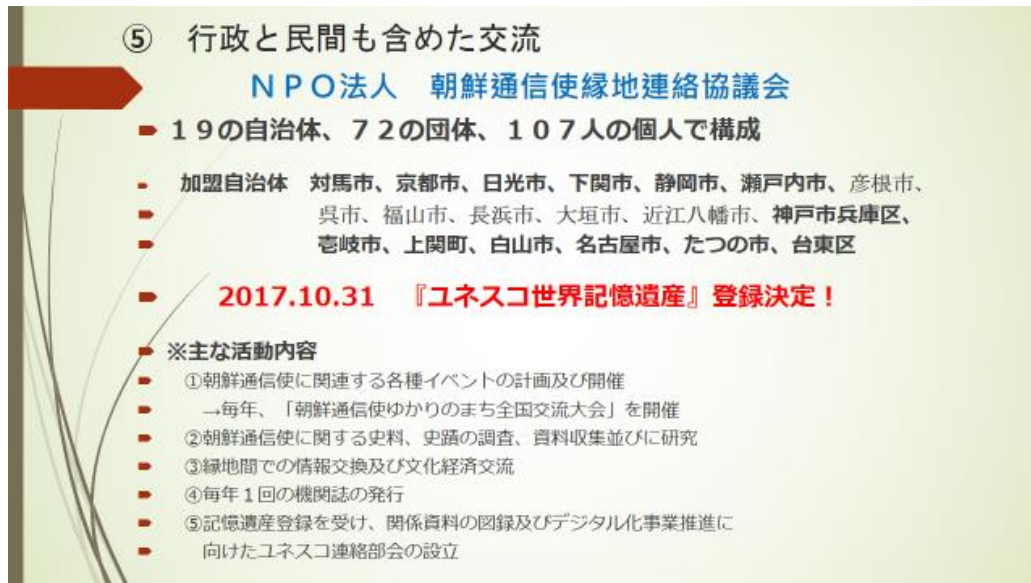
○民間団体の縁組

- 1983.2.21 対馬ライオンズクラブ：釜山東洋ライオンズクラブ
- 1992.11.26 対馬ロータリークラブ：巨済ロータリークラブ
- 1984.11.17 つしまハムクラブ：釜山ハムクラブ

最後に、NPO 法人朝鮮通信使縁地連絡協議会、通称「縁地連」のご紹介をいたします。設立の経緯は、先ほどもご紹介した雨森芳洲の時代、江戸時代の260年間、日朝は争いもなく平和な時代であったことに考えを寄せ、朝鮮通信使を支えた「誠信の交隣」を基本姿勢とし

て、朝鮮通信使にかかわりのある縁地により 1997 年に結成されました。

2012 年からは、世界ユネスコ遺産に登録すべく、共同で推進し、共同で申請し、めでたく
昨年 10 月 31 日「ユネスコ世界記憶遺産」というものに登録されております。毎年定期大
会と機関誌の発行が行われておりますが、今年は上関町で開催されるということで聞いてお
ります。



⑤ 行政と民間も含めた交流

NPO法人 朝鮮通信使縁地連絡協議会

- 19の自治体、72の団体、107人の個人で構成
- 加盟自治体 対馬市、京都市、日光市、下関市、静岡市、瀬戸内市、彦根市、
呉市、福山市、長浜市、大垣市、近江八幡市、神戸市兵庫区、
豊岐市、上関町、白山市、名古屋市、たつの市、台東区
- **2017.10.31 『ユネスコ世界記憶遺産』登録決定！**
- ※主な活動内容
 - ①朝鮮通信使に関連する各種イベントの計画及び開催
→毎年、「朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流大会」を開催
 - ②朝鮮通信使に関する史料、史蹟の調査、資料収集並びに研究
 - ③縁地間での情報交換及び文化経済交流
 - ④毎年1回の機関誌の発行
 - ⑤記憶遺産登録を受け、関係資料の図録及びデジタル化事業推進に
向けたユネスコ連絡部会の設立

以上、このスライドのコピーが 5 部ありますので、いる方がおられましたら後で言って
いただければ差し上げたいと思います。(拍手)

(古川) ありがとうございます。限られた時間の中で、対馬市はいろいろなところと交
流されていることを非常にわかりやすくまとめていただいている、皆さんの理解も深まった
と思います。では、最後に竹富町の事例に関して、竹富町政策推進課長の通事太一郎様より
ご報告いただきます。よろしくお願いいたします。

(通事太一郎) ありがとうございます。皆さん、こんにちは。竹富町政策推進課の通事と
申します。私が働く竹富町役場部局には実は私を含めると、通事が 3 人おります。それぞ
れ出身とする島が異なりまして、実は血縁関係というのもございません。

どうも通事というのは祖先が「つうじ」と呼ばれる他国との交流の中で通訳をする、そう
いう役職者だったらしいのですけれども、私自身はまったくさっぱりその辺の能力が発揮さ
れませんでした。本日はご先祖様ごめんなさいということも含めて、皆様との間で竹富町
そのものをご理解いただくための通訳としてやっていきたいと考えております。

また、私の所属する政策推進課は、昨年度の機構改革でできた新しい課でございまして、
企画や交通政策、情報政策、自然環境、観光振興、そして役場移転を柱とする 6 つの係がご

ございます。竹富町は旧企画係が中心となって、この JIBSN のセミナーをはじめ、ご参集の皆様とは長いお付き合いがあると伺っております。

しかし、その間も幾度が人事異動や昨年度の機構改革で大きく体制が変わったこともあり、現在、担当課としてはこれまでの知見の再構築と地的な資源に対する経験の蓄積を行っている最中で、私自身も今回セミナーへは初めての参加となります。何が言いたいかというところから一緒に勉強させていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

本日のセッション、境界自治体の行政交流について、竹富町は姉妹町と友好都市という 2 つの自治体間交流をメインにお話をさせていただきます。はじめに本町の少し変わった特性をご理解いただくために、町の概要と歴史的、地理的なお話をさせていただきます。その後、姉妹町の斜里町との行政交流、友好都市の対馬市との行政交流のお話をさせていただきます。

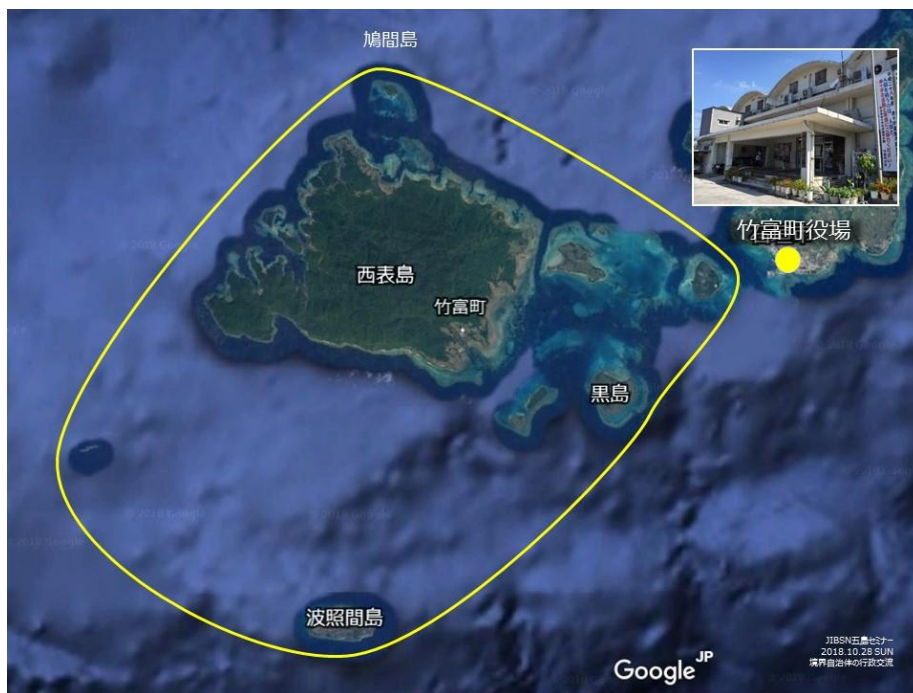
まず、竹富町の概要です。竹富町は琉球列島の最南端、八重山諸島に属する 9 つの有人島と 7 つの無人島からなる島嶼の町です。東西約 42 キロ、南北 40 キロの広範囲に及び、日本最南端の有人島である波照間島を有しています。本町は、この波照間島を有しているため、以前から境界地域の自治体であることをお話しさせていただいておりました。



冒頭、本町の大浜政策調整監のごあいさつの中でも触れましたが、竹富町は 2007 年に施行された海洋基本法に基づき、自治体として初となる海洋基本計画を策定しており、現在は第 2 期の計画に基づいて、各種施策や事業を展開しているところがございますが、この策定の過程で本町を構成する 9 つの有人島のうちの 4 つが領海を形づくる国境有人離島であるという定義が明確になり、あらためて本町は国境地域の自治体であるという認識を深くしていると

ころでございます。

その境界の自治体である竹富町の現在の人口は、4,410名。産業は観光を中心とする第三次産業が7割を占めており、年間100万人の観光客の方に島々へお越しいただいております。本町の大きな特色に自分たちの自治区域外に役場本庁を置き、行政運営を行っているというものがございます。これが本庁の区域ですが、本庁舎はお隣の石垣島にございます。このような例は、3,718ある全国の自治体の中でも数が少なく、竹富町以外では、鹿児島県、それぞれ鹿児島市内に本庁舎を持つ十島村と三島村の計3カ所のみとなります。



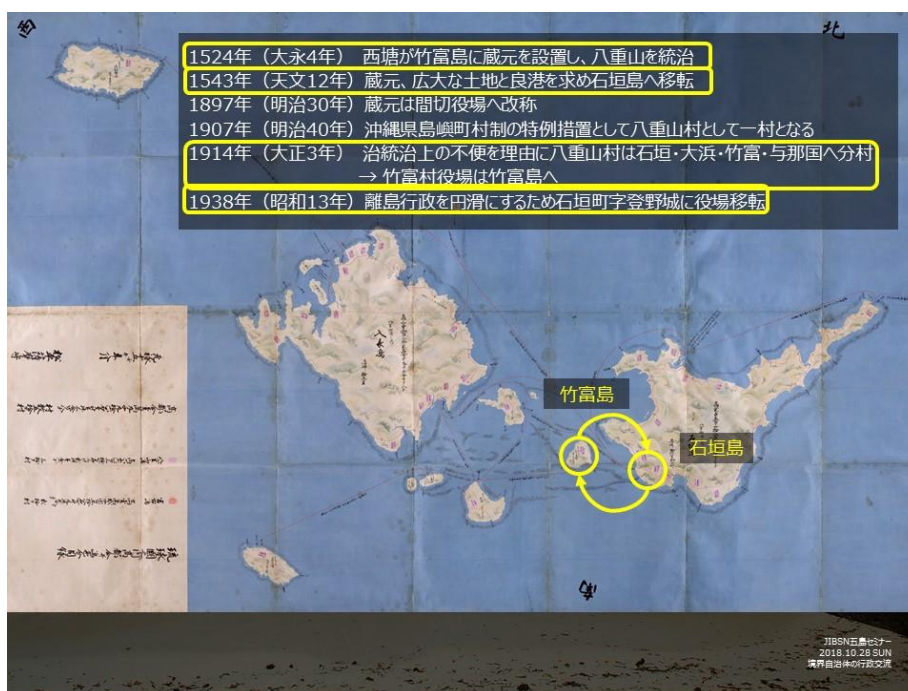
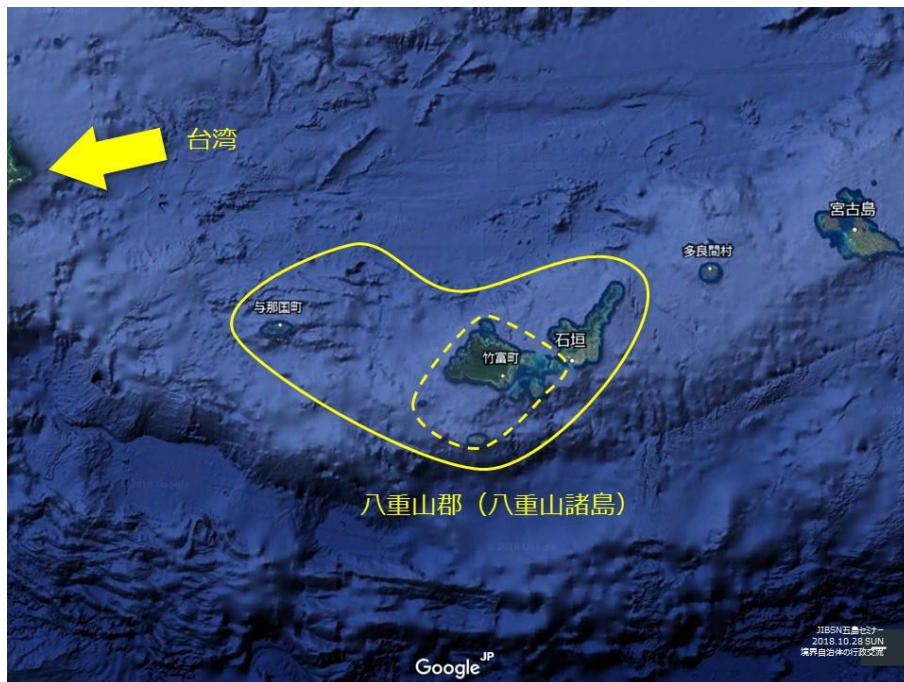
なぜこのような行政区になったかというところが、地勢的な要因から来る歴史的な背景がでございます。この地図をもう少し引いた視点で見たいと思います。こちらです。これはこれより引いて見ますと、北東の方に多良間島と宮古島、西に与那国が見えてまいります。この範囲はいわゆる南琉球と呼ばれているところになります。

ここで出てくるのが八重山諸島というものが所属する、八重山郡という地域になります。この八重山というくくりで見たときに、ここでは距離的にはまだ多良間の方が近いところにあるにもかかわらず、こちらは八重山とは呼ばれておりません。

この地図は、琉球国八重山島といいます。元禄15年8月とありますので、1702年、今から316年ほど前のものになります。実は本町の行政的な歴史というのは、この1524年西塘という人物が竹富島に蔵元という国の出先機関を設置し、この地図にあるすべての島を八重山という1つのくくりで統治したのが始まりとなります。

その後、この行政拠点が何度か石垣島と竹富島の間を行ったり来たりするのですが、1938年、昭和13年になります。離島行政を円滑にするために、その当時の石垣町字登野城に役場

移転をして以来、現在に至るまでこの石垣島に役場本町を置き、行政運営を行っております。



その八重山ですけれども、先ほどの地図の中に台湾が入ってきているのが分かりますか。その端っこは台湾ですけれども。実はこの八重山、その先端にある与那国町からわずか 110 キロほど先の海外がございます。これは沖縄県というエリアで見るとより顕著になりまして、県全体としても琉球王朝の時代から海外との交流は非常に活発でございました。

また、ここまで引くと、本日のセミナーの開催地であるこちら、五島市が見えてまいります。竹富町と五島市の距離は、直線距離で約1,000キロ余り、1,035キロほどになるかと思います。さらに引くと日本全体が見えてきますが、ここまで見えてきたところで、次に具体的な境界自治体の行政交流として、竹富町と斜里町についてお話をさせていただきます。



日本列島の北東端と南西端にそれぞれ原始性豊かな知床国立公園と西表石垣国立公園を抱える両町は、その優れた自然環境を整備し、豊かな自然と日本の国づくり、人類生存の基盤である自然の保護に寄与することを目的に、1973年1月に姉妹町の盟約を取り交わしました。



こちらがその当時の様子ですね。東京で姉妹町の締結を行ったと伺っております。以来、両町はこの国立公園の観光開発や自然保護等共通する諸問題について意見交換や各種交流を重ねる中で、双方の友情理解を深めてまいりました。双方の町役場職員の人事交流や学校現場での児童生徒が双方向に行き来する学校交流等も実施しております。

なお、今年はこの姉妹町盟約45年という節目を迎えておりました、文化やスポーツ、産業など、あらゆる分野での交流を通じ、行政や民間レベルでの交流でさらなる輪が広がっております。両町の間では、毎年あらゆる形で交流が行われているのですが、2015年には西表島で行われた、4年に1回大きなお祭りがあるのですが、こちらの方にも斜里町の方におみえいただき、その技のほどを披露していただきました。



逆に毎年恒例の知床夏祭り、しれとこ斜里ねふたの中で行われる竹富町物産即売会では、パイナップルやマンゴーなど熱帯果樹を販売し、斜里町の皆様に人気を博しております。また、1993年には竹富町との姉妹町盟約20周年記念、また斜里町は青森県弘前市と友好都市盟約を締結しているのですが、その10周年を記念し、知床博物館に隣接する形で姉妹町友好都市交流記念館というものが建設されております。これは、ふるさと創生事業による斜里町博物館の施設拡充と竹富町や弘前市の自然、歴史、文化を学び、交流促進を図るため、知床博物館に接続して建設されたと伺っております。

これと関連しまして、2008年には知床斜里と本場青森県弘前のそれぞれのねふたが、竹富島の島の中を練り歩く、南北芸能交流のつどいというものが開催されました。これは姉妹町盟約35周年のときに記念して行われたもので、津軽三味線や手踊り、島の芸能なども披露され、互いの芸能を通しての交流を深めております。

また近年は西表島をはじめとした奄美・琉球地区の島々を世界自然遺産へ登録しようという動きがございます。2005年7月に世界自然遺産へと登録された知床を有する斜里町は、本町にとっても大先輩であります。その知見というものは、我々にとっても非常に重要なものであり、現在もさまざまなおところでご支持、それからご協力等いただいております。

続きまして、2つ目として、今度は竹富町と対馬市の友好都市協定という境界自治体間の行政交流についてお話をさせていただきます。竹富町における豊かなたぐいまれなる自然環境の象徴として、このイリオモテヤマネコが存在があります。1965年に西表島で発見され、同1967年に学会で発表されましたけれども、20世紀に入って発見された中型以上の哺乳類としては非常にまれな存在でした。

また、当初はネコの中でも原始的な形態を有する新属新種と発表されたこともありまして、

その発見は大きく取り上げられたのですが、現在は遺伝情報等の解析・分析により、独立種ではなくアジア東部に生息するベンガルヤマネコの亜種という形に分類され、国の特別天然記念物になります。

そんな竹富町と同じくツシマヤマネコが生息するのが対馬市です。ヤマネコが生息する島を有する、国内では両市町以外にはない特別なつながりがあるということをかんがみ、2015年10月に西表島においてヤマネコアイランド共同宣言を行い、人とヤマネコが共生できる環境づくりを推進するとともに、豊かな自然環境を未来に残し、将来世代につないでいくために両市町で連携協力を確認いたしました。

このヤマネコアイランド宣言を行ったことを契機に、両市町間でヤマネコの保護増殖や自然環境保全を中心に、教育、文化、産業などのさまざまな交流がなされるように、これを公共的なものとするべきと両市町の思いが一致したことから、友好都市協定の締結に向けて歩みが進められました。ヤマネコが友好都市を取り持つ縁の基礎となっていることから、両市の保護増殖事業を通じて、両市町とかかわりの強い環境省が友好都市締結の立会人となり、2016年に環境省において友好都市協定の締結が取り交わされました。



以降、こういった保護増殖や自然保全を中心に、双方で教育、文化や産業など、さまざまな分野において連携と交流、この促進を図っております。例えば今年、これは8月になりますが、「国境の島、対馬を学ぶ」と題し、友好都市対馬市スタディーツアーが行われました。

ツアーには町内の小学生が参加をしております。その小学生児童は、対馬と竹富町の違いをしっかりと学んでいきたい。もしくは自分の住んでいる島との違いに気付きたい。それぞれの生物の違い等をしっかりと学んでいきたいというふうに非常に意欲を持ってそれぞれの事業に取り組んでまいりました。このようなことを今後双方で働き掛けて、実施していければと考えているところでございます。

ところで、ここ数年はこのヤマネコのつながりの活動が活発化しまして、先行してしまっているのですけれども、実は竹富町と対馬市との交流はそれ以前から海岸漂着ごみを通じた連携というものがございました。本町が整備した漂着物のプラスチックを油に変える油化プラントを参考に、焼却炉と連携させた漂着ごみの活用などを対馬市の方でも行っていると聞

き及んでおります。

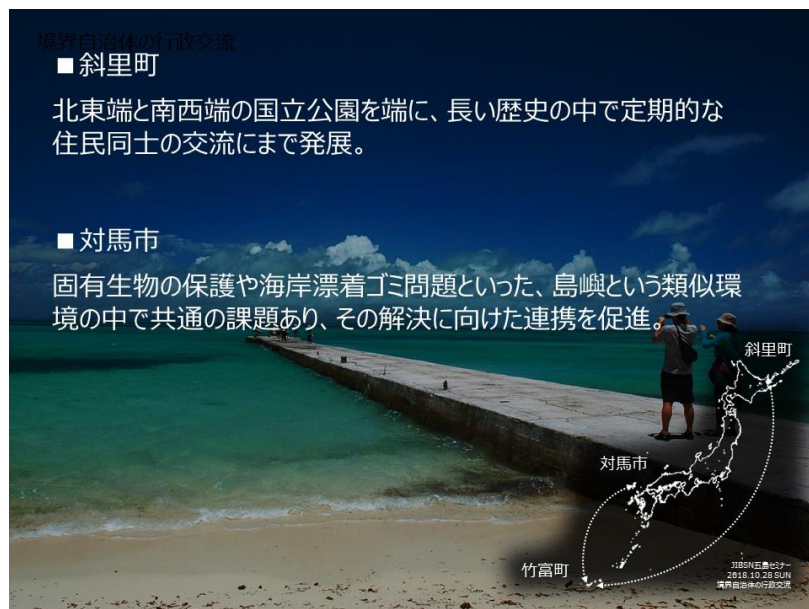


一時期、このあたりの活動は途絶えてしまっているのですが、今後、行政間交流の中で町も現在、新しい地域おこし協力隊を活用した体制を今構築中でありまして、今後さらなる技術交流というものを図っていただきたいと思いますと考えております。

非常に駆け足ではありましたが、ここまでのお話をまとめておきます。竹富町における国境自治体行政交流は大きく2カ所で、斜里町とはそれぞれの国立公園を端に、長い歴史の中で定期的な住民同士の交流にまで発展をしております。また、対馬市ともヤマネコを端に、固有の生物の保護や海岸漂着問題といった島嶼という類似環境の中で共通の課題がございますので、その課題解決に向けた連携を進めているところでございます。

国境自治体行政交流

- 斜里町
北東端と南西端の国立公園を端に、長い歴史の中で定期的な住民同士の交流にまで発展。
- 対馬市
固有生物の保護や海岸漂着ゴミ問題といった、島嶼という類似環境の中で共通の課題あり、その解決に向けた連携を促進。



時々の密度にはさまざまな差異はございますけれども、両市町とも今後とも教育や文化、産業をはじめ、さまざまな分野において連携と交流、その促進を恒久的なものとして、友好親善を図っていききたいと考えております。私の方からは以上になります。ご清聴ありがとうございます。

ございました。(拍手)

(古川) ありがとうございます。では、小笠原村の行政交流に関して説明をして、その後コメントもします。

小笠原村における行政交流に関して、スライドを送っていただきましたが、友好都市提携としましては東京八丈町と山梨県南アルプス市、それから事業提携として東京杉並区と交流を行っているということで、経緯に関してはこのスライドに書いてある通りとなっております。小笠原氏の発祥地をはじめ歴史的な経緯が友好都市提携で、事業提携に関しては子ども自然体験交流事業推進宣言をもとに自治体間交流の一環として受け入れているということになっております。

1. 行政交流の種類(狭義)

(1) 友好都市提携

① 東京都 八丈町

【宣言】 昭和63年6月26日締結

【経緯】 文久2年(1862年)、八丈島民38名が、江戸幕府による最初の小笠原島開拓のため移住したことによる。

② 山梨県 南アルプス市

【宣言】 昭和63年6月26日締結

【経緯】 文禄2年(1593年)に小笠原貞頼が小笠原島を発見したと伝えられ、その小笠原氏の発祥地であり、「小笠原」の地名が残っていることによる。

(2) 事業提携

① 東京都 杉並区

【宣言】 平成25年7月26日子ども自然体験交流事業推進宣言締結

【経緯】 杉並区が実施している自治体間交流推進の一環として受入

八丈町とは八丈町民と小笠原村民の交流会の実施ということを行っておりますし、また南アルプス市に関しては中学生の相互訪問による交流事業を実施しております。

2. 交流の内容

(1) 友好都市提携

① 東京都 八丈町

【事業内容】

◎ 八丈町民と小笠原村民の交流会の実施

- ・毎年6月 八丈町民(約150名)が小笠原村に来島
- ・それに合わせ、東京発小笠原行(直行)の定期船が八丈島に寄港



2. 交流の内容

(1) 友好都市提携

② 山梨県 南アルプス市

【主な事業】

◎ 中学生の相互訪問による交流事業の実施

- ・毎年、交互に、中学生が夏休みを利用し訪問
- ・各々の中学生同士の交流、地域住民との交流を行う



最後に杉並区に関しましては、杉並区の中学生が小笠原を訪問し、体験交流事業を実施して、毎年約20名の中学生が小笠原村に来島されて、それで村民との交流を深めているというような内容になっているということで、ご紹介させていただきました。

2. 交流の内容

(2) 事業提携

① 東京都 杉並区

【事業内容】

◎ 杉並区の中学生が小笠原を訪問し、体験・交流事業を実施

- ・毎年3月、約20名の中学生が小笠原村に来島
- ・海や山などの自然体験、また南洋踊り、フラダンスなどの伝統文化の体験等を通じて、地元の中学生や村民と交流を深める



では、残りのお時間はコメントしてからお答えいただきます。まずは4市町の方々のご報告、誠に勉強になりました。ありがとうございました。

最初の稚内市の三谷様のご報告では最後に類型がありましたけれども、最後のこじつけ型というのが何か私自身はすごく印象に残っております。ただ、こじつけと言っても、要はストーリーをつくるというところが、ボーダーツーリズム商品を検討する際にもあるからです。最初は悪く言えばこじつけかもしれないと思われても、それが21世紀型の交流になりうるのではないかというお話は私自身には非常に参考になりました。

隠岐の島町の吉田様のご報告に関しましては、文化交流、すなわち相撲を通じたスポーツ交流をどのように進められていたかについて、議会との議論もありながらもさらに進めていかれたお話を伺って、他の自治体の皆様も同様のご経験をされているのかという感想を持ちました。

対馬市の阿比留様のご報告に関しましては、非常に多くの自治体と行政交流が非常に長く続いている中、特に韓国影島区とは長年にわたって交流を継続していることを非常に短時間でまとめていただいて、改めて感謝申し上げたいと思います。

それから、竹富町の通事様のご報告からは、竹富町と斜里町及び対馬市との交流に関して、対馬市とはヤマネコを通じた交流で、斜里町とは町の位置という経緯から非常に長く交流が続いており、産業交流も行われている点に関して学ばせていただきました。

と言いますのも交流というのは文化・スポーツ交流と、そこからそれを何とか経済交流に結び付けていく動きというのはやはりどの自治体でもおそらく課題となると思われるからです。実際に文化交流ばかりやっていて、それが一体役に立つのかという声がある一方、経済交流をするためにはある程度信頼関係を保つためにも文化あるいはスポーツ交流を進めないといけないのではないかという考えから、これらの交流は両輪ではないかなと渡司指針は考えていましたが、そういったところでも各自治体が模索されていることも学ばせていただきました。

それから、行政交流のみならず民間交流も非常に大事であるということ……行政だけで行うのではなく、それをいかに民間まで広げて、官民合わせての交流、国際交流あるいは国内交流として発展させていくかということも非常に大事ではないかのご報告を聞きまして改め



て学ばせていただきました。

ということで、それらを踏まえて関連する質問をさせていただきます。まず稚内市の三谷様にはサハリン3州との交流を時間の関係であまりお話いただけませんでしたでしたが、最近航路の問題により、新聞を見ている限りでは停滞していると考える一方で、いろいろなことをやられているのではないかと思います。そこでサハリン3州との交流の現状についてご参考までにもう少しお話を伺わせていただけないでしょうか。

(三谷) はい、ありがとうございます。報告では割愛した部分になるのですが、やはり稚内とサハリンとの間で大事な航路の問題ということで、ご存じの方もいらっしゃるし、今回ツアーに参加されている方のお話を聞いても、過去に乗船された方もいらっしゃるかと思います。かつての運航会社……ハートランドフェリー社になりますけれども、経営上の問題で撤退ということになってから、1年後、2年後にどうなるかという部分についての目途がなかなか立ち辛い航路になっております。

やはり理想としては、民間によってどうやって収支を取っていくか、あるいは採算を取っていくかということが一番原則になるかと思います。旅客も大事ですけれども、貨物の需要も大事だということで言えば、サハリンと稚内の関係は、先ほど近距離の歴史型という形ではありましたが、これはおそらく対馬市と韓国の関係に近いと思います。いろいろと具体的なビジネスをやっている方とかそういったつながりが大きいです。

ですから、自治体ベースというよりも民間同士のビジネス上のつながりを契機として航路の安定運航につなげていきたいと思っております。ただ、相手がロシア連邦ということですから、なかなか一朝一夕にいかないことに加えて、どうしても1月後になれば、また状況が変わっている、あるいは州政府、首長等のチェンジで言っていたことが180度ひっくり返るような事例があって、なかなか稚内市単独ということでは難しいと思います。

せっかくの機会ですから、関係省庁、そして都道府県、そういったもののお力、そして古川先生、岩下先生がおられますけれども、そういった学識の方の知恵をお借りして、この航路の問題が稚内市だけではなくて、いかに国益上の観点から位置付けられるものかということについて議論をして認識を深めていただければと思っております。現状の認識としては、そのように考えております。

(古川) はい、ありがとうございます。では続きまして隠岐の島町の吉田様には、文化交流がずっと成功している中で、経済交流の展望もあると最後に言われていましたけれどもそうした面と、今は行政主導になっていますが、それをいかに民間交流に結び付けていくかということも課題になると思いますが、中長期的な展望として吉田様自身、どのようにお考えかをお聞かせいただけないでしょうか。よろしくお祈りします。



(吉田) まず、経済交流について、我が町は小さい町ですので、なかなか難しい問題ではございますが、もともとの交流のきっかけとなったのが、中国地方の経済同友会という大きな広島も岡山も含んだ組織からの話だったわけですので、できれば島根県または中国地方の大きな規模で考えたらどうだろうかということで、その経済同友会の方から少しずつそういう話が進みつつあります。まだまだ途上ですが、経済交流というところの感じですか。

そして、今後どうなるか分かりませんが、例えば相撲で言うと、鳥取城北高校ではモンゴルの力士がたくさん来て、育っています。実は我が島の隠岐水産高校も相撲部がいわゆる盛んで強く、その出身が大相撲の隠岐の海関で、皆さん知っているかもしれませんが、彼も隠岐水産高校の出身でございます。

もしかしてですが、ポーランドの力士や高校生を隠岐水産高校に招いて相撲部に入れたらどうかという話もあります。夢みたいな話ですが、意外とできるのではないかとということも今出てきてまして、もしかしたら教育の面からもそういう交流ができるのではないかと考えています。

(古川) ありがとうございます。では、続きまして、対馬市の阿比留様には行政交流セミナーを何年も続けてこられて、交換勤務に関しては最初の年にご経験されたということですが、そういう海外との自治体との交流で、特に役に立ったといたしますか、非常に印象に残っていることといたしますか、交流のご経験を通じて改めて対馬市に戻られてから何か非常に有益あるいは参考になったことがもしあるようでしたら、それについてお聞かせいただきたいのですが、いかがでしょうか。

(阿比留) お話の中でも何回も紹介させていただきましたが、江戸時代の儒学者の雨森芳洲という方が、交流とはという形で述べてある中で、まずお互いを知ることが一番、それから、誠のこともあって、心をもって相手を信用して付き合うことが長続きの秘訣だと言っておられますけれども、今においてもそれが一番分かるのではないかと思います。

行政交流で毎年、隣とはいえ、外国に15名ほどの職員が行って、実際にその町に行き、生活を見、食べ物を食べ、観光をすることによって相手を知ることになり、その知ったことでまた相手を信用できる、相手との信頼関係が構築されて、お互いに交流はどうすべきかが話し合われるということですから、私は決して時代がさかのぼってもその考え方は古くはなっていないと思います。もう1点、上対馬の「あをしお」という船をご紹介させていただきましたが、JRのビートルよりも2年も前に航路を開設しておりますので、まずそういう何かきっかけとなることをやるのも1つの起爆剤であると思います。

(古川) ありがとうございます。では、竹富町の通事様にぜひ教えていただきたいのは、物産展を斜里町の方でやられたというお話で、斜里町の方々に非常に好評だったということ



だったのですが、特にどういうものに非常に斜里町の方々が関心を示しておられたのでしょうか。

(通事) ありがとうございます。竹富町の場合、やはり熱帯果樹を中心としたパイナップル、それからマンゴーが非常に好評で、本町の主要な産業は、ほかの農産物、それから一応海産物等もあって、それもまとめて持って行きます。また、各島々の特産品もありまして、それらを持っては行くのですけれども、真っ先になくなったのはマンゴーで、その次に時を置かずなくなるのがパイナップルというように、毎回毎回担当者が、当然季節物ですので、多くの量を持って行くというのもなかなか難しいということもあるのですけれども、ほぼ日程の前半4分の1ぐらいで完売してしまうぐらいの勢いで売れていると聞いております。

また逆に、竹富町側にも何年かには一遍お越しいただくこともあるのですけれども、その時にはやはり北方の北海道の特産品は竹富町の皆さんにとっても非常に魅力的なものになっていまして、こちらも時を置かずすぐ売れ切れてしまうという形で、それぞれの物産の交流はそういうところからも盛んだと思っています。

(古川) そうなってきましたと、どんどん北海道に販路を拡大するという話になると思いますが、その点はいかがですか。

(通事) 以前、商工と観光の部門で、北海道の札幌にいくつか物産を持っていったことがございます。ただ、竹富町もしくは竹富町の島々の認知度がまだあまり高くないということもありまして、食べていただいたりすると、満足していただいてご購入に結び付くことが多いのですけれども、まだ力が及ばないところがあって、竹富町や斜里町の中ではお互いの町は非常に認知度も高く、親密感を持ってお付き合いさせていただいていて実際にやっているのですが、物産そのものの流通量を太くしていく、あるいは独自に確保していくところまではまだなかなかできていないのが現状だと思います。

(古川) ありがとうございます。ご質問したいことがあれば受け付けますが、いかがでしょうか。

(野口) 五島市でございますが、先ほどスライドの中にあっただけですが、五島市は国内とも海外ともまだ一切お付き合いをしたことがないというところがございます。たぶん礼文の町長さんのところもまだそういう状況かと思えます。こうやって隣同士座ったのは、お見合いさせられたのではないかという気もしているのですが、いろいろなところでたくさんの方々と姉妹提携などで交流をされているということで、実は市議会の方でもぼちぼち結婚したらどうかという質問もいただくのです。そこで、それぞれの方に質問ですが、相手を選ぶ



に当たって、こういうところを重視した方がいいよ、こういうところはちょっと気を付けたらいいよというアドバイスをぜひ1個ずついただければと思います。

(古川) 他の質問に関しましては、後ほどの全体討論の際にまたあらためて時間を設けますので、その際にご質問いただけたらと思います。では、今の野口市長のご質問に対するご回答をよろしく願いいたします。

(通事) では竹富町の方から。本町は国内でも一番遠いところ同士で提携をしております。しかも、昭和の古い時代に、その当時、お互いに非常に大きな熱量を持ってお付き合いを始めたと伺っています。それも今も続けているその秘訣になろうかと思うのですが、本町に定期的にお互い行ったり来たりしている中で、全力でお互い歓待をしております。

1回来られると、3日間から4日間ほど昼夜問わず歓待をしていくのですが、距離はあるとは言え、お互いの環境を理解した上で、それぞれを大事に思っている……単純な言い方にはなりませんけれども、そういうことが最初に来るのではないかと感じております。

(三谷) 野口市長に対して私から何か言うのは僭越かと思いますがけれども、私も類型を通じてですが、一概に友好都市といっても、いろいろな強弱とか経緯がすごくあると思います。そして、私も今回他の自治体の皆様の事例を聞いて、皆さん非常にうまくいっていると思いました。その中でも例えば竹富町のように自然環境や自然保護といったことで共通する分野があるはずなので、そういった部分でお互いによく進めていく、そして隠岐の島町とポーランドとの交流がありますけれども、そこについてはおそらくきっかけ型です。相撲ということで始まって、次はどうするかということについて議会から言っているというタイプのいろいろなあり方があると思います。

ですから、友好都市ということであれば、同じような共通点を見いだせるような自治体との交流の中で進めていくのが一番オーソドックスなあり方だという気がしております。

(吉田) ポーランドとの場合は、相手からの強烈なラブコールだったので、我々が選ぶということではなかったもので、すみません。結果的に大変ありがたいと思っています。我が町は、国内交流はたくさんの町と交流しておりますが、唯一友好都市を結んでいるのは大阪の豊中市と結んでおります。

それは、我々にも思惑がありまして、うちの空港が大阪伊丹空港に飛んでいますが、その所在地が豊中市であるわけです。たくさんのお客様が隠岐の島に来てほしいという思いから、豊中市さん、仲良くしましょうよということでお話をしました。

もう1つ、同じような思惑で東京の大田区とも仲良くさせてもらっています。それは、羽田空港を持っているからです。そういう下心もありながら、でも実は都会の人たちには隠岐

の島ってすごい、ないものが実は隠岐にはあったと喜んでいただいております。どういうふうに相手を選ぶかというのはなかなか難しいのですが、我々の場合はそんな感じです。

(阿比留) 最後にしょうもないことを言いますが、対馬市はもともと6つの町が合併して対馬市になっております。行政交流を除いて、姉妹縁組や姉妹島という部分に関しては、6つの町が別々のところでやっていて、対馬市に合併したからそのまま引き継ぐ形が多いので、非常に恋多き島という形になっておりますが、実態としてはそういう形です。

海外の場合は、上海市崇明県の場合は、先ほどの三谷さんの分析でいくと戦略型という形で考えていたようすけれども、それ以外の地域に関しては過去のつながりから、何らかの共通項があったという形の中でお互いひかれ合ったという形だと思いますので、一方的にとりいう隠岐の島町のようなケースはまれだと思いますけれども、何らかの共通の話題があったというか、共通の趣味を持っていたという形の中のお付き合いだったと思います。

(古川) ありがとうございます。まだまだご質問したいことがあると思いますし、実は与那国町の小嶺様には花蓮市と与那国町の交流の動きについても実は話題を提供していただく予定だったのですが、私の不手際で時間がもう押しておりますので、話題の提供に関しましては第2部あるいは全体討論のときにまたお願いします。

それぞれの交流がどのような経緯でどのように進んでいるか。本セッションでは類型化まで出てきまして、私自身も改めてもっと勉強しなければいけないと思われましたが、姉妹都市あるいは友好都市を提携されている五島市の野口市長と礼文町の小野町長におかれましては何か参考になれば幸いです。では、最後にご報告されました報告者の皆様に改めて拍手をもって終わります。どうもありがとうございました。(拍手)





セッション2 境界自治体の社会教育連携

(石田聖) それでは第2セッションということで、ここからは教育、境界自治体における地域連携教育に関する話題提供となります。

ここからは司会とコメンテーターが代わりまして、私は長崎県立大学地域創造学部で講師をしております石田と申します。私は今回、JIBSNのメンバーとしてはまだ新米です。その私がなぜこの教育のセッションを担当することになったかという経緯につきまして簡単にご説明しますと、実は私どもの長崎県立大学は、皆さんインターネット等で調べてもらったら良いのですが、「しまなび」……「しま」は平仮名で検索していただくと良いのですが、簡単に言いますと長崎の7つの離島に、毎年学生を600人1週間強制的に送り込んで合宿をさせて、地域課題の解決策、地域の魅力の発信、伝統文化や歴史を学んでもらうという教育プログラムを行っています。

離島に派遣する際には、学生は「そんなコンビニとかWi-Fiがないところに行けるのか」、「島流し」と不満を漏らしたり、あるいは、学生ですから「夏休みのスケジュールが削られる」といろいろなことを言うのですが、いざ実際に行ってみると、やはり島の温かさ、自然の雄大さ、食事のおいしさ、地域の人々のつながりの強さといった地域の力を改めて実感して帰ってきます。私たちが大学の講義でやっぱり人口減少や空き家の問題などいろいろ言うのですけれども、帰ってくると学生たちが何となく変わってくるのです。それがもっとリアリティーを持って伝わってきます。やはり教育の持つ力は非常に大きいと思います。

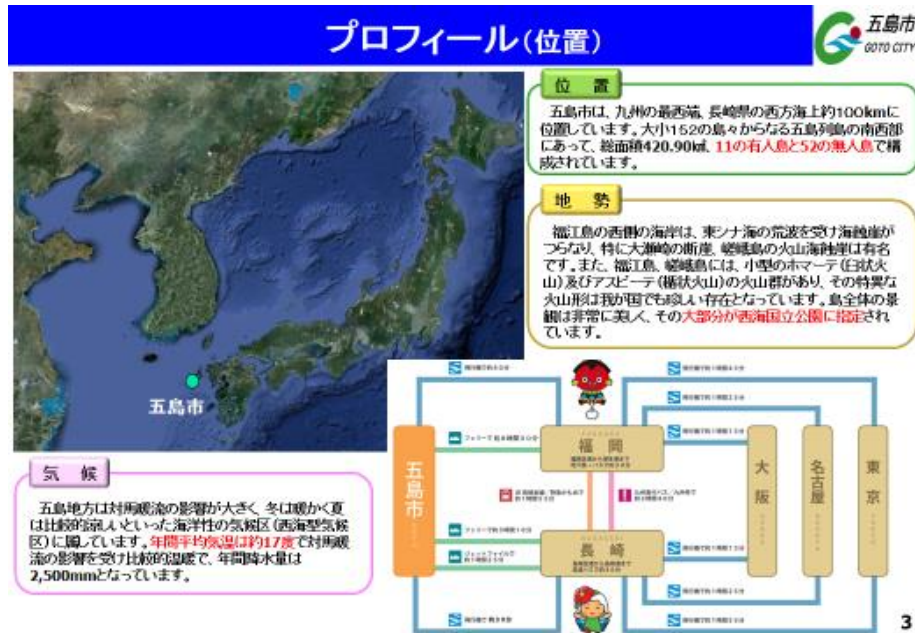
第1セッションの報告の中でも、教育文化、国際交流とありましたけど、これからそれを担っていく担い手をどうやってつくっていくかというところで、やはり教育は非常に大きな側面があると思います。

私たちの大学もそうですが、五島市や対馬市に学生を含め私たち教員も大変お世話になっているところですが、それに加えて今回は北海道から沖縄まで全国各地からいろいろな事例報告も今回はありますので、境界自治体における地域連携教育の在り方ということで、ここからは、五島市と与那国町と根室市という3つの自治体から、各取り組みを紹介していただきます。それでは最初に五島市の久保実様からよろしく願いいたします。

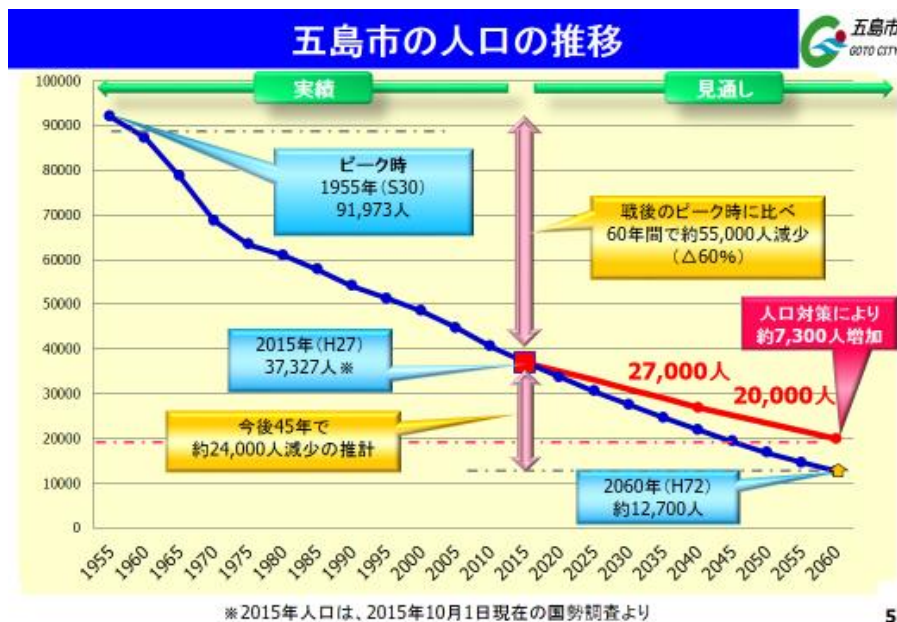
(久保実) 皆さん、こんにちは。五島市の総務企画部長をしております久保と申します。昨年、実は私はJIBSNのこういう報告者からは引退しまして、後進を育てるということで別の方にデビューしていただいたのですが、なぜか今年4月にさらに別の仕事をやらせてもらおうということで異動しまして、私は今回再登板です。よろしく申し上げます。

それではまず、もうJIBSNのメンバーの方については五島市のことについてはもうご存知だと思いますし、本日は五島市民の方もいろいろたくさん来ていらっしゃるし、概要は市長のご挨拶にもありましたので飛ばします。

五島市の位置関係です。11の有人島と52の無人島から構成されているところです。人口の話も出ました。1955（昭和30）年、9万2,000人弱の人口が、2015（平成27）年には3万7,327人ですので、60年間で60%減少です。



今、平成27年に人口ビジョンをつくって、これは青い線は国の人口問題研究所の予測値ですけれども、2060年には1万2,700人になるだろうという予測が出ています。これを我々としてはいろいろな人口対策によって何とか2万人にとどめようというところでいろいろな政策を打ち出している状況です。



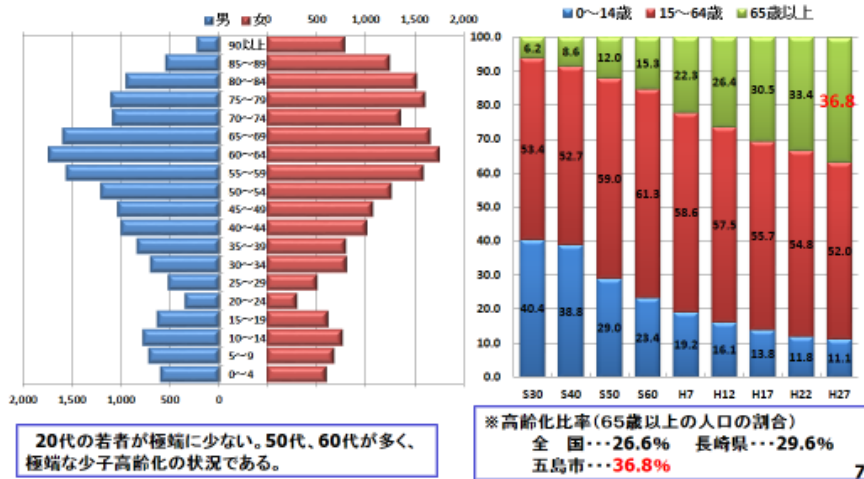
左を見ていただきますと、これは左側が男性、右側が女性ですけど、20歳から24歳、こん



なに少ないです。これが10年たったらこう、伸びていくわけですから、今、50歳、60歳が多いですけど、当然、人口がそのまま上がっていくと減っていくというのが見て取れると思います。

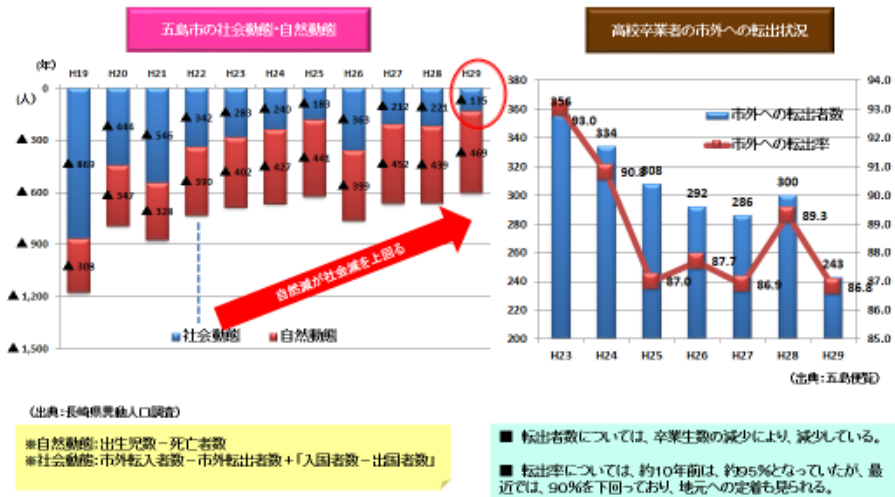
5歳毎階級別人口、年齢3区分人口推移

5歳毎階級別人口・年齢3区分別人口（平成27年国勢調査）



年齢3区分で見ますと、65歳以上の高齢化が36.8%ということで、これは全国の26.6%からすると20年ぐらい先を今行っているのではないかとこのところでは。そういう意味では超高齢化の先進地というのが今の五島市の実態ではないかと思えます。

人口減少の要因



市長のご挨拶にありましたけれども、人がどんどん都市部に出ていくという社会減で人口がどんどん減ってきました。ところが2009（平成21）年ぐらいからは自然減で人が減ってい

ます。要するに、生まれてくる子供の数よりも亡くなっていく老人の数が多くて人口が減っています。

この社会減も、実は2018（平成29）年は135しか減っていません。私たちは、「しか」減ってないと言っているのですけれども、それまではもう200人、300人、400人と減っていたのが135人しか減ってないということです。これは移住・定住効果で今こういう状況になっております。今年もこういう状況になると予測しております。

実は、11の有人島があるのですが、黒島は現在お1人、6月ぐらいまではお2人で、100歳のおばあちゃんと70代の面倒を見る娘さんのお2人でした。そのおばあちゃんが長崎に引越されましたので、現在は1人になっています。姫島、葛島は、1965（昭和40）年、1973（昭和48）年ぐらいに無人島になっています。他にもいずれ無人島になっていくだろうとは思いますが、こういう状況です。



教育に移る前に、今、五島市が取り組んでいるプロジェクトを少しお話しさせていただきます。「再生可能エネルギーのしまづくり」ということで、海に浮かんだ浮体式の洋上風力発電……2016（平成28）年から2メガワット発電する風力発電の商業運転をしています。

昨日の新聞に、福島沖に設置した浮体式洋上風力発電施設3基のうち、発電量7メガワットの世界最大級の風車1基を採算が見込めないとして撤去するという報道が出ています。そうすると、もう洋上風力で商業運転しているのはここだけです。今後もっと注目を浴びてくるのではないかと思います。これを2021年の夏ごろには10基ぐらいまで増やしていこうと今すでに製造に取り掛かっているところです。

ここは潮流発電といいまして、波の流れを使って発電をするということを今予定しております。来年度あたりに。こういうものにするかは、まだ方式については今検討中ですが、潮流を使って発電をしようというところです。

再生可能エネルギーのしまづくり

再生可能エネルギー関連の地元への効果

- 事業者 (従業員数)
 - ① 戸田建設(株)福工事務所 (4名)
 - ② 五島フローティングウインドパワー (合同) (1名)
 - ③ (有) イーウインド (29名)
 - ④ (一社) 海洋エネルギー産業共生センター五島事務所 (6名)
 - ⑤ 阿久ホーム (5名)
 - ⑥ アンタリ機電 (8名)

10基程度の商業運転を目指し、漁業調整等に入っている。
2メガワット…8基 5メガワット…1基13

続いて今年の7月4日に世界遺産に登録された長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産ですけれども、何が世界遺産になったかというところ、1614年に禁教令があって1865年に信徒発見までの250年間潜伏して信仰を守ったということが宗教に関する独特の文化的伝統を物語る顕著な物証であるというところから世界遺産になっています。

12の構成資産になっておりますけれども、そのうちの奈留島と、明日ツアーに参加される方は午前中に久賀島に行きますが、久賀島の集落、この2つが12の構成資産のうちの資産、五島市の構成資産です。

長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産 ①

世界遺産としての価値 12構成資産 (県内11、天草市1)

長崎地方の潜伏キリシタンが、禁教期に密かに信仰を続ける中で育んだ、宗教に関する独特の文化的伝統を物語る顕著な物証。

1614年 1637年 1797年 1865年 1873年

原城跡
宣教師不在の契機となった重要な場所

鳥居跡の礎石

中江ノ島(平戸の聖地と集落)
1622-1624年に信徒が隠れ住んだ場所。聖地(集落地)として信仰の対象とされた。

【禁教期】

潜伏キリシタン集落
固有の信仰形態が育まれたことを物語る

<16世紀にキリスト教が伝わり、密かに潜伏した集落>

平戸の聖地と集落(春日集落と安濃島)
平戸の聖地と集落(中江ノ島)
天草の崎津集落
外海の出津集落(長崎市)
外海の大野集落(長崎市)

<移住により形成された潜伏集落>

野崎島の集落(小豆島町)
頭ヶ島の集落(前上五島町)
奈留島の江上集落(五島市)
久賀島の集落(五島市)
黒島の集落(佐世保市)

密かに祈んだ場所

信仰の心臓により信仰を継承した

① 出津集落に伝わる聖堂
② 崎津集落に伝わる木造軒漆の信心具
③ 黒島の寺に伝ったマリア像

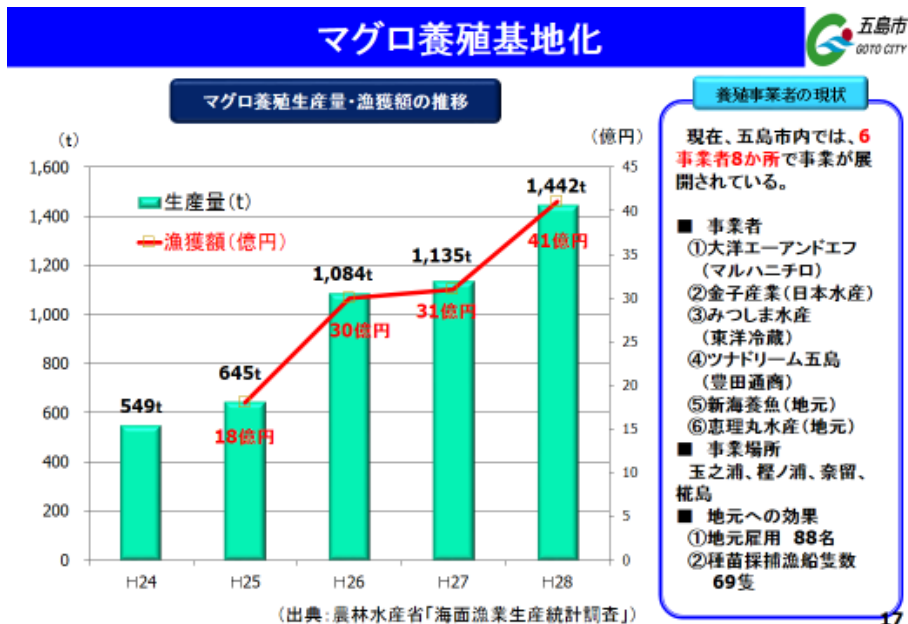
大浦天主堂
新たな信仰の拠点を築き、禁教となった重要な場所

集落に建てられた教会堂
固有の信仰形態の特色を継承

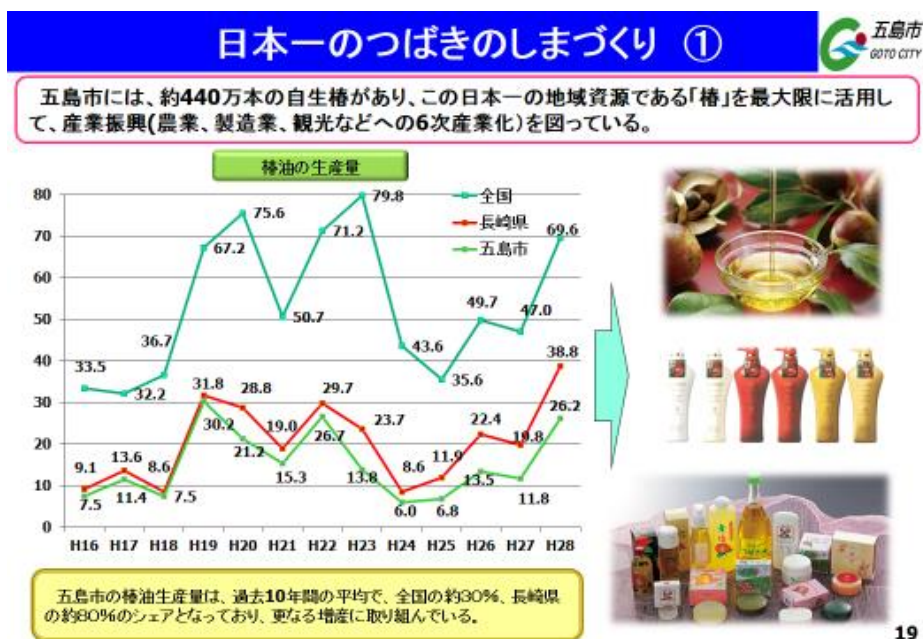
潜伏キリシタンが育んだ文化的伝統

もう1個、マグロの養殖ですけれども、もうどんどん増加しております、今、出荷が41

億円になっております。マグロの養殖は、長崎県は五島市が日本で第一位です。そのうちの3分の1強ぐらいが五島で生産されている状況です。



ツバキです。これは椿油の生産量。一番上は全国の生産量、赤が長崎県で、緑が五島市ということで、ほぼ半分ぐらいは長崎県が生産し、残りの半分は東京都の伊豆大島です。長崎県のほとんどは五島で生産されている状況で、資生堂のTUBAKIのシャンプーには五島産の椿油が使われております。



2020年には国際ツバキ会議ということで、あと1年と半年ですけれども、2020年3月頃に

国際ツバキ会議を五島市で開催する予定にしております。

日本一のつばきのしまづくり ②

国際ツバキ会議及び全国椿サミット

- 国際ツバキ会議は、世界の椿愛好家が参加して、研究発表や情報交換を行うとともに、市民と交流し、国際交流を深めることを目的に2年に一度開催されている。
- **2020年**に世界的銘花「玉之浦」発祥地である五島市で開催されるのは、5か所目となる。
(京都市、舞鶴市、宮崎市、久留米市)
- 全国椿サミットは、ツバキ・サザンカを市町村の花木に指定している地方自治体が一堂に集い、相互の情報交換と交流を通じて地域活性化に資することを目的に毎年開催されている。















2020年五島市開催!

国際ツバキ会議 全国椿サミット



21

概要はこういうところでして、続いて、教育というテーマをいただいておりますので、今、五島市で取り組んでいる教育コンテンツはどういうのがあるかご紹介させていただきたいと思います。

教育コンテンツによる取り組み

国境離島振興研究機構 (日本語学校事業構想)

●国境離島(五島)での定住人口増加対策から始まるベトナムとの経済交流

提案1 : 国境離島(五島)で廃校を利用したベトナム留学生向けの日本語学校の設立を提案します!

提案2 : ベトナムからの留学生確保は、長崎県立大学法人与ダナン人民政府の連携協定を活用します。

提案3 : 留学生が日本語学校在学中は、アルバイトの労働力として地元の農業・漁業等を支えます。

提案4 : 日本語学校卒業後の進路として、長崎県立大学/大学院で進学を受け入れます。

提案5 : 留学生が本学卒業後は、ベトナムでの県内企業・日本国内企業の現地法人スタッフ等として活躍します。

Step1 日本語学校の分校設置
五島の廃校を利用した国内日本語学校の分校設置(宿舍併設)。

【市・県から必要な協力】
①自治体(五島市・県)からの廃校提供
②国境離島新法 地方創生交付金を活用した廃校の改築費用支援

Step3 在学中のアルバイト
地元で不足している農業・漁業等の労働力として貢献。
(=留学生の生活費支援対策の一環)
参考: 留学生は、週28時間までの労働可。

【市・県から必要な協力】
①アルバイト先の情報提供: 厳選し

Step5 留学生の卒業後の活躍
本学卒業後は、県内企業・日本国内企業として活躍。
ベトナム現地法人スタッフ等として活躍。
⇒ベトナム進出を目指す県内企業への人材供給。ビジネスの進化へ繋げます。

【県から必要な協力】
①県内企業の求人情報提供

Step2 良質な留学生確保対策
長崎県立大学法人与ベトナム・ダナン人民政府の連携協定を活用(平成29年9月締結予定)。まじめて親目的な国、ベトナムとのパイプを活用して大学が日本語学校留学生の確保協力。

【市・県からの必要な協力】
①大学に対して募集活動経費の支援
②入学金・授業料に対して自治体からの独自奨学金(入学生の負担ゼロ)

Step4 ベトナム留学生の進学先
長崎県立大学及び同大学大学院に日本語学校からの進学を受け入れます。

【市・県からの必要な協力】
①独自奨学金による生活費支援(留学生に対して経済的支援)

県・市・留学生・大学「誰にとっても」WIN-WIN

23

これは長崎県立大学、先ほどから司会をしていただいております石田先生の所属する県立大学の方からご提案をいただいたのですけれども、国境離島振興機構というのを県立大学で作りまして、廃校を利用したベトナム留学生向けの日本語学校の設立をご提案いただきま

した。

実は我々も日本語学校については考えていたのですけれども、ちょうどタイミングよく県立大学の方からこういう提案がありました。いろいろな面で協力していきましょうということで提案されまして、実は2020年4月に五島市に日本語学校を開設するというので、もうすでに準備に入っております。

学校法人も公募しまして、学校法人も今決定しました。今、長崎県の私学審議会の方で審議される状況までいっております。100名程度で、対象はベトナム人です。最終的には日本語能力試験のN1を取得していただくということで、例えば技能研修生や専門学校への入学ではなくて、長崎県立大学と大学院をはじめ、日本の大学への進学を目指した日本語学校、レベルの高い日本語学校を目指したいと考えております。そのためには優秀な学生をどう確保するかというところが必要ですが、ベトナムの中でも非常に優秀な学校がすでにあります。そこの交流を、県立大学を含めてもうすでに行っております、優秀な学生を選抜して送ってきてもらうというところで今考えております。

教育コンテンツによる取り組み



五島市日本語学校の概要

◆開校予定	2020年4月
◆コース	日本語科コース(2年間)
◆設置公募自治体	五島市
◆設置者	学校法人(公募)
◆収容定員	80~100名程度(各学年40~50名程度)
◆対象者	ベトナム人
◆入学資格	日本語能力試験N4以上 (基本的な日本語が理解できる)
◆卒業資格	日本語能力試験N1取得 (幅広い場面で使われる日本語が理解できる)
◆育てる学生像	長崎県立大学・大学院をはじめ、日本の大学・大学院へ進学できる能力を有する学生を育成する。

25

もう1つが離島教育プログラムといいまして、今、交流促進事業ということで取り掛かっているのですけれども、皆さんご存じの通り、N高校という通信性の高校で、学生が今7,000人ぐらいで、角川ドワンゴの方でつくっていて、注目されている高校があります。あと1~2年ぐらいしたらN中学というのをやるそうですけれども、このN高校のフィールドとして五島を使っていただくということで、ワークショップ型とかスタディーツアー、3日間から5日間程度のスタディーツアー、1週間から2週間以上滞在型インターンシップ型というようなプログラムを五島市で用意して、それらを体験してもらって、それを単位にして高校教育を五島でやっていただくというプログラムとして、2018(平成29)年度につくって、2019(平成30)年度にそれをトライアルでいろいろ試して実施し、それをアップデートしていくとい

うことに今取り組んでいるところです。

離島教育プログラムによる交流促進事業

五島市 GOTO CITY

アクティブラーニングの一環として、全国の様々な中高生に五島ならではの「ほんもの職業体験」を提供し、職業の楽しさ・厳しさを体感してもらおうとともに、滞在期間中に出会う人とのふれあいにより、将来の職業選択の一つとなり、交流人口の拡大及び移住促進を図る。

中高生、大学生が五島でのスタディツアーやインターンシップを経て五島への愛着の醸成や、就業への動機形成、移住定住につながるプログラムを制作 → **離島教育プログラム**

プログラムの種類

- ①ワークショップ型
- ②スタディツアー型(3日間~5日間滞在型)
- ③インターンシップ型
(1週間滞在型, 2週間以上滞在型)

効果

【島外の中高生・大学生】

- ①職業体験による社会勉強
- ②人間関係・コミュニケーション能力の向上
- ③自主性・自立心の向上
- ④マナー・モラル・心の成長

【五島市】

- ①幅広く五島ならではの職業を周知→将来の雇用へ
- ②体験料、民泊料など経済的効果
- ③離島のモデルとなり、幅広い学校からの視察や受入
- ④マナー・モラル・心の成長
- ⑤地元中職生と島外の中職生及び大学生との交流

離島教育に積極的な学校と協定締結

スケジュール・予算

平成29年度	予算額
H29.10~ 学校関係者、有識者等で調査研究	委託料 6,291,000円
H30.1~ 中高生の受入実証事業、検証・改善	
平成30年度(予定)	
H30.4~ トライアルの実施	委託料 8,080,000円
※プログラムの検証	

27

続いては、もう1つの教育コンテンツの取り組みとして、国際バカロレアの話はすごく将来の話なので、まだまだいつになるかという話ではないですけれども、国のまち・ひと・しごと創生総合戦略の中でも、2020年度までに国際バカロレア認定校を200校以上に増やすという国の方針が示されております。

教育コンテンツによる取り組み ③

五島市 GOTO CITY

国際バカロレアの検討

国際バカロレアとは

- ① 国際バカロレア(本部 スイス ジュネーブ)が提供する国際的な教育プログラム
- ② 国際的に通用する大学入学資格が取得可能
- ③ プライマリー・イヤーズ・プログラム(PYP): 3歳から12歳が対象
・世界で1,506校、日本で22校
- ④ ミドル・イヤーズ・プログラム(MYP): 11歳から16歳が対象
・世界で1,396校、日本で13校
- ⑤ ディプロマ・プログラム(DP): 16歳から19歳が対象
・世界で3,189校、日本で31校

国のまち・ひと・しごと創生総合戦略(2016改訂版)において、「2020年までに国際バカロレア認定校を200校以上に増やす」と記載されている。

五島市での取り組み

プロジェクトG

世界で通用する人材を育てることを目的に「小学校からの英語習得事業」を推進している。
平成27年度から小学校1年生からの英語教育を市内の6校の小学校で開始。平成29年度から、市内全小学校で推進。

E-アイランドスクール

平成30年度から始まった長崎県立奈留高校の離島留学制度であり、英語教育に重点化したカリキュラムとなっている。二次離島の小中高一貫教育を実施している。

国際バカロレア認定の効果

日本のみならず、海外からの学生が獲得でき、島の発展に大きく寄与する

中学生イングリッシュキャンプ事業 29

その中で五島市の取り組みとしてプロジェクトGというのがありまして、これは国の学習指導要領でいきますと、2020年度から小学校3年生4年生に英語の授業をやるということ



になっておりますが、五島市ではすでに平成27年度から市内の6小学校で1年生から英語教育を今始めています。昨年度からは市内の全小学校で1年生から英語教育をやるとうとうと今進めております。これをプロジェクトG、グローバルの「G」なのか五島の「G」なのかは、今日は教育委員会の先生がいないのでわかりません。どっちも兼ねているのだらうと思うのですが。

これは後ほどまた詳しくもう1回紹介しますが、今年から離島留学ということで、長崎県立の奈留高校というところでE-アイランドスクールというのが始まっております。これは英語教育に重点化したカリキュラムで、小中高一貫教育ですけれども、そこでこういう取り組みをやっております。

今のところは、最終的にはこの辺がバカロレア認定校にならないかという程度です。そういうところでこういうのを掲げて進めていこうかというところなんです。

長崎大学との連携



2010年6月24日 長崎大学と五島市で包括連携協定を締結

- ① 離島地域の振興やまちづくりに関すること
- ② 離島地域の活力を育む人材の育成に関すること
- ③ 離島地域における子育てや教育に関すること
- ④ 離島地域の医療や生活の向上に関すること

H30年度の主な取り組み

事業名	事業概要
イングリッシュキャンプ	中学生対象の2泊3日の英語漬のキャンプ、外国人留学生とのコミュニケーション
プロジェクトG	市内小中学校で遠隔機器を導入し、北海道、佐渡の学校と英語での交流を行っている。大学の英語担当の教授、ICT担当の准教授の支援
地域教育研究会離島実習	離島教育を体験することで、離島における教育のあり方、子どもたち、地域の様子を知り、地域教育や複式学級の授業についての理解を深める
寄附講座「離島・へき地医療学講座」	長崎大学大学院歯薬総合研究科に長崎県と五島市による寄附講座「離島・へき地医療学講座」を開講し、離島での活動拠点として、五島中央病院内に「離島医療研究所」を設置し、地域医療教育と離島医療に関する調査研究を行う
歯学部と五島市の歯科保健に係る連携・協力	①五島の歯科保健の充実に図るため、離島歯科保健研究所を設置 ②無歯科医小離島の歯科保健医療充実へ向けての対応(歯科医師の派遣)
アントレプレナー養成プラン	学生と五島市内の事業者が対話を重ねることで企業パートナーの新たなビジネス展開の可能性を考え、起業の実際を2年かけて提供

31

連携という話になりますと、長崎県も国公立大学としまして長崎大学と長崎県立大学がございます。まず長崎大学との連携ということでは、2010年度6月に五島市と長崎大学で包括連携協定を締結しております。離島の振興とか町づくり、人材育成、子育て、教育、医療、生活の向上。この辺に関して連携してやっていきたいと思いますというところなんです。

平成30年度の取り組みとしましては、イングリッシュキャンプ。これは五島市の中学生を対象に2泊3日の英語漬のキャンプをやります。そこに外国人留学生に来ていただいて指導してもらうということです。

また先ほどお話ししましたプロジェクトGについては、大学の英語担当の教授やICT担当の准教授の支援をいただいて、北海道とか佐渡の学校と英語での交流を市内の小中学校がやるというようなこともやっております。

そのほかに、医学の方で、長崎県と五島市で寄付を出して、離島・へき地医療学講座とい

うのを開校して、五島中央病院という総合病院がありますけれども、そこに離島医療研究所というのを設置して、地域医療教育と離島医療に関する調査研究を行うということで、この辺で長崎大学と連携をしています。

先ほど11の有人島がございます話をしましたけれども、当然、有人島の中には、歯医者さんがいません。ですから、昔はむし歯になっただけでいぶん面倒、歯医者さんに行くのが大変だから抜いてしまうと。それで歯がない人たちもいたという話を聞くぐらい歯医者さんに非常に困っていた島がいくつもありますので、そういう無歯科医の小離島について歯科医師を派遣していただく事業をしております。

県立大学との連携ということで、これは先ほどお話ししましたようなイングリッシュキャンプでのお手伝いをしてもらっています。2014年2月に包括連携協定をしております。先ほど司会とコメンテーターの石田先生からお話が合ったように、しまなびということで、これは先生が先ほどお話しされたので私から話す内容はあまりありません。今日は石田先生と寺床幸雄先生がいらっしゃいますが、現にこのしまなびの指導教員として現場に入られておりますので、後ほどまたコメントの中でお話をいただければと思っております。

長崎県立大学との連携



2014年2月6日 長崎県立大学と五島市で包括連携協定を締結

- ① 共同研究・受託研究に関すること
- ② 地域貢献の取り組みに関すること
- ③ 人材育成及び交流に関すること

H30年度の主な取り組み

事業名	事業概要
イングリッシュキャンプ	中学生対象の2泊3日の英語演劇のキャンプ、外国人留学生とのコミュニケーション
地(知)の拠点事業 (しまなび)	<p>「しまなび」プログラムとは、長崎県の「しま」(対馬、吉岐、五島、新上五島、小値賀、宇久、的山大島)を佐世保校、シーボルト校に次ぐ第3のキャンパスとして位置づけ、学生が主体的・実践的に学ぶPBL学習法(project based learning 課題解決型学習法)を導入するとともに、「しま」での体験を通じて、グローバルな視点を持つとともに、ローカルな視点で地域課題に取り組むことができる人材の育成を目的とした教育プログラム。</p> <p>本プログラムは全学必修科目で、講義科目「長崎のしまに学ぶ」(4~8月)と演習科目「しまのフィールドワーク(4泊5日)」(8~9月)の2つの科目から構成され、「しま」の課題等に対し、学生自身が解決策や対応方法を考えることで、課題発見力、分析力、積極性、協調性などの社会人として求められる能力を涵養する。</p> <p>学生がフィールドワークの場として五島市を訪れ、地元の生活や人々の交流の中で、実践的な学習を積み重ね、成果について、発表会等を通じて地域へ提案を行う。</p>

33

五島市の特産品でかんころもちがあるのですが、学生の提案によって、かんころもちの業者がそのデザインをパッケージに採用した事例もございまして、提案だけではなくて実用化にまで結び付いていて非常に面白い取り組みです。


2017年、五島市では13グループ、約160人の学生が4泊5日で来ました。フィールドワークです。8月後半から9月にかけて来ますので、そういうふうにして、五島市にとっても非常に効果のある面白い事業だと思っております。

しま留学と今書いてあります。これは義務教育、小学校、中学校のところをしま留学と五

島市では呼んでいるのですが、二次離島の学校、児童生徒数が減少して学校存続が危ないところを中心に、久賀小中学校、奈留小中学校で取り組んでいます。明日行く久賀小中学校は、300人ぐらいの島ですけれども生徒数が15人。うち9人は留学で、全国からです。福岡、埼玉、東京、佐賀、長崎など、いろいろなところから来ていますけれども、しま留学が9人います。この子供たちがいなかったら、小中学校合わせて6人しかいない状況です。

月額9万円は、五島市が6万円を補助して、親御さんは3万円出せばいいという制度でしま留学をやっています。留学生の声、保護者の声として、このように非常にたくましくなって大変うれしく思っていますという保護者の声も出ています。


しま留学




平成28年度から、「しま留学」を創設

【創設の理由】

- ① 二次離島の学校存続(児童生徒数の減少、固定化された人間関係)
- ② 豊かな自然環境(落ち着いた生活環境、豊富な自然体験活動)
- ③ 島民の期待(学校存続により地域の活性化、Uターン者の増加、経済効果など)



五島市「しま留学」



五島市「しま留学」

学校名	生徒数	しま留学生
久賀小中学校	15	9
奈留小中学校	58	4

【留学生の声】

しま留学生として久賀に来て、いろいろなことを体験しました。鳥の名前や見分け方を教わり、「あれはヨドリだ」など分かるようになりました。また、釣り針の仕掛けを教わり、初めてイトヨリを釣り上げた時は、とてもうれしかったです。これから、勉強や部活動も頑張りたいと思います。(中学1年生 男子生徒)

【保護者の声】

夏休みになり、息子は帰くなって帰ってきました。見違えるような成長ぶりに驚き、嬉しく思っています。

ちょうど1年前、息子は釣り三昧の日々を夢見て久賀島への進学を希望しました。私は、「まずは、見学を...」と思い、ちょうど開催される「島民合同の運動会」の日に行くことにしました。そこで、小学生と中学生が一緒になって取り組む真摯な姿、無邪気に本気で楽しんでいる流石とした生徒さん達を見て感動したのです。みんな、輝いていました。今、島での暮らしぶりを話す息子は、楽しくて仕方ないといった様子です。先生方やしま親さん方の親身で丁寧な指導と愛情を受けているからでしょう。貴重な機会を与えて下さったことに、心から感謝する毎日です。

35

離島留学は先ほどのしま留学とは違います。これは県立高校の話で、先ほど対馬の方でも国際交流のところでご紹介がありましたけれども、五島市内には4つの高校がございまして、五島高校はもともとスポーツの留学のコースがありましたけれども、2018(平成30)年度から始まった五島南高校と奈留高校の離島留学は少し違っております。要するに生徒数が少なくなると存続が危うい高校をどうしようかというところで離島留学コースを導入したということです。まず五島南高校については、不登校ぎみの子供たちに全国から集まってもらって、体験学習を中心にいろいろな体験をして自分を見つめ直すところから学校生活を送ってもらいたいというところから始まったコースです。

この奈留高校はE-アイランドスクールと、先ほどお話ししたように小中高一貫教育で英語重視のカリキュラムで、現在9名の離島留学生在がいらっしやいます。奈留島のテーマとして「小さな島の大きな挑戦」というのをキャッチフレーズに小中高頑張っているところです。

離島留学 ①



平成30年度から、市内の県立高校に「離島留学」を導入
 生徒数が減少し、存続が危うい市内の2つの高校(五島南、奈留)に「離島留学」コースを導入
 五島南高校……夢トライコース 奈留高校……E-アイランドスクール

五島南 夢トライコース

夢トライコースでは、「新出会い・ふれあい・夢トライ！」をキャッチフレーズに、中学校のときに学校になじめなかったり、登校することが難しかったりした生徒のうち、「学びたい」という意欲を持ち、生活環境や学習環境を変えて、「しま」で高校生活を送りたいという生徒を受け入れている。

【特徴】

- ① 一人ひとりの生徒を大切にし、生徒の心のケアを大切にする。
- ② 農業・漁業体験、インターシップなど、体験学習を多く取り入れた教科・科目を設置。社会性や生きる力を育む。



▲稲作体験・田植え

▲お島教室



▲トライアスロン大会ボランティア

生徒数	離島留学生
81	6

37

離島留学 ②



平成30年度から、市内の県立高校に「離島留学」を導入
 生徒数が減少し、存続が危うい市内の2つの高校(五島南、奈留)に「離島留学」コースを導入
 五島南高校……夢トライコース 奈留高校……E-アイランドスクール

奈留 E-アイランドスクール

少人数・マンツーマン授業で生きた英語を学べる。英語でのパンフレット作りや通訳ガイドの練習を授業の中に取り入れ、英語力を伸ばすとともに奈留島の「自然」、「潜伏キリシタン文化」、「食文化」、「海洋再生エネルギー」など多くの魅力を発信し、島の活性化をお手伝いする。

【特徴】

- ① 小中高一貫教育
- ② 少人数教育
- ③ 英語重視のカリキュラム
- ④ 進路実現 100%
- ⑤ なるプロジェクト
奈留島の「自然」、「潜伏キリシタン文化」、「食文化」、「海洋再生エネルギー」などについて学ぶ
- ⑥ NAPER(ネイバー)
イギリスのエジンバラ大学で開発された多読プログラムに取り組む



▲ALTによる英語の授業や通訳練習による英語力の実践

▲市中西高で行われる体育大会 高校生も中学生をサポート！

▲生徒一人ひとりと対話する授業

▲ボランティア活動など、情報との交流も盛ん

生徒数	離島留学生
29	9

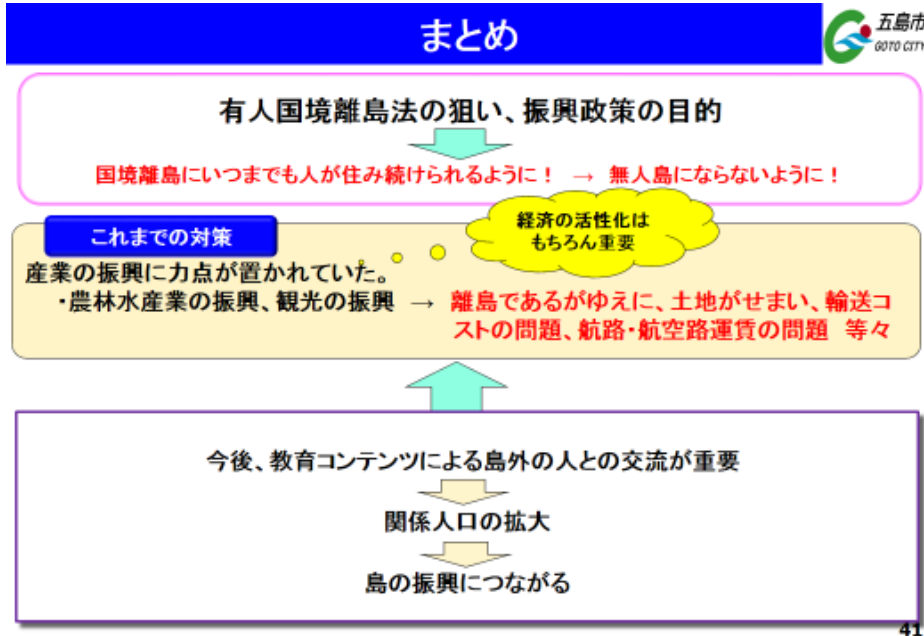
39

最後にまとめですけれども、有人国境離島法が2016(平成28)年に成立して、昨年からの予算が付いているいろいろな事業が展開されております。我々もいろいろな人口減少対策をはじめいろいろなことをやります。その大きな目的は、やはりこの国境離島にいつまでも人が住み続けられるように、要するに無人島にならないのが大きな目的だと思います。これまでの対策としては、産業振興にすごく力点が置かれていたのですけれども、ただやはり離島であるが故に、当然、島ですから土地が狭い、輸送コストが高い、人が動くにしても運賃が高いなど、いろいろな問題があります。

だから、こういう産業振興は当然やっていかないとけないのですけれども、それに加え

て先ほどの教育コンテンツによる島外の人との交流が非常に重要になってくるのではないかと思います。そういうことで関係人口の拡大で島の振興につながる……こういう考え方もこれまでにプラスしてやっていく必要があるだろうと考えております。

以上です。どうもありがとうございました。(拍手)



(石田) 五島市の久保様、ありがとうございました。私たちの大学との連携のみならず、中学、高校から、プロジェクト G や E-ハイスクールなど、新しいチャレンジもあり、しかもそれはローカルでありながら島の特性を生かした非常にグローバルなチャレンジでもあるということで、非常に興味深いお話でした。続きまして与那国町の企画財政課長の小嶺長典様にご報告をお願いします。

(小嶺長典) こんにちは。ただ今紹介をいただきました与那国町役場の小嶺といいます。今、与那国町役場は大変、皆様ご存じの通りといいましょうか、議長の譲り合いの選挙を九十何回もしまして、いまだに与那国町は9月の定例議会が始まってもないし、終わってない状況です。もしこのセミナーが平日でしたら私は来られなかったと思っておりますが、幸い休みの日だったので今日は駆け付けることができました。

さて本題に入りますけれども、地域連携×教育ということですが、観光を中心にした話をやりたいと思っています。なぜそれが教育に関係があるかといいますと、ボーダースタディーズという観点から、今から話をすることは関係すると思っておりますので、皆さんに話を聞いていただきたいと思っています。

私が住む与那国島は、日本最西端に位置する島で、隣が台湾という国境の島で地域です。

この地域の特性を生かした地域振興策の要は、やはり観光であると考えております。ただ、小さな島で人口も少なく、与那国町だけの努力では限界があると考えています。

そこで考えたのが、日本全国の国境地域の皆さんたちと連携した取り組みで、国境地域の皆さん、ツアー会社、それからボーダーツーリズム推進協議会と連携して、そういう取り組みをするということで、より大きな活動、より価値のある観光をつくり出せるのではないかと考えております。

ということで、まず「日本最先端の島、与那国島」……私の住む島をご紹介させていただきますが、与那国島は人が住んでいる場所としては東京から最も遠い位置にあります。日本の最先端に位置しております。日本全国の極地の中でも唯一の有人離島として、本当の最果てに立つことができる場所です。

島の大きさは、周囲 28 キロ、海に隔てられた独自の進化を遂げた昆虫とか動物、いまだに解明されていない海底遺跡、あと『モスラ』の原型となった日本最大の蛾アヤマハビル（ヨナグニサン）など、ここにしかない自然と、大陸と日本の文化が融合した独自の西の玄関口である美しい島です。



日本最西端の島 “与那国”

日本で一番最初に黒潮に出会う島

「国境の島 与那国」

自然 文化 人

“ここにだけしかない自然・文化・人”

人口	1700人
面積	28.9km ²
海岸線長	27.5km
気候	熱帯雨林気候

東京から約1,900km
沖縄本島から南西へ約509km
周囲27.49km、面積28.95km²の日本最西端の地

この西の玄関口であるということから、島は古くから、台湾をはじめとしたアジア地域の交流の場として、戦前は約 5,000 人の人々が住んでいまして、戦後は混乱期がありました。混乱期は台湾や東南アジアと国境をまたいだ密貿易ですけど、そういうことで栄えて島に 1 万 2,000 人もの人々が暮らしていたということで、交易と文化が行き交う人と文化の中継地であったということです。

ということで、まずこれから国境の魅力と役割について説明させていただきます。国境離

島という定義で話をさせていただきますが、国境とは日本を形づくる地域として、ほかの地域と異なるさまざまな特徴がある地域です。周囲を海に囲まれていることから、周辺地域からのあらゆる干渉が少なく、島独自の原風景が残っておりまして、地域固有の豊かな自然環境を持つ美しい地域です。

また、島国日本の中でも数少ない海外の玄関口として隣接する海外地域からの影響を受けた独自の伝統、文化、風習により、日本ですが日本と異なる、かといって海外ともまた違う特別な魅力がある地域と考えております。

一方の領海の領域を守る役割を担っている地域でもあります。国境地域はその利便性という点ではやはり首都圏と同じではありませんので、訪れるにも気軽に行ける地域ではありません。でもその国境地域に人々が住み、人が来る、活性化している状態をつくり出さなければ、日本を形づくり続けることが難しくなっていくだろうと思います。



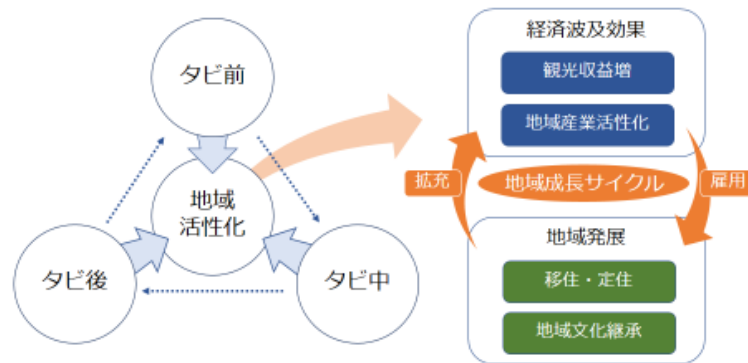
※1：領海、排他的経済水域等の保全等に関する活動の拠点

「観光による地域の経済活性化」として、では国境地域に住む私たちの国境を守り活性化していく、どのように考えていくかをご説明します。やはり地域の魅力を伝え、人の往来を活性化するためにも、観光は地域活性化になくはないと考えています。観光による経済波及効果、サービス業、小売業、一次産業など、幅広い分野におよび地産地消に結び付けることで地場産業を活性化させ、地域の雇用創出や税収を高めることにつながります。

また人口減少に歯止めをかける点から見れば、観光による交流人口の増加が地域を活性化させることにつながると考えます。一足飛びにはいきませんが、観光による訪問を契機にリピーターとなり、それから地域居住、季節移住、さらに定住へと発展する流れをつくり出すことが、移住・定住の一番いい形です。

観光による地域の経済活性化

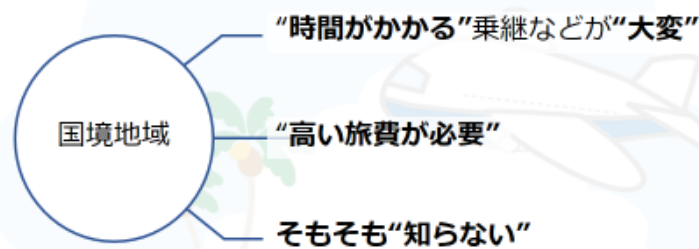
観光を契機とする地域成長サイクルの促進



11

与那国には高校がありませんので、小さいころから育った子供たちは、15歳の春で島から離れる島立ちを向かえることとなります。雇用の問題から、島立ちをした子供たちが島にUターンで戻ってくるケースはまれで、人口流出によって地域経済が停滞してしまう状況を支えていくには、成長する地域をつくり出して、豊かな生活を支える島の雇用機会を提示してUターンを促進する、Iターンの方を増やしていくという必要があります。

でも、やっぱり遠い国境地域・・・



知ってもらふ、そして価値を伝えて来たいと思ってもらふ

それでもやっぱり与那国……国境は遠いです。遠い位置にあります。遠いということは来るのに時間がかかります。また与那国では、空路で那覇もしくは石垣からお越しいただけますが、首都圏から直行便は、チャーターでもない限り、ないということです。そのために人

によって、来るのに大変と思う方もいらっしゃると思います。

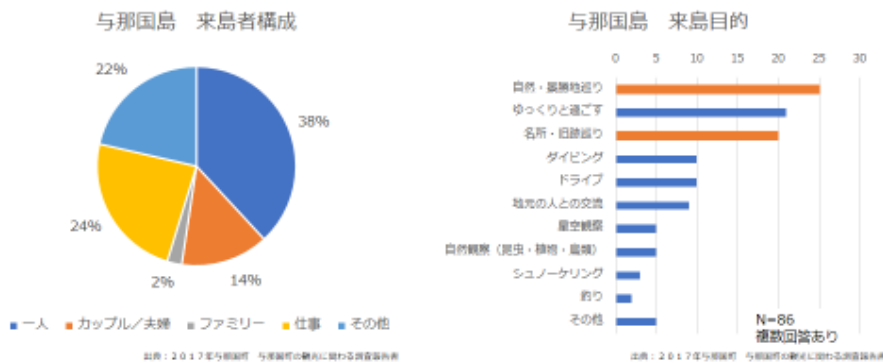
また、残念ながら国境地域のことをそもそも知らないという方、国境地域に行けることを知らない方も多くいらっしゃると思います。沖縄県内の中でも、もう与那国が最西端の島であることを知らない方がいるくらいです。

そういった状態では、いくら観光で地域活性化をしたいと言っても実現することはできません。そのため、まずやっていくべきことは、皆様に国境地域・与那国のことを知ってもらうことが大切であると考えています。また、時間や旅費が掛かっても行ってみたいと思っただけのような情報を発信して価値を伝えて、実際にお越しいただけるような取り組みを進めるのが重要であると考えております。

具体的に与那国で去年やったアンケートがあります。これでいきますと、結論から言いますと、与那国町で調査した情報から引用します。ここに今、30%とありますが、与那国町を訪れる方は1人旅とカップルで、ファミリー層が2%とわずかという状況です。

ではどのような人が来ているのか

最西端には一人旅で来島する旅行者が多い



- 国境地域に一度は行ってみたい **“記念”のニーズ**
- 日本の観光を巡りたい **“記録”のニーズ**
- しっかり見たい、よく知りたい **“知識”のニーズ**

与那国はハンマーヘッドシャーク、シュモクザメ、トンカチザメと言いますが、そういうものや、海底遺跡、世界でも有数なダイビングの体験できる島です。またほかにヨナグニウマ、爬虫類、昆虫など島固有の生物もいるため、1人旅、小人数でもそれぞれ目的に来る人が多いと考えていましたが、左はその目的です。自然景勝地巡り、名所旧跡巡りなど、自然文化、そして最西端の地、最西端の岬を目的に来島される方が一番多いという結果となっております。

別のアンケートの結果と島での聞き取り調査等から、現在仮説として考えているのが、与那国を訪れる人には国境地域に一度は行ってみたいという記念として、また他の国境地域を

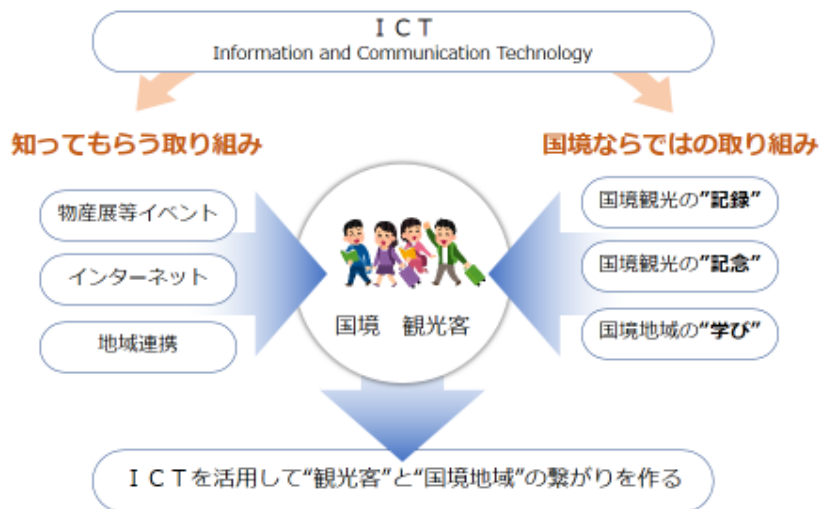
巡ってきて、全国を制覇してみたいといった思いがありまして、そのためにこういった全国制覇をするという達成感や記録のために訪れる、さらに時間をかけてお金を掛けてくる以上、その場をより楽しむために事前に学んでこられる方が多い傾向があると思っております。北大の岩下先生のボーダーツーリズムにはかなりアカデミックや要素が多くあるという感じで提唱しておりますが、それに合っていると思っております。

ではこれからは、知ってもらいたい、来てもらいたいための取り組みについて、これからどう進めていったらいいのか……挑戦していきたいと考えている内容について説明していきたいと思いますが、与那国をはじめとして国境地域を訪れる可能性がある観光客等に向けて、いかに魅力を伝え、知ってもらい、来てもらうという思いを持っていただくか。これを実現するため、情報発信に最も効果的なツールであります ICT の力を活用することが重要と考えております。

知ってもらい、来てもらうための取り組み



ICTを活用した新しい取り組みの挑戦



知ってもらうための取り組みとして、ICT を活用して遠くの地域を身近に感じることができる仕組み、臨場感あふれる情報をお伝えする取り組み、それぞれ離れた国境地域をつなげて相互交流を活性化する取り組みを行いたいと考えています。また国境ならではの取り組みとして、記録、記念、学び等の要望を組み込んで、ICT と現地観光を合わせた取り組みを考えています。これらの取り組みで真に実現したいことは、ICT を活用して観光客と地域間のつながりをつくり出して国境地域の活性化につなげていくこととなります。

その取り組みはいろいろあるのですが、時間がないので1つだけ……国境ならではの取り組みについて説明させていただきます。先ほど説明しましたように、国境観光は、記録・記念・学びといった特性があります。ただ現時点で、記録は個人ごとの管理、記念は各地の飲

食店や団体、自治体が独自に配布されている、最果ての地に来たことを証明する証明書、学びに関しましては自らが進んで努力して調べて回る形になっている状況です。

そこを ICT と組み合わせて、記録・記念・学びを1つの仕組みで提供することで、顧客と地域をつなぐ、地域と地域をつなぐ仕組み、事前に国境を学び、確認と体験を行うスタディーツーリズムという取り組みを進めたいと考えております。

具体的にはE-ラーニング、公開講座です。これはインターネットの学習サイトの利活用を行うことです。各地域の学び、観光協会の講座をネットで事前に学び、その学んだ結果を現地で確認、体験していくという、バーチャルとリアルを融合させる取り組みです。これは先ほどお話した特性に合わせたインターネットによるプロモーションに組み込みまして、新しいツーリズムの形を実現できることを考えております。

国境ならではの取り組み



ICTを活用して観光客との“つながり”を作り上げる

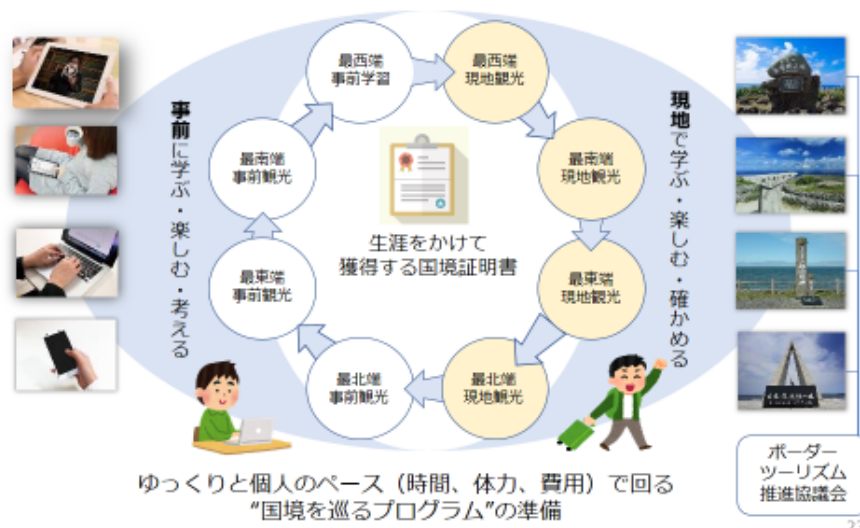


国境だからこそある独自の「学び」「記録」「記念」という特性を活かした
継続的に自走・継続可能な個人向けツーリズムの実現

まず具体的な導入イメージとして、こういうことがあります。まず各国境地域を学ぶインターネット学習講座を準備しまして、インターネット上で公開します。ここで、例えば東西南北の地域の学習講座を開設するイメージですが、旅行者の方が旅行前に事前に学習して、各講座を修了する。それでインターネット講座修了書を授与しまして、知識を得た上で実際に現地に旅行し、現地で来島の修了書を授与します。それで今回のカテゴリーは4つということでやっていますが、4つの地域、合計8つの修了書をコンプリートしたら、国境地域の連合から総合修了書を提供するといった流れです。これは、例えばボーダーツーリズム推進協議会がこういった総合の修了書を提供するということになると思います。

バーチャル×リアル スタディー・ツーリズム + docomo

国境地域連携による「顧客をつなぐ価値ある旅」の創出



取り組みで期待できる効果は3つあります。1つ目は時間と費用が掛かる国境観光を観光客の目的と目線に立ったストーリーとして組み立てることで、ゆっくりと個人のペースで国境を巡る旅を演出できることです。

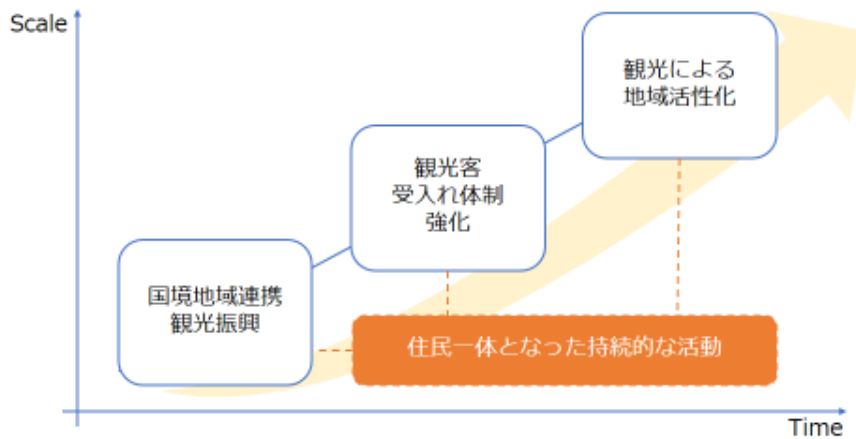
2つ目が、おそらく10代から国境観光をしている方、巡っている方をこのプログラムに乗せることで確実な相互送客につなげていく。そして記念と記録を大切な思い出としていただけることで、最後に、事前に学ぶことで国境地域への旅行をより深くよりよいものにしていただけるということです。

ではこれで最後にあらためてもう1回ご説明いたしますが、観光×地域振興の取り組みというテーマで、境界地域×観光とかそういうことですが、魅力的な地域を継続的に作り上げていくということです。地域活性化を実現する観光振興を通じた地域づくりを進めていくためには、観光客を増やす取り組みだけではなく、観光客を受け入れる体制、環境も併せて整備していくことが必要です。

ただ、人口減少が続く国境地域では、その体制や環境を整備していくことは困難です。そのために、観光客を徐々に増やしながら、観光客を受け入れる体制の強化、経済波及効果を含めた地域活性化を住民と一体となって取り組んでいくことが重要と考えております。

国境というオンリーワンの地理的特性を生かした観光振興、さらに地域振興につなげていけるように引き続き努力していきたいと考えておりますので、今日お集まりの関係者、境界地域の皆さんもぜひ一緒に取り組んでもらえたらと思っております。よろしくお願ひします。ありがとうございました。(拍手)

国境地域連携により
“魅力的な地域”を継続的に作り上げていきたい



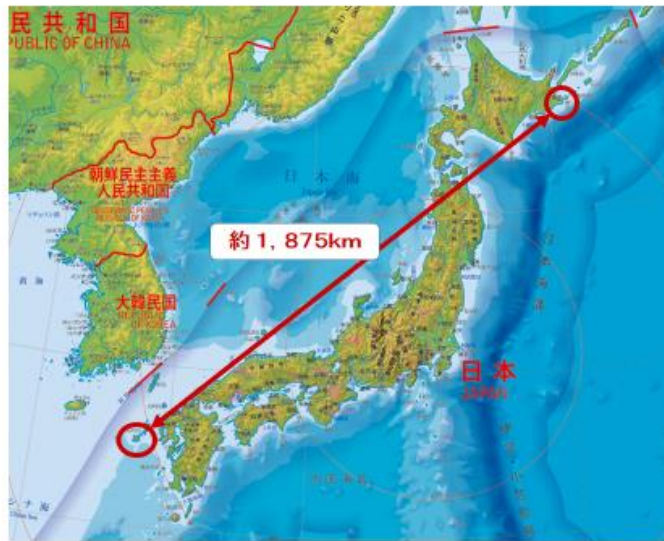
25

(石田) 小嶺様、ありがとうございました。ICTを活用した教育、学びということで、生涯続けて絶えず学べるというのは生涯学習とも非常に関係しそうな内容だったと思います。最後に、根室市北方領土対策参事の織田敏史様、ご報告よろしくお願ひします。

(織田敏史) 皆さん、大変お疲れさまです。私でご説明は最後ということですが、ただ今ご紹介いただきました北海道の根室市役所で北方領土問題を担当しております織田と申します。

今日の今までのお話は島がメインですが、私の住んでいる根室市は北海道の一番東にあります。先ほどご説明にあった稚内市も島ではないですけれども、ちょっと色が若干違うかもしれないけれどもお許しをいただきまして、今日は「境界自治体の地域連携教育」ということで、私からは私が所管している北方領土問題を中心にして、我々がやっている修学旅行誘致に関してご説明をさせていただければと思っておりますのでよろしくお願ひいたします。

まず根室市の概要です。もうお分かりだと思いますが、根室市は北海道の一番端の半島になっておりまして、ここ五島市とは直線ですでに1900キロぐらい離れております。私は昨日の朝6時半に自宅を出まして夜7時に到着しました。かなり遠いです。



私どもが住んでいる根室市を拡大してみたのですが、この根室市をはじめ、北海道の東の端っこ、これが北方領土ですが、北方領土を囲むようにぐるっと根室市とほかに4つの町がございます。これが根室管内の1市4町というところで、北方領土があるために、この根室市ほか4町を含め5つの自治体でいろいろな事業に取り組んでいるというところをまずご説明させていただければと思っております。



先ほども申しましたが、根室市は見てお分かりの通り半島になっていまして、回りをぐるっと海に囲まれていることから、古くから漁業、水産業を基幹産業として栄えてきている町です。特に戦後、北洋漁業が最盛期であった昭和50年ごろ、人口は4万5,000人を超えていたという状況でしたが、残念ながら北方領土問題が発生して、さらに北洋漁業からも

締め出されたということで、今年9月末では約2万6,000人程度まで人口が落ち込んでおりまして、現在も人口はどんどん減っている状況です。

北海道と北方四島との間に黒い線を引かせていただいております。これは国境といわれる線ではなくて、中間ラインと呼ばれている、正式な国境ではない暫定的な境界線です。この線の東側に位置します北方領土、この線を越えて行くことはできません。北方四島には現在ロシア人が生活をしておりまして、我々の主張としては、ロシア人が実効支配している日本の島、というのが北方四島です。

私ども根室市民も含めて、先ほど申しました通り、この黒い線を越えることは許されておりません。越えた瞬間に拿捕されるということがいまだに起きる、起き得る場所になっています。

さらに拡大します。ここが納沙布岬になります。北方四島に一番近い島が貝殻島という島で、無人島ですけれども、3.7キロしか離れておりません。次に近い島が水晶島。これも7キロしか離れてないということで、先ほどの中間ラインがこの間に引かれていますので、一番近いところで1.7キロ、水晶島の間3.5キロ。この狭いところでこのあたりの漁師さんは魚を捕っていると。この線を越えると拿捕されるというのが今でも緊張感を持った海になっているというところをまずご紹介させていただきます。



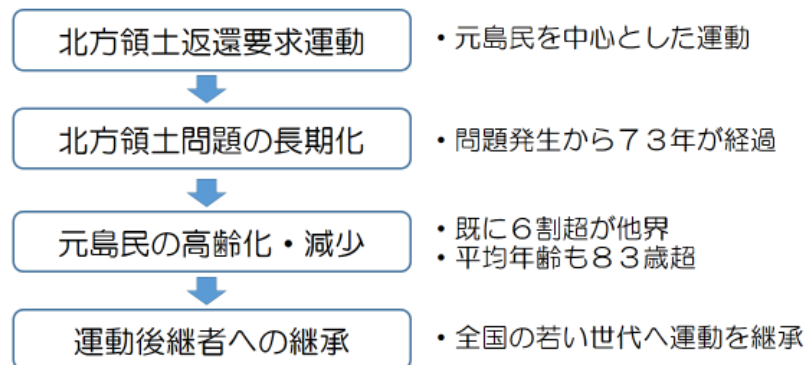
もう何度もこの会議でも説明させてもらっていますので、もうご承知かと思います。北方領土問題です。我が国固有の領土である北方四島が、第二次世界大戦の終戦直後に旧ソ連軍によって不法に占拠され、以来、戦後73年が経過した今もなおロシアの不法占拠の下に置かれているという問題である、というのが、国、我々の認識もそうっております。私どもがこの北方四島を地元から返せと、北方領土問題早期解決を全国に訴え続けているというのが北方領土返還要求運動になります。

●北方領土

島名	納沙布岬からの距離	元島民数(人)		現島民数
		S20.8.15	H30.3.31	H27.1.1
歯舞群島		5,281人	1,945人	0人
水島島	7.00km	986人	356人	0人
勇留島	16.67km	501人	170人	0人
秋勇留島	13.70km	88人	35人	0人
志丹島	25.56km	2,249人	849人	0人
多楽島	45.56km	1,457人	535人	0人
(貝殻島)	3.70km	-	-	-
色丹島	73.34km	1,038人	322人	3,006人
国後島	37.40km	7,364人	2,527人	7,916人
択捉島	144.50km	3,608人	1,247人	5,906人
合計		17,291人	6,041人	16,828人
		平均年齢	83.2歳	約32.0歳

この表で何を言いたかったかという、戦前の北方四島には、元島民、日本人が1万7,291人、4つの島で生活していました。それが全員、終戦直後に島から追い出されて、今は1人も住んでないのですが、1万7,000人を超える方々が全員日本に帰ってきて、戦後73年たった今現在、6,000人程度しか生存してない。6割以上がもうすでに73年という年月を経過して減り続けていると。その残された方の平均年齢も83歳を超えているというのが現実でして、あと2~3年もすれば本当にこの6,000人が限りなくゼロに近づくのではないかとということが私どもの今の一番の懸念材料です。

●北方領土返還要求運動



北方領土返還要求運動……これは今まで島に住んでいた方々、元島民を中心に、早く島に帰りたい、ふるさとを返せという声から始まって、我々も地元としてその声を後押しするような運動をしてまいりました。73年という年月が経過した今、元島民の高齢化、減少という問題が顕著に表れてきていまして、あとは我々としては元島民が一人もいなくなる前に、この元島民の思いを継いだ運動後継者を北方領土問題が解決するまでやっつけていかなければなら

ないということでもいろいろ取り組んでいるということなのです。

その1つの取り組みとして、北方領土を目で見る運動、修学旅行誘致事業という具体的な事業になりますけれども、元島民の高齢化が進む中、若い世代が北方領土問題を肌で実感していただいて、正しい知識と理解を深めていただきたいということで、内閣府、国の支援をいただきながら、先ほど説明した根室管内の1市4町が全国展開している事業です。

少し話がそれますが、根室管内1市4町と先ほど申しました。これは北方領土隣接地域ということで、北特法という特別な法律で国によって実際定義されている、北方領土問題によって大きな影響を受けている地域と定義されております。

※根室管内1市4町 = 北方領土隣接地域
(根室市、別海町、中標津町、標津町、羅臼町)



北方領土隣接地域とは、北方領土問題が今なお未解決であることに起因して特殊な事情におかれている「根室市、別海町、中標津町、標津町及び羅臼町をいう。(北特法)

北方領土隣接地域振興対策
根室管内市町連絡協議会

この1市4町で北方領土隣接地域振興対策根室管内市町連絡協議会を立ち上げておりまして、この協議会でいろいろな事業に取り組んでいる状況になっております。



これが、我々が今使っているパンフレットの表紙ですけれども、修学旅行誘致事業に関しては、先ほども説明した通り内閣府からの支援をいただきながらやっている事業で、全国の中学校や高校をターゲットとして、修学旅行の一環、研修旅行として、この根室市をはじめ

とする北方領土隣接地域に実際に来ていただいて、現地では先ほど見てもらった納沙布岬から実際に島を見てもらって、あるいは元島民から直接講話を聴いて、北方領土問題に関する正しい理解と知識を持ってもらって、全国で返還要求運動に参加してもらいたいという思いから始めている事業です。

誘致の方法としては、我々1市4町隣接地域の職員、あるいは元島民、あるいは高校生、青年会議所などなど、実際に全国に飛んで、旅行代理店とか学校を訪問して、修学旅行にぜひ来てくださいというようなお声掛けをしております。それで実際に来ていただいた方に対して、必要となる経費の一部、あるいは全部、物によって若干違うのですが、お金を助成してあげましょうという事業となっています。

もう1つ、来ていただいた方にはそういった助成制度があるのですが、逆にさっき言った誘致に向いて、我々が全国に行って、誘致活動もそうですけれども、その前に、実際に根室に来る前に、北方領土の基礎学習ということで、元島民とか地元の高校生とかが実際にその学校に行き、基礎的な話を説明させてもらうのも事業としております。

納沙布岬(北方館・望郷の家)／根室市

わずか3.7km先には歯舞群島・貝殻島や7km先には水晶島、天気の良い時には国後島の山並みを望むことができる、本土最東端の岬です。
北方領土を間近に望みながら、専門員によるわかりやすい北方領土問題の解説を受けることができます。

- 所要 30分～1時間
- 人数 100人まで
- 概要 ①北方館には望遠鏡(無料)を設置しています
②施設周辺には、お土産を購入できる施設があります



北方領土の洋上視察／根室市・別海町・羅臼町


チャーター船にて日ロ中間ライン付近まで近づき、歯舞群島や国後島を洋上より視察できます。

【歯舞漁協パノラマクルーズ】(根室市)
○人数 12人まで ○所要 2時間 ○11月1日～4月末

【別海町観光船】(別海町)
○人数 150人まで ○所要 2時間30分 ○4月下旬～10月末

【ホエールウォッチング】(羅臼町)
○人数 120人まで ○所要 2時間30分 ○4月～3月

元島民や北方領土返還要求運動関係者などが乗船し、船上にて講話を行うこともできます。



これはパンフレットの中身ですけれども、これはメニューのひとつで、実際に根室にあるいろいろな施設を見てもらおうと……これもそうですね。あるいはこれは羅臼や別海町から一緒に船に乗って中間ラインの近くまで行って、実際に目で島を見てもらおうというもので、この船に関する経費はすべて我々が負担しますということになっています。あるいは北方領土だけだとつまらないので、実際に漁師体験とか、水揚げの様子を見ていただいたり、市場見学、あるいは1市4町でも酪農が盛んなので、牛の乳絞りをやっていただいたり、いろいろなメニューを組み合わせ、実際に来ていただいて、北方領土問題に肌で触れてもらおうというところです。

実際に来ていただいている学校ですが、過去5年間、この事業は平成15年度からやっております。ただなかなか伸び悩んでおりまして、直近5年間ですが、だいたい10件から13件ぐらいの中学校、高校が実際に来ていただいております、だいたい1,000人前後で推移している状況です。

ただ、高校の修学旅行になるとちょっと難しいのが、旅行会社への説明(プレゼン)です。



入札制度ということで、だいたい3年間サイクルで回るから3年間沖縄の方に決まっていたり、次の北海道は3年後になるという説明があったり、今年度行ったからといって来年度行きますと約束ができない、あるいは保護者の了解がないと……ということでもなかなか簡単にはいかないですけども、それも粘り強くどんどんやりながら、少しでも多くの方に地元に来ていただきたいということで取り組んでいる事業となっております。

●北方領土を目で見る運動「修学旅行誘致事業」

年度	件数	人数
平成25年度	10件	1,094人
平成26年度	13件	1,190人
平成27年度	13件	1,144人
平成28年度	9件	698人
平成29年度	9件	559人

※本事業は、平成15年度から実施。
※平成30年度より、助成内容を見直し（改善）

今回の説明の趣旨と合っているかどうか分かりませんが、北方領土問題の隣接地域が取り組んでいる教育旅行誘致事業をご紹介します。以上になります。ありがとうございました。（拍手）

（石田） 織田様、ありがとうございました。北方領土をもう目の前にした修学旅行での地域連携、交流に取り組んでいるということでした。

セッション2の境界自治体、「境界地域における地域連携教育」ということでお話いただいたのですが、できれば共通の質問にお答えいただいた後に、フロアからの質問を頂戴していきたいと思っています。

やはり全体的に見て、先ほど与那国町の小嶺様のお話の中で、「極地連携」という言葉にすごく私はインパクトを感じました。ICTを使ったりしていますし……。また五島市であればベトナム人の日本語学校での受け入れ、あるいは地元の中学生、高校生とともに学んでいく、あるいは長崎大学や長崎県立大学をはじめ、いわゆる離島以外の大学生や学生との交流を深めてその価値や魅力を知ってもらうというのもインパクトがありました。

最後の織田様のご報告では、内閣府の支援を受けてということではありますが、全国津々浦々の高校や中学校に実際に修学旅行に来てもらうことで交流や連携を深めてもらうということでした。教育の話になりますが、実際、教育のプログラムに参加する学生団体、あるいは観光客といった方々の変化もあると思います。実際に地域で受け入れを行ってみて、あるいは与那国の場合はアクセスがまだなかなか難しいけれどもICTによる連携で実際に外



の人が与那国を学んでくれるということで、地元の中でも、地元住民の中での変化といえますか、人の往来といったものを通じて地元住民の中でどういう場を考えているか、あるいは今、地元の企業の中で新しいアイデアが生まれたとか……もしそういうお話があれば、まず小嶺様からお話を伺えればと思っておりますが、いかがでしょうか。

(小嶺) 与那国町は光ファイバーの海底ケーブルが2年前にやっと来まして、去年からやっと集落内の整備に入っております。こういった各家庭に光やLED化がありまして、それでNTTドコモと一緒に、「では何かそういうのを使って連携して、何か新しいことをやってみようよ」という取り組みの一環が今日話したようなことになるのです。ですからまだ緒に就いたばかりということで、それが島の中でどういうふうに影響していくかということとはなかなか出てこないです。

またこれは少し話が違いますが、与那国町は教育の面でいいますと、お隣の台湾と交流しています。小学生や中学生は修学旅行でみんな台湾に行かせて、小さいときからどんどん台湾とお付き合いしていくといった意識をずっと持たせいる状況です。今後そういうのを使って、また卒業してしまった子供たちがまた戻ってきた時に、今のことが出てくるかと思っております。

(石田) ありがとうございます。では続きまして根室市の織田様から、修学旅行生を多数受け入れられてみて、修学旅行生もいろいろ変化、学び、気づきがあると思うんですけど、地域の中での変化や新しい交流があればご発言をお願いします。

(織田) 修学旅行誘致を先ほどご説明させていただきました。それで実際に来てもらった方と地元の高校生の交流会等々もしています。地元の高校は2校あるのですけれども、そのどちらにも北方領土研究会というサークル活動がございまして、かなり一生懸命、積極的に活動いただいております。我々の修学旅行誘致事業にも一緒に行ってもらって説明をしてもらったりしていただいております。けれども、人口がどんどん減って子供もどんどん減っているのは我々根室市も同じ環境で、高校が2つあるのが再来年から1つに統合されてしまうというのも現実的になっていまして、全国の子供たちにもそうですけれども、もう1つ、地元の子供たちにも積極的に声を掛けて一緒にやっというのが今、取り組んでいる別の1つの道で、そちらの方でも一生懸命やっているのも現実です。

(石田) ありがとうございます。地元の高校と全国各地の高校との連携ですね。

では最後に、大学、高校、中学校といろいろな取り組みで連携をされている今回の開催地の五島市を代表しまして久保様からご回答をお願いいたします。



(久保) 先ほどご紹介しました五島市の教育コンテンツにつきましては、今やり始めたところ、今からやろうとしていることがほとんどです。例えば日本語学校についても、なぜベトナム人なのかとよく言われますし、また改修して使う寮が高台にあって、担当課長の方で、地区住民にはもう何回もご説明をしているのですが、周りの方々も、「では地域でみんなで育てていこうよ」という意識が少しずつ広がってきているという意味では住民の方も楽しみにしていच्छるのではないかと考えております。

また、しま留学についても、久賀島は人口が300人しかいない、ほとんど高齢者ばかりの島で、その島の灯火が学校であるというのがありまして、学校がなくなると島が寂しくなるということがあると思うのです。ですから、奈留島よりも久賀島の方がそういう意味ではしま留学に一生懸命になっていて、非常に数が多くなっているのはそういうところとっております。

そういう意味で、しま留学、離島留学、N高の問題、大学との連携など、いろいろなことで今、何とか五島市をそういう活動のフィールドにさせていただきたいということで我々は今取り組んでいるところですので、そこは今後も地元住民の方々にもご協力いただきながらしっかりと取り組んでまいりたいと考えております。

(石田) ありがとうございます。私ども大学にしましても、やっぱり人口減少の中でいかに地方の大学が学生を魅力的なものに育てていくかは非常に重要なので、そうなってくると、やはり大学の中だけで頑張ってもだめで、どういう地域と連携するか、どういうプログラムを地域と連携して作っているかというのも非常に重要になってきます。その点で久保様や皆さんが実践されている地域外との連携を通じた教育というのは非常に近いものがあつたかと思ひます。

それでは、この機会にぜひここでご報告者の方々に「これはどうなっているのか聞きたい」「ここについてもうちちょっと知りたい」など、フロアからご質問があればよろしくお願ひします。

(小野) 礼文町です。久保さんにお聞きしたいのですが、ここには市長さんもおられるのでなかなか答えにくいと思うのですが、離島留学ということで、小学校、中学校はもちろんでしょうけれども、最近は高校についても取り組まれているということですね。

高校についてはまだ、有人国境離島、あるいは離島活性化交付金でも対象にならない部分がありまして、お金が相当掛かると私は思ったのですが、それはすべて市の予算でやられているということですか。

それともう1つは、大学といろいろな意味で連携をしながらやられているということですが、その取っ掛かりみたいなものが何かあつたら教えていただきたいと思ひます。

(久保) まず離島留学は県立の学校、県立高校ですので、2018(平成30)年度から開始しているのですが、県の方のお計らいで、五島南高校と奈留高校という五島市の高校を率先して先にやっています。財源もおっしゃる通りで、例えば親御さんに補助する金額については、離島活性化交付金でも、国境離島でも対象になっておりません。そこについては市長から市でやるとご判断いただきまして予算化しているところです。ただ、離島活性化交付金等にも対象になるようにと要望しています。そういう動きはやっております。

大学連携の発端ですが、これは五島市からでもなくて、もともとは長崎県の音頭取りもあって、もう10年以上前になるかと思いますが、長崎には国立、公立、私立も含めていろいろな大学があり、かなり大規模な数になりまして、それらの大学と各市町村で困っていることで、大学にお願いできて解決できる種があるのではないかと、シーズがあるのではないかと、いうところからやりとりが始まって、例えば県立大学にお願いして調査研究してもらおうとか、長崎大学にお願いして調査研究してもらおうということから始まって、その後、包括連携をして、いろいろな具体的な取り組みをやりましょうということで始まったということになります。

(石田) ありがとうございます。このセッションでは、国境離島地域における教育と地域連携ということで、最前線の取り組みをご発表いただきました。あらためまして3名の方に拍手をよろしくお願いたします。ありがとうございました。(拍手)





総合討論

(岩下明裕) 最後に討論の司会をします岩下と申します。JIBSN では企画部会長と事務局をしております。

今回のテーマですが、1つはだいたい主催の方からのテーマで、もう1つはこっちで考えてやっています。1つは久保さんの方から、ぜひ行政交流をやってほしい……つまり、先ほど市長からも話がありましたが、久保さんがおっしゃるには五島には相手がないので、できればJIBSNのどこかと……という話がありましたので、古川さんと相談してテーマを設定しました。

先ほど通事課長は言わなかったのですが、実を言うと対馬と竹富の交流はJIBSNの枠組みの中で縁があって、特に竹富では対馬でやっているミュージカルを誘致して行いたいという構想もあったようです。そういう意味では三谷さんの分析枠組みの中に1つ欠けていたのが、JIBSNのおかげで縁組をしたというのを私は付け加えたいです(笑)。

ついでに言うと、小野町長がJIBSNに参加されたのは与那国の外間町長のアプローチです。「なかなか与那国は難しい」と言うと怒られるのですけれども、縁組を与那国と礼文でやるという話が本当はあって、本来ならばここで今日それを言っていただきたいような話だったのです。たぶん次回礼文でやる時はそういう話になるといいと思いますが、これも逆に1つのJIBSNを通じた縁組による交流のお話であると思います。

それからセッション2は、実を言うとさっき軽妙な司会をしてくださった長崎県立大の石田さんとはとあるところのセミナーで会いました。「この人、面白い人だ」と思って、また九州大学の箱崎キャンパスが閉鎖されるということもあって、5月に九州大学の箱崎キャンパスでNPOの国境地域研究センターのセミナーでしゃべっていただいて、長崎県立大学の取り組み、すなわち、県立大に入ったら無理やり島へ行かされるというのは面白いので、長崎の五島セミナーをそのテーマでしたいと考えました。そこで非常に多様なプログラムの中で北方領土の意味を考えようという趣旨の話もあったので、非常に広がりがあったと思います。

与那国のICTの話は、さっき東西南北とはっきりおっしゃらなかったですが、一番南の竹富町の波照間、それから北の礼文、それでまだ知ったばかりなのでびっくりされるかもしれませんが東は根室……以上4つで連携してプログラムを使って、それぞれにお遍路参りのような国境参りをするとスタンプをもらえるということを考えられていて、特にボーダーツーリズム推進協議会のバックアップもあって、この前(2018年9月)のツーリズムEXPOジャパンでもNTTドコモと与那国が組むような形で行いましたが、これも1つのJIBSNの枠組みで生まれつつあるソリューションだと思います。

このように、JIBSNを長くやっていると、当初とは違う方向かもしれませんが、いろいろな進捗がありますし、今回は80人ぐらい集まって非常にうれしく思いました。

もう私もこれ以上しゃべりませんので、どうぞどなたからでも挙手いただいてご発言をお



願います。その際、名前と、もしご所属があれば言ってください。

(高木彰彦) 九州大学の高木と申します。貴重なお話をお伺いしましてありがとうございます。セッション1では友好都市の交流を中心としたお話で事例紹介が中心だったものですから、お聞きしたいのは、そうした本日もご紹介いただいた友好都市の中で、あるいはご紹介いただけなかったところで、海外事務所あるいは県外事務所というような形で現地事務所を設けておられるような事例がどれくらいあるのかをご紹介いただければと思います。

本日もご紹介いただいた自治体もございましたけれども、ほとんどのところは紹介いただけなかったと思いますので、ない場合はないで結構ですので、そういう現地事務所をどの程度置いておられるのかということをご紹介いただけないでしょうか。

(岩下) はい。では、稚内からお願いします。

(三谷) 稚内市の三谷です。高木先生におかれましては、何年か前に稚内市まで来ていただいているいろいろとご質問をいただいたと記憶しております。ご承知の方もいらっしゃるかと思いますが、2002年に稚内市がユジノサハリンスクに稚内市サハリン事務所を設置して現在に至っております。

もともとは2000年前後に地下資源開発でサハリンプロジェクトが盛んになる中で、当時はサハリンで関連工事をはじめとする需要が増加しておりましたから、そういった中で、さらに経済発展を稚内に取り込むことを当初の目的としてサハリン事務所を設置しております。

ただ、経済交流、特にビジネス関連の分野におきましては民間に任せるということで、そういった機能については北海道銀行がすでに事務所を構えておりますので、具体的なビジネスの案件についてはそちらを通してもらっています。そのため稚内市サハリン事務所の役割としては、稚内市とサハリンの友好都市3市との交流、そして出先機関としてのPR……何しろ現地に職員が常駐しておりますので、サハリンの中では北海道庁を除くと日本の自治体の中で稚内市のみが有している機能になっておりますので、事務所を通して友好交流を進めているという状況です。

なお、サハリン以外の地域で現地事務所を有している事例は私どものところではございません。

(岩下) ほかにお持ちのところはどこですか。

(阿比留) 対馬市の阿比留です。対馬市が合併するのは2004年ですけれども、2003年、その1年前に、対馬市ということではなくて、対馬国際交流協会という外郭団体があるのですけれども、そちらの釜山事務所ということで設置しております。



その事務所から、観光情報とか、ハングルに訳された対馬の情報をすべて送受信していただいて、現在では観光客が来られた際の苦情等もそちらに集まるような仕組みになっておりまして、どこそこの店でこういう扱いが見られたとか、バスの便数のこととか……そういう金額も含めた部分をそこで情報収集して、それを対馬市に返すという事務を受け持っております。

観光客が大きく伸びた要因の中には、対馬市の事務所ではありませんけれども、国際交流協会という形の中にある事務所で情報収集して送受信したことが大きな成果になっているところがあります。

(岩下) 与那国も花蓮からの手紙の件と併せてお願いします。

(小嶺) 与那国です。10年前ぐらい2006年に台湾の花蓮市と国境交流増大基本合意書を締結しまして、その翌年に与那国町の連絡事務所を花蓮市役所の中に一応形式上は置きました。それから1年間ぐらいは職員も与那国から派遣していたのですが、その後は自然消滅みたいになっていますので、今のところはないということになります。

ただ、実はおととい花蓮市の市議会議員がたまたま与那国町を訪れて、そこで締結したときにサインした議員の1人だったということで、その後はなかなか物事が進んでないので、またこれからいろいろと台湾花蓮との間でいろいろな交流をもっと活発にしていきたいと思います。と提案されまして、そこで町長も入れまして、「ではもう一度、出直し、建て直しをするか」ということで、今から進めていきたいと思っております。

(岩下) ほかの自治体はありますか。根室はないですか。

(織田) 根室市は国内(さいたま市)に東京事務所があります。

(久保) 五島市は5年前に、海外ではないですが、福岡に福岡事務所、東京に東京事務所を設置しております。東京事務所に3人、福岡事務所にも3人の職員を置いて、観光と物産の営業拠点ということで営業活動を今やっています。

(岩下) 分かりました。ほかにどなたか質問はございませんか。

(通事) セッション1のテーマの時に行政交流ということで私の方からお話をさせていただきました。特に五島市はお相手がないということですが、我々もどのようにお付き合いをして行って良いのかと悩んでおりまして、実質的に経済交流という形までどのように進むのかに関しては、皆様のご報告を聞いても、なかなか進まないのが実態かと思っております。



す。非常に難しいという感想を持ちました。

1 つ面白いのが、稚内市と石垣市の間で職員がそれぞれの仕事を条件がまったく違うところで行うということでした。そこで、その実態をもう少し詳しくお聞かせいただけないでしょうか。例えば何カ月ぐらい行って、どういう仕事をどのようにしているのかを教えてください。いただければと思います。よろしくお願いします。

(三谷) はい。詳しい中身までは私も存じ上げていることではないですけども、これは断続的に進めているということで、期間については、かつては長く、1月以上いるようなこともありました。石垣の方は本当に真冬の稚内に来られるのですけれども、そこまで寒いところに行ったことがないということで、稚内がどれだけ寒いところであるかを確認するために自宅の冷蔵庫に頭を突っ込んで確認してみたというような方もおられます (笑)。

当然、逆に稚内の方も、この前、職場に回覧が回ってきて、石垣に今度派遣される方が決まったという通知が来ておりましたので、来年の夏場に行かれるはずですが、でも仕事については自分の職位のところに行って見聞するというのが基本ですけども、そうではなくて横断的に、例えば石垣の方が来た際は建設産業部のすべてのフロアをちょっとずつ経験してもらっています。

ですから、研修のさせ方としては2パターンありまして、1つは本来の職務をそのままやる形があり、もう1つは体験型といいますか、何日間かずつやっていくような形で多くの職務をするという現状です。

(岩下) 先ほどの三谷さんのお話の補足ですが、共通の課題があるところは、互換的な付き合いもあると思うのです。稚内は酒がないです。日本酒ができないです。だから、根室はすごく美味しい「北の勝」があるのに対して、稚内も魚があるのですが旭川や増毛の日本酒になってしまうのです。ところが、姉妹都市の枕崎に行ったら薩摩酒造でしょう。だから白波と神の河を飲むのです。だから、酒の交流ができます。

そういう意味では、五島に日本酒はありますか……ないでしょう。対馬には美味しい「白嶽 (しらたけ)」があるではないですか。昨日せっかく五島市長に美味しいお酒を飲ませてもらいましたが、あの魚で日本酒がないというのは非常に辛いので、ぜひ縁組したら、そこから杜氏を借りて、これだけおいしい米を作れるのですから、酒蔵もつくって、五島で日本酒を造ってはどうか。そういうアイデアもあると勝手に思いましたが。

(伊豆) ボーダーツーリズム推進協議会の伊豆です。根室市の織田様に修学旅行の件でお伺いしたいです。毎年9~10件ぐらいと先ほど発表されていましたが、公立、私立、あるいは学校の場所など特徴的なところがもしあれば教えていただければと思います。



(織田) 根室市の織田です。ご質問ありがとうございます。基本的には私学が今中心になっておりまして、我々根室の地元も、やっぱり交通の便もそうですし、宿泊施設の関係等々インフラがかなり弱くて、大規模校が来られても対応できないのが実情です。

飛行機は中標津空港が一番近いですが、やはりそんなに大きくない飛行機でして、なかなか受け入れ先も難しい状況です。

学校に関しても、公立だとちょっと難しいということと、私学だと、例えば沖縄に行く人もいれば北海道に行く人もいるといったように行先を変えられる学校もありますし、北海道の中でも札幌チームや道東チームなどグループ分けして、それぞれ生徒自体が希望を出していろいろなテーマに振り分けできるという融通の利く学校が最近出てきておりますので、そういうところを中心に今お声を掛けていますので、私学が多いです。

基本的には、静岡、大阪、鹿児島といったところからも来ております。九州は最近少ないですが、関西が今多い状況です。

(岩下) さっき稚内より根室は酒がおいしいと言いましたが、根室が稚内に負けているのはホテルです。

皆さん、今、織田さんは中標津空港が一番近いと言いましたが、今回、根室から来ている人はみんな釧路空港から来ています。釧路ー東京は近いです。真っすぐ飛んだら札幌と変わらないです。それと、釧路はカテゴリ3なので降りられるのです。だから道外便が釧路で降りられないのに、東京から来るのは降りられるということが結構あります。そういう意味では釧路空港を使って、全国各地から東京経由で輸送して、根室にホテルを観光会社と伊豆さんが中心になって造ると、だいぶ違ってくると思うのです。

すごく観光客はいるのです。納沙布岬はいっぱい観光客が来るのです。それが根室に全部泊まらないのです。どこから来ているのかを一度阪急交通社に調査したことがあるのですが、ほとんど泊まらないで素通りになっているので、何かいろいろできるのではないかと思います。

ほかに特にならなければ、実は前回から JIBSN のセミナーに合わせてボーダーツーリズムをするという新しい試みがあって、今回ぜひここでと言われたのは、五島から済州島にチャーターを出したいということでした。それが今回の弾みになっていまして、チャーターに乗りたい人が結構いて……25人ぐらいが全国から集まると。今回のチャーターに関して、五島の海外展開にご尽力されたコリアンエクスプレスの代理店の中鉢真輔さん、何かありますか。

(中鉢真輔) すみません。ただ今ご紹介にあずかりました、コリアンエクスプレスエアの総代理店をやっております(株) JMRS の中鉢と申します。このたびビックホリデー(株)を通じまして、またこのような機会に参加させていただきまして本当にありがとうございます。



コリアンエクスプレスエアの事業は実は1つの事業でして、いろいろな事業でチャーター機をいろいろな運用、活用をさせていただきましてやっております。

ただ普段は正直言いまして、きちんとした企業の国際線が飛んでいる空港でやらせていただいているのが通常ですが、今回こういう、五島市で行われるということで、近くにある済州島の方に行くというお話をビックホリデー（株）の方からご相談いただきました。実はコリアンエクスプレスエアも含めて、どういうふうにやればいいのかというところでいろいろ課題はあったものの、皆様の熱い気持ちというか、いろいろなお話を伺った際に、これは成功させようということで、こちらも頑張って成し遂げようということで今回、明日皆さんチャーター便に乗る方はご利用なさると思いますが、そちらの方を何とか引っ張ってきました。

私は飛行機に関する事業を政府のいろいろな行事やいろいろなところでやらされているのですが、今回あらためてJIBSNやボーダーツーリズム協議会とのこの機会を通じて、今回、五島の福江空港から国際線を飛ばすということをやろうと5月ぐらいからずっとしていましたが、五島市の皆さんもそうですが、本当にこの設定をするのにいろいろな方々がかかわって、いろいろな、税関や入管や検疫も含めていろいろなことがあって、私もそういう意味では本当に勉強になりました。でもそのきっかけの背景が、やはり皆様が言っているこの五島セミナーです。この五島セミナーで初めて今回、国際線チャーターを引くということなのです。

本来であれば、実は韓国からもお客様を受け入れて、双方向、いわゆる2ウェイのチャーターを実施して五島市の皆さんが外国の方を受け入れて地域活性化へ向ければという夢もありましたが、いろいろ諸事情で残念ながら今回は国際線の出発ということになってしまいました。

ただ本当に皆様がここにいらっしゃることによって、かなり前進したと私はすごく思っています。これをきっかけに、五島福江空港に今後、海外からまたお客様がどんどん入ってくる……すなわち、これから日本全体もインバウンドのお客さんをもっと増やしていこうという動きがあります。そういう意味では世界遺産登録も含めて、いろいろなイベントがありますので、私たちも本当にこれを機に、またインバウンドとかいろいろなところでお手伝いをしていきたいと思ったり、皆様の会を陰ながら応援させていただきたいと思っています。本当にありがとうございました。（拍手）

（岩下） とても美しく語っていただきましたが、個人的に聞くと、とても生々しくて辛く長い道のりだったそうなので、ご関心のある方は、後で直接個人的に。特にメディアの方は取材されると楽しいかと思ったり。

どうしてもボーダーツーリズムもJIBSNもそうですが、境界自治体と言ったときに、隣と付き合い、隣がはっきりして見えている地域はどうしても中心あるいは出発点になっています。けれども自治体が今は隣と付き合いえないけど隣と交流経験があったり、交流の可能性があったりということもあります。

今回の試みのやっぱり画期的なのは、今まで交流ができなかったところにゲートウェイをこれで作れる可能性があるということです。五島から濟州島に濟州島から釜山につながると、濟州島は今、一大リゾートですから、つなぐことで、例えば五島から対馬から、濟州島から、釜山、ソウルという新しい交流圏という広がりが出てくるので、大きく日本の国境・境界地域の交流の在り方が変わるヒントになる可能性があると思うのです。

そして、普通はチャーターをやると、どうしても地域、地元と向こうの地元の交流ですから、続かないのです。何十周年に1回とかしかできない。今回は五島市民と一緒に全国の方が行って帰るということで、これも将来的に大きな一歩で、今までと違うチャーターの在り方で、これならできるきっかけとなる……そういう窓口になる JIBSN の新しい展開であると思います。

最後に、今回の五島のチャーターを五島モデルとして、チャーター会社をこれで知りましたので、ほかの地域、例えば稚内とサハリンのように船で苦しんでいるところで、稚内でチャーター便をしてサハリンに行くということもつなげられますし、それ以外の地域も、今回、五島があえてこのようにつくったことで、五島モデルとして外に言えると思います。そういう意味では今日のセミナーと明日のチャーター便が連携して、非常に新しい1ページを開くことになるのではないかと考えています。

今日は五島セミナーにご参加いただきありがとうございました。ホストを務めていただいた五島市役所の皆さんが後ろの方にも立っておられますので、ぜひ拍手をお願いします。(拍手)

次回は来年の9月21日に礼文でセミナーを開催する方向で調整していますので、次はぜひ礼文町で1人の欠席者もなく集まれるように、またお会いしましょう。今日はどうもありがとうございました。(拍手)





JIBSNレポート No.16

特集「JIBSN対馬セミナー2018」

編集者：古川浩司

協力：岩下明裕

発行日：2019年2月25日

発行者：野口市太郎

発行所：JIBSN 事務局（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター内）

〒060-0809 札幌市北区北9条西7丁目

Tel. 011-706-2382 Fax. 011-706-4952

<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/>